

新世紀エヴァンゲリオンZ

カチドキホッパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第八使徒を倒してから数日、ワームホールから突然現れる怪獣。

そして異次元からやってくる光の巨人。

光の神話が幕を開ける

『シンジ！』

ウルトラ気合い入れるぞ！』

「ぜ、乙さん、恥ずかしいよお…」

※第一部旧劇編完結

第二部S I N編開幕

目次

旧劇編

| | | |
|-------|----------------|-----|
| 1話 | ご唱和ください我の名を！神話 | 1 |
| と光の巨人 | — | 1 |
| 2話 | 見上げた空、唸る筋肉 | 21 |
| 3話 | 雨、諦めた命の向こう側 | 33 |
| 4話 | 別離 見えない明日 | 41 |
| 5話 | 笑う絶望 | 57 |
| 6話 | 輝きの福音 | 73 |
| 7話 | 地球の意地 | 93 |
| 8話 | 邂逅 涙のない世界 | 104 |
| 9話 | 原初の光 | 116 |

| | | |
|-----|----------------|-----|
| 10話 | 真紅の絆・進化の光 | 125 |
| 11話 | リリン・カニバル | 139 |
| 12話 | インフィニティ | 149 |
| 13話 | TRYNITY・NEXUS | 154 |
| 14話 | アシタヲネガウヒカリ | 167 |
| 15話 | calling | 180 |
| 16話 | crazy bad love | 193 |
| e | — | — |
| 17話 | ゼツボウノヤリ | 205 |
| 18話 | THE LAST NAME | 213 |

| | | |
|---------|-------------------|-----|
| 19話 | 最後の決断 | 227 |
| 20話 | エピソード 果てなき未来へ | 251 |
| S I N 編 | | |
| 21話 | 幕間 シン | 259 |
| 22話 | N E X T S T A G E | 200 |
| 29 | | 265 |
| 23話 | 禁忌の箱 | 277 |
| 24話 | はじめまして | 286 |
| 25話 | 因果と呪縛 | 297 |
| 26話 | ただ一人の使徒 | 313 |
| 27話 | 覚醒する禁忌 | 320 |
| 28話 | シン・インフィニティ | |

| | | |
|-----|---|-----|
| 328 | | |
| 29話 | 偽りの墮天 | 340 |
| 30話 | パラドキシカル・ジャスティス | 348 |
| 31話 | w e l c o m e t o t h e t h i r d v i l l a g e | 355 |
| 32話 | 「後悔はチャンスの神様の前髪を掴み損ねた愚か者のすることだよ。」 | |
| 33話 | 終極地獄血戦カルヴァリ | 365 |
| ベース | | 379 |
| 34話 | ウルトラの誓い | 395 |

3
5
話

シ
ン
ジ
の
カ



404

旧劇編

1話 ご唱和ください我の名を！神話と光の巨人

時に西暦2015年

人類は使徒と呼ばれる巨大生命体の脅威にさらされていた。

しかし人類は対抗手段として人造人間「エヴァンゲリオン」を建造、その運用のため特務機関NERVを設立し第3新東京市に本部を構え迫りから使徒を撃退していた。

そのエヴァンゲリオンのパイロットとなるのは全員が14歳の中学生である。

パイロットの1人、碓シンジはNERV司令碓ゲンドウを父にもつが家族関係は破綻しており精神的にも優柔不断で他人の顔色ばかり見る傾向があった。

最近ではなぜか親子関係が徐々に修復されてはきているものの、未だ神事の心の傷は根深い。

そして現在マグマの中に潜む第8使徒を倒して3日が経過した。

学校で授業を受けていたシンジたちの端末が一斉にアラートを奏でます。

「ええ、緊急招集☒」

「この間使徒倒したばっかじゃない！」

そう不満を叫ぶのは惣流アスカラングレー。

エヴァンゲリオン2号機パイロットでユーロ空軍のエース、ドイツ人のクォーターだ。

美しい赤毛を持つ彼女はその綺麗な顔を不満に歪めている。

「仕方ないよアスカ。

あいつらいつ来るかわかんないし、僕らしか戦えないんだからさ。」

彼が碇シンジ。

黒髪短髪の華奢な体つき、整った顔だが自信のない態度が彼の魅力を打ち消している。

エヴァンゲリオン初号機パイロットとして少しずつ成長していた。

「招集、先、行くから」

そう言って1人だけ先に走り去っていったのは綾波レイ。

青みがかった銀髪、透き通る肌、赤眼といった人目を引く見た目である。

性格もどこか浮世離れしておりどこか人と一線を引いている。

自分達も遅れてはいけなさと慌ててネルフ本部へと走り出した。

それから30分後、彼らの姿はネルフ本部の作戦室にあった。

指揮を取るのは葛城ミサト1佐、作戦部長にしてシンジとアスカの保護者役でグラマ

ラスな美人だが酒が絡むと途端にダメになる残念な美人だった。

「なーんか不愉快なこと誰かが言ってる気がするけど後回しよ。」

状況を説明するわ。

今から30分ほど前、月の衛星近くで空間の揺らぎが確認されたわ。

現在まで使徒の出現は確認できていないけど、おそらく時間の問題よ。

よって、エヴァパイロット3名にあつて各機体内で待機。

こちらは光学映像で状況を確認次第作戦立案とします。

何か質問は？」

状況が判然としていないものの、決して楽観視できる状況ではない。

誰も質問することなく各機体のところへ向かつていった。

時は遡り一時間前

別世界の月面近くで翼を広げた鳥の形をした青い光の怪獣らしき生き物と青色の巨人が向かい合っていた。

『おいおい、ようやくキングジョーを送り届けたのにこんなところで怪獣と出会うなんて、ウルトラ困ったぜ。』

「Zさん！」

ワームホールが開いているうちに、こいつを倒してみんなのところへ帰りましょう」

青色の巨人の名はウルトラマンZ。

相棒のナツカワハルキと融合し、あらゆる怪獣や、世界をゲーム感覚で滅ぼそうとした異星人から地球を守り切ったウルトラ戦士だ。

相棒のナツカワハルキはど根性を取り柄の青年だ。

市民を守ろうとして命を落とそうとしたところをZと融合したことで蘇り、地球を守ったのちに宇宙を守りにZと旅に出ていた。

そんな2人がいるのは本来とは違う次元の月だ。

彼らがここへ来たのは、本来の地球で宇宙海賊バロツサ星人に戦闘兵器キングジョーストレイジカスタムを奪われたのがきっかけだ。

追跡中バロツサ星人の転移に巻き込まれこの次元に来てしまい、この地球のウルトラマンであるウルトラマントリガーⅡマナカケンゴと接触し、壊れた変身アイテム、ウルトラZライザーに代わりハイパーガッツスパークレンスを受け取り、バロツサ星人を倒した。

その後キングジョーを取り戻し元の次元に戻るため2人は宇宙へ旅立った。

その途中元の世界へ戻るワームホールを見つけキングジョーを送り込み、元の世界で所属していた部隊ストレイジとの通信で無事キングジョーを返還できたことを確認して自分達も戻ろうとしていたところ、突然見たこともない怪獣に襲われていた。

怪獣が光の光線を放ちながら近づいてくる。

今のオリジンの姿で避け続けていたが次第に追い詰められ――

『やばい、避けきれない！』

光がウルトラマンZを直撃した、が

『あれ、ダメージがないぞ！』

直撃の爆発もなければ、被弾のダメージすら感じさせない。

『なんだこの攻撃？』

どういう意味が…

どうしたハルキ！』

融合していたハルキが急に苦しみ出す。

「なん、だこれ！』

頭が、割れる…

く、来るな！

俺から何も奪うなああ！」

尋常ではないハルキの様子に焦りを覚えるZ。

変身を解くため一旦地球に戻ることにしたZ、早く帰ることより相棒の命が最優先

だ。

『くらえ』

ゼステイウム、光線!』

Zの必殺技を見舞うが

謎の光の壁に堰き止められる。

ならば、と方針を変えて地面に打ち込み煙幕がわりにして、すぐ地球に飛び去った。

『しつかりしろハルキ!』

くそ、なんだあの怪獣…ウルトラ強いぜ。

今はハルキだ、ケンゴたちに事情を話して一旦休ませるしか…』

なんとか地球にたどり着いたZ。

ケンゴたちの母艦ナースデッセイを探す。

その時休む間も無く背中に攻撃を加えてきたものがいた。

『な、なんだこんな時に…』

つてあれは…』

そこにいたのは赤い玉をコアとする機械の怪獣がいた。

『ギルバリス☒』

こんな時に生き残りがくるなんて…』

そんな時に援護射撃がやってくる。

黄色い戦闘機、ガッツファルコンだ。

そして隣に現れる太古の巨人、ウルトラマントリガーがやってきた。

『Zさん、どうしたんですか！』

帰ったんじゃない？』

『おお、ケンゴ！』

ウルトラタイミングがいいぜ！

月面で別の怪獣に襲われてハルキの様子がおかしいんだ！

外傷はないけど、どうも錯乱してて…

今からハルキを分離するから避難されてくれないでおじやるか？

その間、ギルバリスは俺が押さえ込む！』

そしてトリガーにハルキを託すとギルバリスと戦闘を始めるZ。

しかし地球で地球人と融合しないままでは当然パフォーマンスが落ち、次第に押され始める。

そして、いつのまにかギルバリスに抱えられて宇宙へ押し出されていた。

『ぬうおおおお、

離しなさいよコイツ！』

そして月の近くまで来ると先ほどとは違うワームホールが待ち構えていた！

『まずいー!』

今次元を移動したらハルキと離れ離れに!

ハルキイイ!』

Zの叫びも虚しくギルバリスはZを抱えたままワームホールへと飛び込んでいった。

そして舞台は第3東京市へと戻る。

緊急招集から1時間後、状況が動き出した。

司令室のオペレーター、マヤが叫び声を上げる。

「大変です!」

上空38万キロ地点、月面付近にワームホールが出現!

中から高エネルギー反応が…2つ☒

出てきます!」

突然の緊急事態に慌てふためく司令室。

同じオペレーターの日向マコトが冷静に到着時刻を計算する。

「このままでは20分後地上に落下が予想されます。

落下地点は…変ですね。」

第3新東京市と第二新東京の間です。

本来ならここに落ちてきてもおかしくないんですが…」

全員が疑問を頭に浮かべる。

これまでの使徒であればNERV本部を狙って侵攻してくるはずなのだ。

それであれば本部に落ちてきてもおかしくないが離れたところに落ちようとしている。

使徒ではないのか？

そう考えているところに、司令の碓ゲンドウの声で空気が変わる。

「総員、第一種戦闘配置。」

エヴァ各機のフォーメーションは葛城1佐に一任する。

現在のパターンは？」

「はい、双方ともパターンオレンジ！」

使徒とは、確認できません…」

現状使徒とは判断できないが危険な要素でないとは言えない。

各パイロットにも状況が伝えられ、各機体が落下予想地点付近に機体を配置される。

そして20分後

「目標、映像に出します！」

落下予想地点へ落下します!」

各機でも映像で確認できるのは青い人型の巨人と機械の怪獣だった。

「目標のパターン双方オレンジ。」

ですが、機械の怪獣らしき方にはコアのような部位が確認できます!」

コア、使徒の弱点とされる赤い球体。

波長パターンでは使徒ではなくとも使徒と同じ特徴を有している。

NERVにはそれだけで殲滅する理由としては十分だった。

碇ゲンドウの命令が下る。

「機械の怪獣を優先殲滅対象と断定する。」

第二目標である青い巨人型に関しては様子見、攻撃を仕掛けてくるようなら殲滅対象とする。」

そしてエヴァ各機は携行している大型ライフルをギルバリスに向けて構え、打ち出した。

ギルバリスも攻撃を予想していなかったのか全弾直撃、その衝撃で拘束が外れたZはなんとか着地した。

「ハハハ…」

というかギルバリスを攻撃したこの巨人たちは…?

なんだこの感じ……ウルトラ気持ち悪いぜ！』

Zはエヴァ達から感じる雰囲気は何か異様なものを感じていた。

しかし、優先すべきはギルバリスの撃退だ。

Zはギルバリスに肉弾戦を仕掛ける。

「殲滅対象に着弾、ATフィールド確認できませんがダメージは少ないようです！

また巨人が対象に肉弾戦を仕掛けています！」

やはり使徒ではないのか？

そんな疑問を頭の片隅に浮かべながらミサトはシンジたちに指示を出す。

「エヴァ各機、巨人の援護を！」

援護射撃程度でいいわ！

こちらに攻撃を仕掛けてくるようなら即時殲滅対象として攻撃を許可します！」

ギルバリスから飛んでくるミサイルなどをATフィールドで防ぎつつ、マシンガンで

攻撃を仕掛けるが決定打にはならない。

「巨人頼みなんて！」

スマートじゃないけど……！」

自分が仕掛けたいアスカだが、なかなか攻めに転じることができない。

そんな時、ギルバリスのミサイルがエヴァに電源を供給するアンビリカルケーブルに

被弾し、ケーブルが断裂した。

「エヴァ三機、活動限界まで残り240秒！

危険域です！」

エヴァの活動限界＝人類の破滅の図式が成り立つ世界だ。

本部司令室が静まり返った時

「ミサトさん！ 父さん！

僕たちは誰も諦めない！

だから指示を！」

それは普段人の後ろに隠れるシンジからの通信だった。

司令室に活気が戻る。

「各機援護ではなく対象を殲滅して！

全兵装の使用を許可します！」

そしてそれぞれ地上に設置されているウエポンラックから威力の高い銃火器を装備し撃ち続けた。

わずかにギルバリスを押し始めた時に異変は起こった。

活動限界まで2分切ったところでシンジがまずいと思ひ銃から日本刀型の武器マゴロクソードで切り掛かったのだ。

右腕を切り飛ばしたが、その一瞬がすきになった。

Zが思わずガツポーズを決めた瞬間、カラータイマーが高速で点滅し始めた。すでに3分の限界なんかとつくに過ぎていた。

そしてパワーダウンしたところでギルバリスのフルバーストを初号機と共に受け、地面に倒れ伏したまま動かなくなった。

「シンジイ！カッコつけたまま死ぬんじゃないわよ！

早く立ち上がれバカシンジ！」

「碓君！

今助ける！」

0号機と2号機がシンジを助けるために奮戦するも右腕以外のダメージは認められない。

「初号機パイロットバイタル確認できません！

強制心臓マッサージ、効果認められず……いやああああ！」

立ち上がる力を与えた男が死んだことが辺りに伝わる。

絶望が全員包み込みつつあった……

シンジが目覚めた時、辺りは暗闇に包まれていた。

あきらかにエントリープラグ内ではなかった。

『ああ、僕死んだんだ。』

驚くほど冷静に受け入れた自分の死、嫌だった戦いもこれで終わる。

でもみんな、あいつに勝てるかな？

そう考えていると

『起きなさい地球人。』

言葉通じてるの知ってるわよ。』

話しかけられた。

え、誰に？

声の方を見上げると先ほどまで一緒に戦っていた青い巨人がいた。

『私はウルトラマンZ。』

君はあの紫の巨人の中にいた少年だな？

名前を聞かせてもらえないか？』

ウルトラマンZと名乗る巨人。

「えっと、碇シンジです。」

『シンジ、落ち着いて聞いてくれ。』

君は死んだ。

ついでに私もウルトラやばい。

だがギルバリス、あの怪獣を倒すために力を貸してほしい。

私と融合して、あいつと戦ってもらえないでござるか。

そうすれば君も蘇ることができる。」

融合して戦う、蘇る。

非日常的な言葉に理解が追いつかない。

『あれ？』

言葉通じてない？」

「あ、通じてます。

日本語は少しおかしいけど…」

すげえ日本語だなと思うも

「けどすみません。

僕はもう、戦えません…

戦いたくないんです。

痛いのも！守れなくて泣くことも！

もう嫌なんです！」

自分の死という現実が今まで押さえつけていた感情を呼び覚ました。

大人たちから言葉で誘導され誤魔化し誤魔化し戦ってきたが、心はもうボロボロだった。

『…そうか、シンジ。』

君は傷つきながら戦ってきたんだな。

何も無理強いをするつもりはないんでつせ。

死して眠ることがシンジの望みならそれもまた一つの答えだからな。

だけど、』

Zは目線をシンジに合わせるようにひぎまづく。

『シンジはそれで後悔しないんだな?』

Zの言葉に思わず顔を上げるシンジ。

『人は守れず後悔するやつもいるんだ。』

もし少しでもシンジが誰かを守りたいなら力を貸しましょう。

シンジも私の戦いに力を貸してくれたしな。

人生は一度で人の命は儂い。

だから、後悔のない選択をしてほしい。』

シンジの脳裏をNERVに来てからの記憶が通り過ぎていく。

『おかえり、シンちゃん』

『すごいわシンジ君』

『おはよう碓くん』

『ちよつとだけ、感謝してるわよバカシンジ』

『シンジくん』

『シンジくん』

『シンジくん』

『シンジ！』

『碓！』

『…さすがは私の息子だ、シンジ』

僕の答えは…

「Zさん…」

『どうするシンジ？』

「僕に、力を貸してください！」

その答えにZの顔が一瞬笑った気がした。

そして光がシンジの元に降りてきて…

白い銃とUSBのような鍵になった。

『それはハイパーガッツスパークレンス。

ほんとは別に道具を使っただけだな。

今はこれを使ってる。

さあ、キーのボタンを押して起動しちやいなさい!』

シンジはUSBのボタンを押すと音声で鳴り響く。

ウルトラマンZ! アルファエッジ!

『お、うまく起動できましたな。

スパークレンスの底にキーを差し込んで銃身を開くのです。』

シンジがキーを差し込むと

ブートアップ! アルファ!

と鳴り響き、銃身を開くとモニュメントが現れる。

そして自然に言葉が口から出た。

「宇宙拳法! 秘伝の神業!」

『そして気合を入れて叫んだらトリガーを引くんだ!』

「え、叫ぶんですか?」

『そうじゃぞ!』

いくぞ、

ご唱和ください我の名を！

ウルトラマンゼエーツト！』

こうなつたらなんでもやつてやる！

「ウルトラマン、ゼエーツト！」

あたりを光が包み込み、気付けば自身が巨人・ウルトラマンZになっていた。

『シンジ、お互いに限界が近い！

一撃で決めるぞ！』

「はい、Zさん！」

そして両拳にエネルギーを集め、軌跡でZを描き…

『ゼステイウム、光線！』

全エネルギーを込めてギルバリスに打ち込み、

破壊した。

そして光に包まれその場から消えた。

それからシンジが目を覚めたのは3日後だった。

いつもの病院、見慣れた天井。

見慣れないのは、ベッド横にあるスパークレンスとキーだった。

「あれは、夢じゃなかったんだ。

ありがとうZさん…」

ところ変わってネルフ本部の司令執務室。

ゲンドウと冬月副司令が神妙な顔持ちで話し込んでいた。

「碓、あんな巨人が出てくるなんて俺は聞いていないぞ。」

「ああ、私の方にも朝ゼーレの老人たちから連絡が来ていた。

おそらくはあれは死海文書にすら記載のないイレギュラーだ。

もしくは誰にも知られていない外典が存在するのか…

しかし計画に変更はない。」

組んだ手の隙間から笑みをこぼすゲンドウ。

『シンジが無事だったのだ。

あの巨人のことなど、それに比べたら大した問題ではない。」

お父さん、子煩悩出てます

2話 見上げた空、唸る筋肉

「シンジくん、おかえりい！」

しばらくは訓練もさせないからのんびりしていいわ。

だって心臓が止まってたんだもの、ほんとに、ほんとに…

心配したんだからあ!!？」

目が覚めて四日後、無事退院できたが迎えにきたミサトだが早速号泣さら抱きつかれた。

一緒に来ていたアスカにも抱きつかれた。

そうそう、意識が戻らない時に父さんが見舞いに来たんだとか…

雨どころか使徒が降ってくるかもしれない。

ちなみに妙な停電騒ぎが入院中あったが、どうやら第9使徒の影響らしいのだがアスカたちが倒したそうな。

そんなこんなで日常生活に戻ったところ、技術顧問赤木リツコ博士に呼び出された。

「シンジくん、体調に異変はない？」

「あそこから息を吹き返すなんて信じられないけど……
もちろん結果が良かったことについては私も同意だわ。」

「あなた、あの戦闘から変わりは無くなって？」

「いつ怪獣が来てもいいようにスパークレンス持ってますとか言えないなあ。
「いえ、全く。」

「ちよつと体調がいくらいですよ。」

「とりあえず無難な答えを笑顔で答えておく。」

「それでシンジくん。」

「この間の巨人について何か知ってるかしら？」

「あなたたちはあの怪獣の攻撃で倒れて26秒ほど身体接触が見られたわ。
名称なんかも知りたいわね。」

「ウルトラマンZのことですか？」

「しまったと思ったがもう遅い。」

「ウルトラマンZ？」

「それが彼の名前なのね！」

「シンジくん、彼とやはり接触したのね！」

「他には何が目的とかは言ってたのかしら？」

興奮しながら聞いてくるリツコにひきながら

「いえ、意識がない間に夢？の中でその言葉が出てきたので、彼の名前としてそう呼んでいます…」

嘘だけど、と思いながら伝える。

「なるほど…」

潜在意識下での接触があつたのかもしれないわね…

わかつたわ、また聞くからよろしくね。」

やっとリツコに解放されたシンジは胸を撫で下ろしながら帰路へついた。

自分がゼットさんと融合できるなんて知られたら…まずいなんてもんじやない。

「…司令、私です。」

やはり初号機パイロットと巨人は接触があつたようです。

名をウルトラマンZというそうです。

はい、本人はそれ以上わからないとのこと…

ええ、またわかりましたら報告いたします。」

リツコは碇司令の命令でシンジが巨人と繋がりが無いか探っていた。

個人的にもエヴァの操縦に影響がないのかも知りたかつた。

「しかし子煩悩よねえ。」

あれで接し方が不器用すぎるなんて…

ふふっ、見ていて飽きないわ」

ところ変わってアパートの廊下

あと15メートルで部屋へ辿り着くというところで

『シンジ、シンジ。』

時間あつたらキーのスイッチを2回押しなさい。』

Zの声が聞こえたので言われた通りキーを2回押しと…

空間が裂け四角形の出入り口が出来上がった。

恐る恐る中へ入ると同じくらいの大きさに縮んだZがいた。

『シンジ、無事でよかった。』

もし私に話したいことがあればこうやって部屋にくるといい。

それとあと二つのキーを渡しておく。

パワー特化のベータスマツシュ、超能力が使えるガンマフューチャーのキーだ。

シンジの記憶を見させてもらって、使徒と戦っているのは理解した。

だが、この間のように怪獣が紛れ込んでくる可能性もゼロじゃないぞんす。

私がかつちに来た時開いたワームホールの影響だ。

使徒との戦いでどこまで役に立つかは分からないが、もし危機を感じれば私の力も

使ってほしい。』

今日はキーを渡すのと話をするのが目的だったらしい。

そして翌日、自分が以前迂闊にも考えてしまったことが現実となるとは知らず。

「マグノリア観測所からの連絡通り宇宙空間にて使徒を確認！」

パターン青、ATフィールドを有する人類の敵が宇宙空間でその存在を確認された。

光学映像ではオレンジ色の目のような形をした物体が浮かんでいた。

アホほどの爆雷を喰らっているのに影響ゼロ。

ATフィールドが強すぎるようだ。

『はあ』

素手でうけとめるう』

シンジとアスカの声がシンクロする。

「そうよ、落下予測地点が不明な以上エヴァ三機による広域カバーで受け止めるのが最も可能性の高い作戦よ。」

配置の根拠は女の勘、勝算は神のみぞ知るってところね。」

「なんたるアバウト」

アスカが毒づくがいつものキレがない。

パイロット全員がこれ以上の作戦を提示できないのがわかっているからだ。

「みんなの力を貸してちょうだい！」

奇跡を起こすために。」

そして各機が配置され、状況が始まる。

『これ以降は各機の判断によって行動してください、碓司令と冬月副司令がいない今、全ての責任は私が負うわ。』

支援は惜しまないからなんでも言っちょうだい。

それでは、作戦開始！』

ミサトの通信で気合を入れて各機が使徒の落下予想ポイントへ向けて走り出す。

「くっ、早い！」

私じゃ追いつかない……」

アスガが目標を追う。

が、落下速度が早すぎて追いつかない。

しかし、

「僕がなんとかする、ミサトさん！」

シンジの呼びかけに即座にミサトが応える。

「緊急コース形成、8番から32番全部上げて！」

第3新東京市の兵装を運用し、初号機の走る道を作り出していく。

ひたすら走り続ける初号機の前にフィールドが展開され、次第に加速し、音速に達したことで辺りの車が吹き飛んでいく。

跳躍、そしてたどり着いた決戦の地。

肉眼でも確認できるほどの距離に使徒は迫っていた。

一番小さい胴体ですらエヴァの全長の倍はある。

僕が止めなきや

「ATフィールド、全開！」

何人をも拒む不可視の盾が初号機を中心にあらゆるものを拒絶する。

そして使徒のフィールドとぶつかり合った瞬間

ドンッ

これまでにない圧力がのしかかる。

あまりの重量に受け止める初号機の腕がひしゃげる。

シンクロしているシンジの両腕には当然、腕をミンチにされる痛みがフィールドバックする。

涙が止まらない、だけど死んでもここだけは譲らない。

そこはアスカと綾波が走り込んでくる！

3人のフィールドならば：

徐々に押し返しだし、勝てると思った刹那

使徒の中心部からエヴァサイズの人型使徒が迫り出してきた。

「こいつ、まだこんな切り札を！」

「しやらくさいわね！」

アスカが2号機にカッターナイフ型の装備、ソニックグレイヴを持ちコアを引き裂こうとするが：

「避けた☒」

コアが人型使徒の周りを縦横無尽に動き出した。

エヴァ3機が翻弄される中、人型に迫り出した部位の両腕が槍のような鋭利な形状に変化し、初号機の両腕を貫く。

「ぐう、ああああああ！」

シンジの声にならない悲鳴が辺りに響く。

アスカと綾波にも焦りが浮かぶ。

早くコアを壊さなければシンジが壊れる。

その焦りを嘲笑うかのようにコアの動きは激しさを増す。

そして内部電源による稼働時間も1分を切ろうとしていた。

『シンジ、相手がエヴァを貫いている今なら変身しても体が支えられるから正体がバレないぞ！』

あのコアを抑えるならベータスマッシュだ！』

Zのアドバイスにそれなら、とキーを取り出し2回スイッチを押す。

ウルトラマンZ！ベータスマッシュ！

異空間に体を滑り込ませ、頭に浮かんだ言葉を力強く唱える。

「真つ赤に燃える、勇気の力！」

ブートアップ！ベータ！

スパークレンスを變形させ、準備は整ったとZを見上げる。

Zも頷き返し、

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンゼエーット！』

Zの言葉に応えるように痛む手でスパークレンスを天に掲げてシンジも叫ぶ。

「ウルトラマンゼエーット！」

そして迫る使徒の前に真紅の巨人が立ち塞がる。

ウルトラマンZベータスマッシュ。

目の部分を赤いマスクで覆ったガチムチ体型の戦士。

見た目通りパワー特化の姿だ。

「この前の巨人！」

「ただどなんか違う！」

司令室でも騒ぎになり始めた。

謎の存在であった巨人が姿を変えてまた現れたのだから。

混乱をよそにZは使徒の人型にアッパーを決め、コアをアメフトの要領でキャッチする。

これはエヴァ数機がフィールドを中和しているからできる芸当だ。

そしてZがアスカを見る。

「いまだ、とどめを刺せと言わんばかりに。」

「はっ！」

「あんたに言われんでも！」

「わかってるっちゅーの！」

そしてアスカの武器がコアを貫き、ダメ押しとばかりに2号機の膝蹴りをお見舞いした。

圧倒的質量を持った使徒が形状崩壊を起こして辺りを血の海に染め上げるが、疲労困

億のパイロットたちにそれに突っ込む余裕はない。

変身を解いたシンジもプラグ内でぐったりだ。

腕も痛くて上がらない。

そんな中宇宙に行っているゲンドウから通信が入った。

「話は聞いた。

よくやったなシンジ。

腕はゆっくり治せ、ではな。」

父に褒められた。

それだけで…

シンジは僅かな満足感に満たされながら目を閉じたのだった。

同じ時、地球上のどこか

「サハクイエルのあの形状、死海文書には記述がないぞ！」

「どうしますか議長？」

「この僅かなずれが、いずれ我々にもコントロールできない事態を招くと思われませんが？」

議長と呼ばれた男、キールローレンツが頭をあげる。

「イレギュラーの元凶がああ巨人化は不明だ。

しかしあと8体の使徒を倒し、約束の日を迎えることこそがリスとの契約。

そのための戦力の足しとなるのなら、ああ巨人も利用させてもらおうではないか。」

同時刻、宇宙では

「碓、ああ使徒の形態は計画にはなかったはずだが…」

「ああ、今ごろ老人たちは慌てふためいていることだろう。

ああウルトラマンZと呼ばれる巨人を、倒すのか戦力とするのかでな。

我々は我々の補完計画を進めるだけだ、例え神の理やああ巨人と対峙することになってもな。」

「お前の背中を見せても息子のためにはならんとするか。

私はそうは思わんがな。

シンジくんがいい加減可哀想だが。」

「冬月先生、あの子は自慢の息子です。

私の背中など見なくても、立派な大人になってくれますよ。

あの子の未来のために、今は辛い思いをしてもらいます」

仮にこの戦いで死んだとしても、計画が成就すればまた3人で暮らせるのだから。

3話 雨、諦めた命の向こう側

第11使徒襲来。

細菌型の使徒で、ネルフのスーパーコンピューター、マギのハッキングを狙うも紙一重の差で赤城博士に阻まれる。

この3行の説明で終わるほど何もなかった。

いや、正確にはさまざまな努力や対策が身を結んだのだがエヴァが出撃していない以上多く語ることがないのだ。

第10使徒の襲来から1ヶ月経った。

その間に第11使徒を倒し、残る使徒はあと7体となった。

大破したエヴァの修理も終わり、いつ使徒が来てもいいとおもっていた。

そんな時だった。

第12使徒レリエル襲来。

初号機が使徒の影、いや本体に飲み込まれて3時間が経過した。

「N2爆雷108機の爆破でシンジを救い出す☒

バカ言ってるじゃないわよ！

あいつを殺すって言うてんの、わかっただけでしようね☒」
アスカの怒声が使徒対策の本部で響く。

赤木リツコ博士の提唱による作戦、高火力爆弾により使徒の内部にある宇宙を満たし、使徒殲滅と同時に初号機を回収。

ここに、パイロットの生死は計算に入れられていない。

「何度も言わせないで、アスカ。」

この戦いではエヴァが最重要なの、バックアップたるパイロットはいくらでもあるのよ。

「彼だけじゃなく、あなたもね。」

提唱者は声を荒げるパイロットに冷たい視線を送り、作戦を詰め始める。

アスカは、いや、レイもミスサトも誰一人納得がいていない作戦だが、どうやって突破口を開こうか誰も思いつかないのだ。

まだ作戦は司令まで上がっていない。

だが、状況的に承認される可能性は高い。

シンジの死までのカウントダウンは残り八時間。

エヴァの内部電源が切れるまでが勝負なのだ。

そんな頃シンジは

「はあ、真っ白な景色変わんないなあ。」

電源を少しでも伸ばすために抗わないで待っていた。

最初こそパニックでどうしようか慌てふためいたが、どうしようもないことに気づき大人しくしている。

きつとみんなが助けてくれるさ。

そう信じて疑わない。

外ではエヴァだけを救い出す作戦しか考えられていない。

気づけばどれだけ経ったんだろう。

LCLが濁り出した。

寒い、寒い。

死ぬんだろうか…生きたい、生きたい!

『シンジ……シン……シン……シンジ!』

頭の中に鳴り響く声にハツとするシンジ。

この声は…

「ゼットさん!」

『シンジの生きる力が減少して私の声が届かなくなった時は冷や汗が出たでござるよ。』

こいつはウルトラ厄介な使徒でございませなあ。』

「ゼットさん、僕はもう無理です。」

相棒失格ですよ…。」

また死の淵に立たされてネガティブモードに入るシンジ。

『そうだな、俺の本来の相棒のハルキと比べたらダメダメですぞ。』

「ハルキ…:さん?」

シンジがようやく顔を上げる。

『そうだ。』

ハルキはなんの才能もなかった。

だけど持ち前のど根性だけでどんな困難も振り払い、ついに世界を救った相棒だ!

シンジ、私は君にもハルキと同じかそれ以上になれると信じている。

君は誰より優しい男だ。

誰かのために戦える、ウルトラ強い男だ。』

Zの言葉に涙が止まらないシンジ。

そして涙を流し切ったあと

「ゼットさん、僕に力を貸してくれますか?」

『ああ、待ってたでございませすよ!』

さあ、この逆境を跳ね返す、変幻自在の光を見せてやろう！」
ウルトラマンZ！ガンマフューチャー

「変幻自在、神秘の光。」

ゼットの言葉で生きる力を取り戻したシンジ。

キーをゼットし銃身を開いて空に掲げる。

ブートアップ！ガンマ！

『ご唱和ください我の名を！ウルトラマンゼエーット！』

「ウルトラマン、ゼエーット！」

赤と紫のゼットが空間を超能力で切り裂いていく。

朝の光に包まれていた世界はすっかり星の煌めく夜になっていた。

初号機を抱えて外に出てきたZは、辺りを覆う爆弾に驚く。

『なんだこの爆弾の数…』

シンジを殺す気か☒』

ゼットの超能力で爆弾を影の中に移動、自分たちの出てきた空間を塞ぎ、

『ガンマイリユージュオン』

赤い巨人、紫の巨人、青い巨人を呼び出し4身一体の光線を放ち内部爆発を起こさせ、

第12使徒を打ち破ったのだった。

「シンジまた入院ね」

今回は珍しくアスカがつきつきりで看病してくれていた。

ミサトに聞くと、リツコが提案した爆発案に最も食ってかかっていたのがアスカなんだとか。

アスカには感謝しても仕切れない、おまけに看病もしてくるなんて

「ほんとアスカは優しいよなあ」

どうやら思っていたことが口に出していたらしい。

顔を真っ赤にしたアスカが背を背けるが、体を僕の方に預けてくる。

「あのね、シンジ。」

私、あんたを守るわ。

あの巨人にだって譲らない、あんたの隣にいるのは私だもの！」

同時刻、司令部

「赤木くん、パイロットの人命を無視した作戦を押し通そうとしたというのは本当かね？」

いつも仏頂面、何人殺したかわからない雰囲気を放つ碓ゲンドウ。

彼が今、明らかな怒りをこちらに向けている。

「本当ですわ。」

この戦いに勝つためにはエヴァが最重要。

司令もそれはお分かりのはずです！」

リツコのいうことも一理ある。

あるが…

はあ、つとゲンドウはため息をついた。

「赤木くん、大人の果たすべき責任が何かわかるかね？」

子供たちに明るい未来を用意することだ。

我々だけでは勝てないこの戦いに、子どもたちを巻き込んでいるということ思い出したまえ。

子どもたちに戦えないわたしたちのケツを拭かせているのだよ。

最優先すべきはパイロットの命、次にエヴァだ。

履き違えるな、赤木博士。

話は以上だ、出ていきたまえ。」

リツコは浮かぶ涙をみせぬよう足早に司令室を去ろうとするが

「ああ、待ちたまえ赤木くん。」

君に開発関係を一任して苦勞をかけているのは私だ。

君には本当に頭が上がりません。

ほんとうにありがとうございます。

だが、もう少し子供たちを、パイロットとしてではなく人として見てあげてほしい。引き止めてしまつてすまない。」

ゲンドウの優しい言葉に司令室を出てから涙が止まらないリツコだった。

「またウルトラマンZに救われたな、碓」

「ああ、残り6体の使徒と戦うにあたって、同じような危険な目にあう可能性もある。

一刻も早く、ダミープラグを完成させねばな」

4話 別離 見えない明日

アメリカの支部において建造中のエヴァンゲリオン4号機消滅。

消滅したのはエヴァだけでなく、基地そのもの。

その様子は衛生カメラからもはっきりわかるほどの惨劇だった。

「で、うちのエヴァ大丈夫なんでしょうね？」

この事故を受けて緊急招集を受けた臨時の副司令以下の主要メンバーの会議。
作戦部長のミサトがりツコに厳しい視線を送る。

「4号機の内容は！」

赤木先輩にも、詳しくは開示されていないんです…」

オペレーターのマヤが庇おうとするが途中失速する。

「4号機は、N2機関搭載のテストベツト。」

エヴァのエネルギー問題を解消するための実験機体、だったらしいわ」

タバコをふかしながら語るリツコの横顔に余裕はない。

なぜなら副司令からもたらされた内容、米国で建造中の3号機をNERV本部で預かることとなったということに危機感を覚えていないものはいない。

同じ国の機体なのだ、心配するなという方が無理である。しかし、上部組織ゼーレは3号機の本部運用を後押しし、日本政府もそれを受け入れると表明してくれやがったのだ。

司令が頑なに拒んだが、結局は押し切られた形だ。

「パイロットは新たにフォースチルドレンを選出します。」

人選については松代の機動実験後に通達します。」

リツコの言葉に言いようのない不安を覚えるシンジ。

その日はそれで解散となったが眠っても翌日学校に行っても不安は拭えなかった。

翌日の昼食時間

「さあ、飯や飯ー！」

昼飯は学校最大のイベントやでえ！」

シンジの親友、いや悪友の鈴原トウジのこの言葉で昼時が始まるのが通例だ。

だが今日は

『鈴原トウジ、至急校長室まで』

非情な放送がトウジの昼時を潰した。

「はあ、なんやろ。」

すまん、シンジ、ケンスケ。

さきに食べといてくれ。」

そう言つて教室を出て行つたトウジは結局、昼休憩どころか終礼が終わるまで帰つて来なかつた。

終礼後戻つてきたトウジは

「シンジ、2人で帰らんか？」

と誘つてきた。

いつも3バカで帰るか、アスカと2人で帰ることが多かつたので意外ではあつたがすぐ帰ることにした。

帰りに駄菓子屋で棒アイスを買ひ食ひしながらよく溜まつている公園のベンチに腰掛ける。

なんとなくだけどトウジらしくない、そう感じたシンジは

「トウジ、何か話したいことがあるんじゃないの？」

と切り出してみた。

じつと空を見上げていたトウジがぼつりと漏らす。

「なあシンジ、エヴァに乗るのってどんな感じじゃ？」

怖いんか？」

あまりに予想外の問いに固まるシンジ。

構わずトウジが続ける。

「今日あの金髪の博士が来てな。

エヴァにのる条件として妹の入院代を超える報酬をくれるってな。

お前が自分の出撃報酬からこっそり妹の入院費用払つとる代わりにな。」

思わず腰を上げるシンジ。

そしてトウジに胸ぐらを掴まれ殴り倒される。

「何格好つけてんねん自分！

俺らはなんや、ダチやろ☒

なんや、同情か？

そんなもん嬉しくもなんともないねん！」

手を掴まれ立たされるシンジ。

「これからはワシもパイロットのお仲間入りや。

せやから、ダチとして、お前を守る。

これで貸し借りなしや！」

トウジがエヴァにのる。

最も信頼のおける友が仲間になる、そのはずなのに。

シンジの不安は大きくなる一方だった。

そして3日後、予想は最悪な形で現実となった。

松代の実験場の爆発。

実験に参加していたミサト、リツコたちの安否は不明。

そしてエヴァ3機の出撃が決まり、駒ヶ岳防衛ラインに配置された。

やがてあらわになる目標。

山の影から現れたのは

悪魔のような黒いエヴァだった。

夕日を浴び、その影が不気味さを増させる。

「目標…だってこれは、エヴァじゃないか！」

ありえない、だってこの機体には…

『分析パターンでました。』

…青です。』

無情にも告げられる解析結果は、トウジへの死刑宣告。

『目標を第13使徒と識別。』

即時殲滅せよ。』

この時ほど自分がNERV司令の息子であることを恨んだことはない。

その時アスカから通信が届く。

「シンジ！」

これに乗ってるのは…あいつなんでしょ？

アタシがなんとかするから、もしもの時は頼んだわよ！」

そこで通信を切ったアスカ

アスカにはわかってた。

シンジにアイツは殺せない。

なら、アタシがアイツを…

そして会敵する2号機。

マシガンンを構えるが…

『2号機、信号ロスト！』

『0号機、まもなく会敵…』

嘘だろ、0号機も信号ロスト！』

通信で入る断片的な内容がシンジをなぶる。

アスカもレイも使徒戦においての経験値は高い。

これほど簡単にやられるはずがない、であれば考えられることは一つ。

これまでの使徒より手強く、もうトウジの意志はそこにはないということ。

わかってる、わかってるけど…！

操縦桿を握り直したシンジの目の前に悠然と3号機が歩いてくる。

そして、向き合うシンジと3号機。

こう着状態が続き、相手の出方を伺うシンジだが：

次の瞬間、目の前から3号機が消えた。

気づけば押し倒され首を絞められている。

そこから使徒の侵食をうけていた。

『接触部位から使徒の侵食を受けています！』

第7頸椎まで侵食！』

このままでとやられる、なんとか3号機の手を押さえて外させるが：

次の瞬間、3号機の肩パーツが弾け飛び、人の手のような物が伸びて初号機の首を締め上げていた。

やばい、意識が：

そんな時にゲンドウから通信が入る。

『シンジなぜ戦わない？』

首を絞められるがなんとか答える。

「トウジが、友達が乗ってるんだ！」

『構わん、そいつは使徒だ。』

人類の敵だ。

戦わなければお前が死ぬぞ。』

「いっよー！」

友達を殺すよりは全然いい！」

『お前は、友の手を自分の血で染めさせる気か。

もういい、そこで黙って見ていろ。

初号機のシンクロを全面カット。

ダミーシステムを起動させろ！』

首を襲っていた圧迫感が消える、どうやらシンクロを切られたようだ。

ゲンドウとマヤが何やら揉めている声が聞こえる……と思った次の瞬間、プラグ内から聞きなれない機械音が響いていた。

そしてシンジの四肢は拘束され、外の映像も見えなくなる。

『システム解放、攻撃開始。』

ゲンドウの声と共に動き出す初号機。

そこにシンジの意思などない。

伝わってくる3号機を殴る感触、振動。

いや、それだけじゃない。

これは…そんな生やさしいものではない。

「なんだよ、父さん…」

どうなってるんだよ。

なにやってるんだよ!」

きつと答えなどない。

だが問わずにはいられなかった。

無駄な足掻きと知りながらも、機体を止めるために操縦桿を動かすシンジ。

やがて振動が止まる。

止まってくれたのか初号機…

だが安堵は次の瞬間絶望は変わる。

軋む音、何かを握っている初号機。

この形、音…まさか☒

「やめろ…やめろおおお!」

シンジの叫びは届かず、初号機はそれを…

3号機のエントリープラグを握りつぶした。

『パターン、消滅。』

使徒、殲滅されました…』

人類の敵への勝利、だがそれを喜ぶものなど誰一人いない。

ミサトは瓦礫の中で目を覚ました。

辺りは夜の闇を纏っている。

傍にはかつての恋人、梶リヨウジがいた。

「葛城、無事でよかった。

リツちゃんや、他の職員にも奇跡的に死者は出てない。」

安堵するミサト、しかし思い出した。

「3号機は☒」

梶は顔を曇らせ目を逸らす。

「…使徒として処理された。

初号機の手で。」

ミサトは後悔した。

3号機パイロットについて最後までシンジには伝えていなかったことを。

トウジがシンジに打ち明けたことなど知る由もない。

「シンジくん…」

『やめろ、シンジくん！』

自分が何をやっているのかわかっているのか☒

司令の判断がなければ、君が死んでいたんだぞ！」

NERV本部は甚大な被害を被っていた。

使徒ではなく、エヴァ初号機の手で。

「そんなの関係ないよ。」

初号機の内部電源の残り120秒、これだけあれば本部の半分以上を壊せるよ。

父さん、よくも僕の手でトウジを殺させたな！

同じ目に合わせてやるよ！」

『落ち着いて話を聞いてシンジくん！』

それにまだ、鈴原くんの遺体を確認できていないの、まだ可能性はあるわ！

だから落ち着いて！」

普段は歳が近くシンジが姉のように慕い、お互い本当の姉弟のように接しているマヤの言葉ですら今のシンジには届かない。

「関係ないって言ってるでしょ！」

あまり僕を怒らせないでよ。

あいつは、父さんは僕に友達を殺させようとしたんだ！

それだけで十分だよ！」

『落ちて着けシンジ！』

流石に見てられないぞ。』

使徒戦の間消耗していたエネルギーを補充するため意識を失っていた乙がこのタイミングで目覚め、全てを察してシンジを止めようとする。

「ああ、乙さん。

今まで何してたんですか？

あいつらは悪なんですよ…

だから、あいつらを消すために力を貸せよ！」

乙の言葉すら届かない。

そして無理矢理にキーを起動しようとするが乙の力でロックをかけているため起動しなかった。

だが、そのキーに黒いオーラが集まりつつある。

『やばい、シンジ、闇に堕ちるな！』

仕方ない、歯を食い縛れよ！』

シンジの心の闇がキーを染め上げようとしていた。

そのキーで変身したら誰も止められなくなり、シンジも元には戻れなくなる。

乙が選んだのは、シンジと物理的に離れて力で止めることだった。

シユワ!

Zが初号機を薙ぎ倒す。

暴れようとする初号機に沈静のエネルギーを流し込み、動かなくなるのを見届けたあと空へ旅立っていった。

シンジが目覚めたのは病院のベッドだった。

起きてすぐ手錠で拘束され、司令室に連れていかれる。

「エヴァの私的占有、稚拙な恫喝、司令である私への殺害予告。

何か申し開きはあるか？」

「ありません。」

僕はもうエヴァに乗りたくありません。」

「そうか、なら出て行くといい。」

シンジが踵を返すと

「シンジ、お前に伝えねばならないことがある。」

鈴原くんは一命を取り留めた。

複数箇所の骨折程度で済んだようだ。

お前が最後にシステムを上回ったおかげかわからんがな。

だが使徒に汚染された可能性があるため隔離する。

ここを去るお前には関係ない話だったか。

：最後に聞かせろ、初号機の中で話していたのはあの巨人、ウルトラマンZか？」
トウジが生きていた。

しかしここから逃げ出す自分に、それほどの重傷を負わせた自分に安堵する資格はない。

「さあ？」

僕も自暴自棄になっていたし、よく覚えていません。

トウジのこと、よろしくお願いします。」

それから3日ほど入院して、2日ほど自宅の整理をして、ミサトの家を出ることにした。

「NERVを出てもしばらく監視がつくわ。

それから携帯、忘れてるわよ。」

「必要ありません。

ここに置いていくものですから。」

シンジは全てを捨てて出ていくつもりだった。

自分を倒してからZの声は聞こえず、スパークレンスも無くなっていた。

もう戦わなくていい。

エヴァに乗らないと決めた、だから全てを捨てて出ていく。

「友達から何件か留守電来てたわよ。」

…シンジくん、あなたが結果的に友達を傷つけてエヴァに乗る理由に失望したのも知ってる。

でも私やアスカのようにあなたのことを大事に思っている人もいるわ、だからここに…！」

ミサトが掴もうとした手をシンジは振り払う。

ミサトが最後に寂しそうに呟く。

「…アスカがね、見舞いに行くと自分も怪我してるっていうのにあなたのことばかり心配してるの。」

あいつは大丈夫なのか、退院したらアタシがあいつを笑顔にしてやるんだって…」
アスカがそんなことを…

でもごめん、僕には君に心配してもらうような価値はないよ。

「僕はもう、誰とも笑えません。」

2人を阻むように玄関の戸が閉まった。

もともと住んでいた場所に戻るため、外行きのモノレールに乗る。

人の往来が激しい。

満員電車の中で揺られている。

しかしそこで不意にアナウンスが流れる。

『ただいま非常事態宣言が発令されました。』

この電車は最寄りのシエルターへと移動します。」

ああ、このタイミングで来るのか。

「…使徒だ。」

5話 笑う絶望

『第二次防衛戦突破！』

それに…

え、嘘だろ。

現在まで完成していた32層の防御壁、蒸発！

地上迎撃間に合いません！』

第14使徒、最強の拒絶タイプ。

死海文書にも力の使徒と記される圧倒的なパワーと防御を誇る最強の使徒だ。

その骸骨のような仮面は、抵抗する人類を嘲笑うかのような形をしていた。

「迎撃はジオフロント内で行います！

オフエンスは2号機、援護は0号機、

アスカ、レイ、行けるわね！」

ミサトの問いに力強く頷く2人はすぐさま機体へ走り出す。

「葛木1佐、初号機はダミープラグで起動させろ。

もうシンジは、いない。

今回の使徒は圧倒的な火力だ。

全兵装、装備の使用を許可する。」

ゲンドウがこの指示をする意味：

ある意味大一番の戦いだと誰もが感じる。

そしてジオフロント内に配置した2号機には改良型ポジドロンライフル、0号機にはサブマシンガンが装備される。

ジオフロントへ降下してくる使徒はさながら死神のように見えた。

だが死ねない理由はこちらにもある。

「レイ！

とつとどこいつを倒して、あのバカを迎えに行くわよ！」

「わかってるわアスカ。」

碓くんの帰る場所は私たちが守るもの。」

都市兵装、エヴァの圧倒的火力による砲撃が使徒を飲み込むが…

「効いてない☒」

アスカの驚愕が響く。

『大変です、使徒からATフィールドの発生を感知できません！

なんらかの理由で攻撃が当たっていないものと判断します！

パターンは青ですが若干ノイズが：なんらかのものが混じっている？』
そんな中使徒の攻撃が辺りを蹂躪する。

フィールドを攻撃に転用したビームと、変形してハンマーや槍になり対象を貫く両腕。

まさに最強の使徒と言えた。

そしてその姿が、なぜかぶれて見える。

あたりには笑い声のような不気味な鳴き声が響いている。

「なるほど、ただの使徒ではないようだな。」

初号機の起動まだか。」

「ダメです、初号機、ダミーを受け付けません！」

なぜだ。

なぜ私を拒絶する、唯！

「冬月先生、少し頼みます。」

そしてゲンドウは初号機を起動させるためケージへ向かった。

「ほんとなんなのよこいつ！」

レイ、近接は逆に狙われるわ！

遠距離でダメージを与えるしかない！」

エヴァは攻めあぐねていた。

そこにいるはずなのに攻撃が当たらない。

そんな時、空から光が飛んできた。

シユワ！

ウルトラマンゼットだ。

『こいつ、なんでグリーザと融合してるんだ☒』

くつ、シンジは頼れない：

あれ、そもそもシンジのエヴァがないぞ☒』

シンジがいけないことに驚く乙。

目の前の敵は残念ながら現状では倒せる確率がゼロに近い相手だった。

虚空怪獣グリーザ。

それが第14使徒、ゼルエルが取り込んだ怪獣の名前だった。

この世の歪みと言える存在で、ゼルエルは融合の際に守るためにATフィールドを使えなくなっていたが、存在が矛盾しているグリーザと混ざり合って攻撃の大半が通らなくなっていた。

攻撃を当てるためには圧倒的なパワーか矛盾を打ち砕く力のどちらかが必要だった。

『やむを得ん！』

碇、槍を出さねば勝てない相手だ。

ロンギヌスの槍を出すぞ。』

ロンギヌスの槍、それは地下でリリースに刺さる神器。

冬月の判断とゲンドウの承認により0号機が地下に取りに降りた。

その間2号機とゼットでの足止めが行われたが：

圧倒的な力の前になすすべもなかった。

最初に倒れたのはゼットだった。

融合していない状況で、2号機の盾になりビームを大量に喰らい吹き飛ばされた。

「巨人！

こいつよくもお！」

アスカがライフルを連射するも両腕を斬り飛ばされ、戦闘不能になった。

レイが地下から上がった時、辺りは使徒の攻撃の影響で地獄絵図となっていた。

「よくもアスカを！」

レイにとって、きづければアスカは大事な友となっていた。

生まれて初めての激情がレイを支配する。

ロンギヌスの槍を使徒目掛けて投擲する。

しかし間一髪気づいた使徒が避けたため、コアにダメージを与えられず右腕を消し飛

ばしただけだった。

だがそれもかなりゆっくりとだが再生を始めていた。

「槍は投げた勢いで向こうに突き刺さってるけど、取りに行く間にやられる。

なら持つてきたこのN2爆弾を、コアに直接！」

大型ミサイルの後部にブースターのついた特別仕様。

これをコアに当てるために0号機は爆弾を抱えて使徒に突っ込む。

「そんな、やめなさいレイ！」

ミサトが止める、がレイは止まらない。

「だめ。」

こいつは倒さないと人類が終わる。

それに、碓くんとアスカが生きていけるなら怖くない。」

「ぼっ、れ、い。」

約東、したでしよ…

2人であの馬鹿、迎えに、いく、って」

シンクローのダメージのため息も絶え絶えのアスカが呼びかけるも

「ごめんねアスカ。」

約東、守れない。」

その瞬間使徒のコアに接触した爆弾が爆発、0号機を巻き込んであたりに破壊を撒き散らした。

爆炎が晴れた後、そこには

黒焦げの0号機とほぼ無傷の使徒が立っていた。

使徒は残った左腕で0号機の四肢を切断し、目のビームで頭部を焼いた。

「0号機戦闘不能！」

シンクロカットのおかげで生きてはいますがパイロットの心音微弱です！」

「やばい、ここにくる！」

初号機は「無理なの？」

「ダメです、起動しません！」

万事急須、絶望的な状況だった。

シンジはジオフロント内のシエルターに避難していた。

ほかの客も一時は一緒にいたが、使徒がジオフロントに入ったと知ると慌ててどこかへ逃げていった。

自分には関係ない、誰かがなんとかしてくれる。

そんな思いは爆風と共に吹き飛ばされた。

0号機の使った爆弾でシェルターの一部が倒壊した。

暗闇の中から急に光が入り目が眩んだが、外を見た時これまでの自分の考えがいかに愚かか知ることになる。

倒れ伏したZ、両腕が斬り飛ばされた2号機。

そして、立っているものの焼け焦げて使徒に四肢を切断されつつある0号機。

もう乗らないと決めた。

全て捨ててここから出ていくと決めた。

しかし気づけばシンジは走り出していた。

なんのためかわからない、だが自分にできることをやらなければ後悔する。

みんなが死ぬ。

そして辿り着いたのは倒れたゼットの元だった。

「Zさん！」

しっかりしてくださいZさん！」

『シン、ジ

なんだ、そこにいたのか。

この間は、殴ってゴメン。』

「そんなこと！」

僕がいけなかつたんです！

だから、もう一度だけでいい！

力を貸してください！

みんなを、守りたいんです！」

シンジの目の奥の光を見たZ。

先日生み出した自らの闇を打ち消し、誰かを守るための覚悟を秘めた光を。

『アイツは強敵だ。』

多分、ただ融合しても勝てない。

でも、今のシンジになら、これを托せる。

最後の、キード。

力が強すぎるからハルキにしか使えなかった。

でも今なら、いける。』

Zから託された最後の一本。

それを託したあとZは力を維持できず消えた。

「ありがとう、Zさん。」

もう一度、一緒に戦いましょう！」

そしてシンジは使徒へ向けて走り出した。

右手にスパークレンス、左手にキールを握りしめて。

「使徒、なおもセントラルドグマ入口へ向けて進行！

時間の問題です。」

マヤの報告に顔をこわばらせるミサト。

もう猶予はない。

最悪、本部を自爆させるしかない。

「日向くん、もしものときは、頼むわよ。」

「構いませんよ。」

あなたと一緒に怖くありません。」

「すまないわね」

そんなやりとりをしているとマヤが

「巨人、光の粒子となつて霧散して行きます！

あれ、同じ場所に人がいる…

つて、え

シンジくん

全員がモニターを凝視すると、そこには使徒に向けて駆け出そうとするシンジの姿が

あつた。

その両手に白い銃とキーを持っている。

シンジを死なせたたくない。

屋外スピーカーで呼びかける。

『逃げなさいシンジくん！』

しかしその願いは意外な形で裏切られた。

ミサトさんの声が聞こえる。

ごめんなさい、ミサトさん。

僕は逃げ遅れたんじゃないんです。

あんなことを言っただけ……

「僕は、みんなを守るために帰ってきたんだ！

行くよ！ゼットさん」

走りながらキーを掲げてスイッチを押す。

ウルトラマンZ！デルタライズクロー！

「闇を飲み込め！黄金の嵐！」

ブートアップ！デルタ！

そして走りながら銃身を開くとその後ろからZさんが飛んできて手を広げながらこ
う叫ぶ。

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンゼエーツト！』

「ウルトラマン、ゼエーツト！」

トリガーを押した僕はそのままZさんの胸のクリスタルに吸い込まれ融合してい
た。

知らないウルトラマンが僕らの周りを飛んでいる。

Zさんと融合しているからか彼らの名前がわかる。

ゼロビヨンド。

ウルトラマンジード。

ベリアルアトラシアス。

今更になって気づいた、今まで変身した時も別のウルトラマンたちが力を貸してくれ
ていたことを。

どうかお願いします、みんなを守る力を僕に。

そして3人のウルトラマンの力が僕らに溶け込んでいった。

『僕はみんなを守るために帰ってきたんだ!』

外部マイクから聞こえてくる音声に涙が止まらなかつた。

ミサトはシンジが自分の意思で戻ってきてくれたことが嬉しくてたまらなかつた。

『行くよ!ゼットさん!』

しかし聞きなれない単語が出てくる。

シンジくんの手を持った機械が何やら音声を発しているが聞き取れない。

『闇を飲み込め!黄金の嵐!』

シンジくんがそう叫ぶと、先ほどまで倒れ、そして急に消えた青い巨人が背後を飛んでいた。

そして驚くことに巨人がしゃべった。

しかも言っていることがわかつた。

『ご唱和ください我の名を!』

ウルトラマンゼエーット!』

シンジくんも叫んだ。

『ウルトラマン、ゼエーット!』

そしてウルトラマンZと名乗った巨人にシンジくんが吸い込まれ…

明らかに異次元の強さを放つ黄金の巨人がそこにたっていた。
それを見たリツコが驚く。

「まさか、あのウルトラマンZとシンジくんが融合して戦っていたというの☒」
気づけば私はモニター越しに祈っていた。

シンジくん、みんなを守って！

『いくぞでシンジ！』

こい！ベリアアロク！』

Zさんの声に顔のついた黒い剣が手元に来る。

『ああん？』

ハルキじやねえのか。

まあ、いい。

なんだあれ、レーザーとなんかが混じってるな。

アレを切るんだな！』

よくわかんないけど納得してくれたみたいなので
黄金の光まつて突っ込んでひたすらに切った。

使徒も攻撃が通じ始めて焦ったがもう遅い。

『デスシウムスラッシュユ！』

闇色の斬撃が使徒の左腕を斬り飛ばした。

だがまだ倒せない。

ふと、赤い槍が地面に刺さっているのに気づいた。

すごい力を感じる、これならコアを！

抜き取って黄金のオーラを纏わせ、コアに向けてまっすぐ突き出す。

『いつけええええ！』

僕と乙さんの思いと声がシンクロする。

そして槍はコアに当たり暫くは塞がれるが…

次第にめりこみ、貫通した。

コアを破壊された使徒はいつも通り形状崩壊して跡形もなくなった。

「乙さん、この間はごめんなさい。

僕ともう一度一緒に戦ってください。」

変身を解除したシンジが隣に立つ乙に語りかける。

『当たり前だろシンジ！』

使徒退治付き合うぞ、相棒！』

そういうと乙さんは光になって消えていった。

大変なのはこれからだ。

多分変身するところをみんなに見られてるしな。
でも構わない。

改めて心に誓う。

僕がエヴァに乗る理由。

ウルトラマンに変身する理由。

それはみんなを守るためだと。

決してもう心が折れないよう、そう誓ってポロポロのNERV本部へと僕は駆け出した。

6話 輝きの福音

シンジは囲まれていた。

主な司令部のメンツとアスカとレイに。

話は3日前に遡るが、14使徒襲来の際に地上で変身した姿を見られたシンジはNE RV本部に着いた瞬間速攻で拘束され、つい先ほどまで独房に入れられていた。

出られたと思えば三重の手錠をかけられ司令室まで連れて来られたのだ。

「さあ、話してもらおうかシンジ。」

うちの親父こわっ

父の言葉から放たれる庄にびびるシンジ。

するとZが話しかけてくる。

『シンジ、ここは私が話そう。』

そうZが言うくと手錠が自然に外れた。

そして宙に浮いたスパークレンスが勝手に開いて…

シンジの隣に人くらいの大きさのZが現れた。

『ナイスチューミーチュー。』

私はウルトラマンZ。

訳あって別次元の宇宙からやってきたm78星雲出身の君達で言うところの宇宙人だ。

今はシンジの力を借りて戦っている。

君達に危害を加えるつもりはない。』

しばらく驚きで全員が固まるが、ゲンドウが立ち直って口を開く。

「私は特務機関NERV司令碇ゲンドウだ。

そのシンジの父親でもある。

貴様に問おう、目的はなんだ？」

『あなたがシンジの…

私の目的は、シンジの力になることだ。

私と共にこの次元にやってきた怪獣、ギルバリスを倒すために一度死んで私と融合したことで蘇ったシンジに報いるために戦う。

これでも私は宇宙警備隊のメンバーだ。

それに私がこの次元に来る直前に戦った怪獣、そいつが使徒と同じATフィールドを使っていた。

あの力は私の次元には本来ない力だ。

合わせてその謎を解き明かしたい。

どうか、シンジと共に戦うことを認めてほしい。』

しばらく口を噤んだゲンドウ。

そして

「貴様の言い分は理解した。

ただし、こちらにも条件をつけよう。

貴様とシンジの融合時のデメリットを隠さず伝えること。

シンジに怪我をさせないこと。

我々と敵対しないこと。

以上が守れるのなら認めよう。」

『三つ目はシンジに対して、そちらが危害を加えないのであれば了承する。

お互いに、まだ信用し切れてはいないだろう。』

「ふっ、よかろう。

そうだ、シンジの命を救ってくれたこと、またこれまでの使徒戦で力を貸してくれて

いたこと、礼を言わせてもらおう」

そう言つて先を立ち上がろうとするが

『碓司令、私も聞きたいことがある。

使徒とは、なんだ？

私の知る宇宙生命体とはどれとも当てはまるがどれとも当てはまらない。

そしてエヴァの正体を教えてもらいたい、あれはただの巨大兵器ではないだろう。

使徒を倒した先にあるのは本当にこの世界の平和だけなのか？』

乙はこの世界の核心に触れようとしていた。

突然の話で理解できていたのは司令、副司令、赤木博士だけだった。

「なるほど、やはり一筋縄ではいかないか。

シンジ、乙を連れてついてきなさい。

葛木くんたちは別に説明をするのでこの場で待機だ。

冬月先生、葛木くんたちに説明を頼みます。

リツコくん、君もきたまえ。」

そして言われるがままついていくシンジ達。

辿り着いた先は地下奥深くの空間。

『おいおい、人工物でこんなに地下深く潜れるなんてとんでもないテクノロジーだな。』

「我々は用意された器を使っているにすぎない。

用意した者はこの奥にいる。」

ゲンドウが扉をカードキーで開き、扉……いや、もはや封印と言っても過言ではないも

のが解かれようとしていた。

解かれた先にあるもの、それは十字架に磔られた白い巨人だった。

『これはエヴァ…』

いや、違う。

まさか、使徒か☒』

「その通りだ。

彼女は第2使徒リリス。

ネルフ本部を含めたジオフロントやこの地下空間は彼女が別の宇宙からこの地球に来たときの方舟、『黒き月』の名残だ。

それに対をなすのが第1使徒アダム、この地球における始まりの命だ。

アダムから生まれたのが我々の戦う使徒だ。」

衝撃の事実だった。

全ての命の始まりが使徒だったなんて。

『ちよつと待ってくれ。

そうすると地球では同族争いをしているということか☒』

「そうともいえるが、そうではない。

我々人類はリリスから生まれた第18使徒。

本来であればこの星に生まれることはなかった存在だ。

リリスの持つ、知恵の実を継承した我ら人類。

アダムの持つ、生命の実を継承した使徒。

異なる2つの実を継承した者たちが、地球の覇権を争っているのだよ。生き残りをかけた戦いであるという認識は間違ではないのだ。

そしてアダムも今我が手にある。」

ゲンドウは手の平大のケースに収まる胎児のような物体を見せる。

「これがアダム、最もこれは爆散した欠片を再生したものに過ぎないがな。

エヴァは初号機以外のすべてがこのアダムの複製体にすぎない。

奴らと戦うために同じ力を得る必要があったのだ。

初号機は唯一リリスをベースにしている。

最も恐れるべきは使徒とリリスの融合。

そうなれば、我々は個の形を維持できなくなる。」

『おいおい、なんてことだ。』

そうなったら全てが混ざり合って一個の命にはなるが、そんなのみんな死んでるのと変わらないだろ!』

「そのとおり。」

そして、一度はその儀式が発動されようとした。

15年前南極における爆発、結果的に地軸を歪める結果に終わったが、これは永き眠りから覚めたアダムを見つけた人類が、人間の遺伝子を入れてコントロールしようとしたところアダムが暴走、融合を始め世界中が取り込まれるところだった。

葛城くんの父上が命懸けで止めたことでなんとかならなかったがな。

今、使徒の脅威だけではなくこれを自らの意思で行おうとするカルト集団がある。名をゼーレ、我らの上部の組織だ。

奴らのいう人類補完計画を止めるために、私と冬月は従うフリをしている。

そして我々は別の補完計画を企んでいる。

それは儀式の核を、奴等ではなく我々NERVに変え、この計画に巻き添えになった人たちを蘇らせることだ。」

明らかにゲンドウたちの野望。

『それはダメだ！』

命は、そんな簡単に扱っていい代物ではない！』

Zが激昂する。

「ふっ、シンジを甦らせた貴様がどうか。

安心しろ、15年前から個の形を保てなくなった人たちに改めて形を与えるだけだ。

エヴァの中で戦っているものは死ねば魂がLCLに溶け込む。

そこで死したパイロットたちも復活させる予定だった。

そして他にも…

シンジ、お前がなぜエヴァとシンクロできるかわかるか？」

「え、そんなの…わかんないよ！」

突然の父の質問の意図がわからないシンジ。

しかし、父から告げられる事実は衝撃的だった。

「やはり気づいていなかったか。」

それはな、エヴァのコアにお前の母の魂が溶け込んでいるからだ。

みな、エヴァの中に母の魂が入っているのだよ。」

母さんがいる？

じゃあ母さんとまた会える？

「そしてそのとき生まれたのが綾波レイ。

お前の母、唯の遺伝子情報をもとにリリスが魂を移したのが彼女だ。

もつとも、レイはこの事実を知らない。

そして0号機にはリリスの魂の一部が入っている。

ダミープラグはその波長パターン解析して作っていたのだ。」

こうして長い話は終わった。

『碇司令、質問に答えてくれたこと感謝する。

最後に聞かせてほしい。

あなたの目的はなんだ？』

一瞬視線をシンジに向けるゲンドウ。

「無論、ゼーレを打倒する。

この子たちの生きる明日を作ることだ。」

まっすぐな目をしていた。

なるほど、これがこの男の本音…

『わかった。

あなたを信じよう。』

Zはそういうと姿を消した。

「シンジ、話は以上だ。

全てが片付いたあと、もう一度話そう。

そのときは母さんも連れてくる。」

それだけ言うとしんじを置いて立ち去った。

それから3週間が過ぎた。

使徒が来ない平和な日常を過ごしていた。

ギクシヤクするかと思っていた関係も全く変わらなかった。

しかし平和を乱す、呼び出し音が昼間に鳴り響く。

「召集…行こう、アスカ、綾波！」

「シンジ、あんた自信満々ね…」

いいじゃない！

アタシも負けないわ！」

「今度は足手まとい、ならないわ」

3人が司令室へ駆け込む。

そしてミサトからの状況説明が始まった。

「今度もまた宇宙からの使徒よ！」

2号機先行で、銃火器による射撃で様子を見て頂戴。

こいつが今回の使徒の映像よ。」

映し出されるのは月寄りの上空に浮かぶ青白い光を纏った鳥のような使徒だった。

「現在まで衛星からの爆撃を行うもフィールドで無効化されてるわ。

おかしいのはなんの反撃もして来ないのよ。

損害は使徒と直接接触した衛星が溶解したくらいね。

高密度のエネルギーをまとっているようだからやっぱり銃火器ね。」

ブリーフィング中、急にスパークレンスが起動した。

『ミサト、私とシンジでいく！』

他の機体は待機させてくれ！』

慌てたようにZが捲し立てる

「どうしたのZさん？」

なにかあるの？」

あまりの様子にシンジが思わず聞いてみると

『…こいつなんだよ、私がここに来る直前、ハルキと戦った怪獣は！』

まさか使徒だったなんて。

こいつの放つ光線は人の精神を狂わせる。

シンジは私が守りながら戦うから、行かせておくれ！』

あまりの気迫にミサトはうなづいてから、ゲンドウに伺いを立てる。

「司令、よろしいですか？」

「構わん

Z、さっきの言葉、忘れるなよ。」

許可が降りたところで地上に上がるシンジ。

『一気にガンマフューチャーでとぶぞ！』

ウルトラマンZ！ガンマフューチャー！

「変幻自在、神秘の光！」

ブートアップ！ガンマ！

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンゼエーツト！』

「ウルトラマン、ゼエーツト！」

そして一気に大気圏までワープしそこから使徒の元まで飛んでいく。

『シンジ、あいつはトリツキーだ。』

だからフォトンストリームが弾かれたら、デルタライズクロウで勝負をかけるぞ！』

「了解！」

そしてたどり着いた使徒の元、しかし

『な、この前より倍はでかいぞ！』

また怪獣でも取り込んだのか！

決めるぞシンジ!

フォトン、ストリーム!」

両腕にフォトン粒子を集めしなるムチのようなエネルギーを相手に叩き込むフォトンストリームだが、やはりフィールドに弾かれる。

ならば

「闇を飲み込め!黄金の嵐!」

ウルトラマンZ!デルタライズクロー!

黄金の光を纏い攻撃を打ち込むが、わずかに押す程度でダメージにはならない。

『ベリアロク!』

ベリアロクで切りかかるが5回に一回通る程度でエネルギー消費とダメージ効率が割に合わない。

『デスシウムスラッシュ!』

闇色の斬撃がフィールドごと使徒を飲み込む、が

これまでより大きなダメージを与えたようであらうが、致命傷には至らない。

「く、どうすれば…」

シンジが策を考えるもどれも決定打にはならない:

そう考えていると、使徒から光が放たれた。

『まずい☒避けきれない。

シンジイイ！』

「え、なにこれ。

やめろ、やめろやめろやめろ！

そんな、トウジイイイ！」

ハルキと同じく精神汚染されるシンジ。

地上で映像を見ている司令部では声が聞こえるようなマイクを持たせていたが、だれもがまともな神経で聞いてはいられなかった。

「司令！ 私たちもバックアップに！

このままだとシンジが！」

アスカが出動要請を出すも

「ならん。

君達まで同じく精神汚染されたらどうする。

シンジにはZがいるからある程度中和するが、君たちは最悪廃人だ。

あいつも男だ、守ると言っ出ていったのなら黙って見守るのが周りの務めだ。」

ゲンドウは頑として認めなかった。

一番息子が心配であるはずの男がこう言っているのだ。

周りが逆らえるわけもなく、ただ、全員が祈るだけだった。

しかしその祈りが奇跡を起こす。

それに気づいたのはマヤだった。

☒

格納庫から高エネルギー反応！

これは…エヴァ3機からオーラのようなものを検出！」

「まさか、唯☒

ようやく目覚めたのか。

しかし、他の機体は。？」

ゲンドウは唯が目覚めたためだけに起きた現象かと思っていたがそうではない。

「あ、もしかして…」

シンジを守ってって祈ったから…」

どうやらアスカはシンジのために祈り続けていたらしい。

レイも同様なのかコクコクと頷く。

そして

「オーラ状のエネルギー、上空へ放出！

この方向は、Zの方です。」

やはり祈りが通じたようだ。

アスカはそれを見てつぶやく。

「早く無事に帰ってきなさいシンジ。」

帰ってきたら、レイと二人でギユツとしてやるわ。」

「やめろ、もう見たくない！」

だから嫌だったんだ、戦うのは！」

精神汚染が悪化するシンジはかなり衰弱していた。

Zも使徒を倒そうと光線を放つがダメージにならない。

『どうすれば…』

ウルトラピンチだぜ』

そんな時地上から紫、黄色、赤の三色のエネルギーが飛んできてZのカラータイマーに吸い込まれた。

『うわっ、なんだ…ってシンジ！』

だいじょうぶなのか☒』

三色のエネルギーはシンジを包むように広がった。

すると苦しんでいたシンジも元の呼吸を取り戻した。

「はあ、はあ、はあ…」

Zさん、みんなが…

ネルフのみんなが応援してくれてる。

まけるな、ちゃんと帰ってこいつて！」

そしてエネルギーはシンジの左手に集まり出した。

「今ならあいつに勝てる。」

この力はみんながくれた力だから！」

そしてエネルギーは新たなキーを生み出した。

『そのキーは…』

ああー、もう！

考えても仕方ない！

シンジ、ぶつつけ本番で行きますよ！」

「はい、ゼットさん！」

そしてシンジは新たなキーを起動させる。

ウルトラマンZ！イプシロンエヴァ！

「絶望を打ち払え！紫電の福音！」

ブートアップ！イプシロン！

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンゼエーツト！』

「ウルトラマンゼエーツト！」

そして顕現するのは頭部のトサカの前部分がツノのように前方に伸び、ウルトラマンネクサスのような顔つき、紫、赤、黄、銀に彩られた新たな姿だった。

ウルトラマンZ イプシロンエヴァ

エヴァ三機の力を纏った、この世界だからこそ至った形態だ。

『これならフィールドを中和できる！』

ベリアアロク！」

ベリアアロクに紫色のエネルギーを纏わせ、使徒を切り付けるとフィールドごと相手を切り裂いた。

そして両羽を切り落とすと人差し指を構え、左手で右手首を持ち固定する。

狙いはもちろんコアだ。

ゼステイウム光線のエネルギーが指先に集まる。

力を圧縮し、解き放つ。

『ゼステイウム・ライフル！』

使徒が最後の力で張ったフィールドすら容易く打ち抜き、コアを消滅させたのだっ

た。

『凄いでシンジ！』

君は自力で強化形態を作れなかった私に、新しい力をもたらしてくれた。ウルトラ大した男だな！』

薄れゆく意識の中Zにほめられたきがした。

目覚めたら頭の病院の天井だった。

違うのは

「ア、スカ？」

アスカが覗き込んでいた。

「あんた、ゼットが地上に連れて帰ってから丸2日寝てたのよ。

心配したんだから。

大丈夫ならさっさと退院なさい。」

そういうアスカはあくびを噛み殺していた。

目の下には黒い隈が：

「もしかして、ずっといてくれたの？」

そういうとアスカはシンジの方をじーつと見て

そのまま強く抱きしめた。

「うお、ちよ、ええ？」

アスカ、さん☒」

「おかえりバカシンジ

あと、そんな野暮なこと聞くんじゃないわよ。」

そういうとウインクひとつ残して病室からアスカは出ていった。

7話 地球の意地

シンジはどの姿が一番戦いやすいでございますか？』

忘れた頃にやってきたZのぶっ飛んだ言葉遣い。

それはともかくとして、先日の第15使徒戦で新たにイプシロンエヴァの力を手に入れたZとシンジ、これで全部で5つの強化形態を使えるようになった。

「そうですね、イプシロンエヴァが一番しつくりきます。

やっぱエヴァの力なんで。

それ以外だと…ガンマフューチャーですかね？

フィールドを張る感覚の延長で力を使えるので。

他の形態はあんまり得意じゃないですね、剣技も格闘技も使ったことないので…」

『なるほど…』

近接戦闘が苦手な感じなのか。

わかったでございますよ。

そういえばリツコから呼ばれてるんだろ、早く行った方がいいのでは？』

Zに言われて呼び出されたのを思い出して慌ててリツコの研究室に向かう。

「失礼しまーす」

「あら？」

思ったより相当早かったわね。

二つほどお願いがあつて呼んだのよ。」

リツコのお願ひ。

なぜだろう、それだけで背筋が震える。

「き、聞くだけ聞いてみます…」

「ふふ、別にとつて食おうつてわけじゃないわ。

一つ目はエヴァの戦闘訓練、なんだけどあなたはZに変身して戦つてほしいの。

Zにどの形態での戦闘が得意か聞かれたでしょ？

あれは私が頼んだの。

それを踏まえて戦闘訓練を行います。

二つ目が、あなたが変身に使うアイテムをちよつと調べさせて欲しいの。

先日、エヴァの力を使える形態を獲得したことから、逆にウルトラマンの力をエヴァに纏える可能性を感じてね。

Zには了解をもらっているわ。

しばらく預からせて。」

嘘だったらZが何か言ってくるはずだ。

それがないのであれば…

「わかりました。」

ハイパーガッツスパークレンスとキー五本です。

終わり次第取りにきます。」

「確かに預かったわ。」

もし使徒が出現した場合は司令室で渡すわ。

訓練計画はまたミサトと詰めるから乞うご期待ね。」

そして帰路に着いたシンジ。

過去にしたZとの話を思い出しながら歩いていた。

『ハルキのこと？』

ハルキはストレイジっていう部隊の隊員で、初めて出会った時はシンジと同じで一回

死んでたんだ。

ハルキは空手をやってたからアルファエッジ、ベータスマッシュとの相性は抜群に良

かったな。』

シンジはエヴァでの戦闘を思い出す。

暴走時の取っ組み合いや、ナイフでコアを攻撃する以外したこともない。

残る使徒はあと2体。

『一度誰かに訓練を頼んでみるべきかな?』

頼める相手に心当たりは一つしかなかった。

「ほお、それで俺のところに来たのかい？」

間違いではないと思うよ？

だが、アスカも軍属だし葛城も戦略自衛隊に出向したこともある。

俺でなくてもいいんじゃないかな？」

梶リョウジ主席監察官。

ミサトの元カレで一番暇そうな男である。

「乙サンとも前に話したことがあるんですけど、梶さんの身のこなしが只者じゃないって言ってたんです。

お願いします、アスカ達を守るように強くなりたいんです。」

「…なるほど。」

わかった、だけど君の性格を考えると自分から相手を殴りに行ったり壊したりするよ
うな格闘技を教えても習得まで時間がかかりそうだ。

だから合気道や柔道、受け流したり相手の力を使うものを教えてあげよう。」
かくして訓練が始まったのである。

同時刻、月面

無機質なモノリスが棺桶の前に浮かぶ。

『目覚めの時だ。』

「いよいよ僕の出番というわけだ。

しかし、ゼルエル、アラエルがあんなものたちと混ざり合うなんてね…」

『使徒と異世界の生命の融合…』

死海文書にも書かれていない悪夢の事態だ。

間違いない。此度の補完計画はイレギュラー、いや、もはや特異点と言っても過言ではない。

エヴァシリーズの完成を急がねばなるまい。』

そのとき宇宙にヒビが入る。

「どうやら、何かに惹かれていているようだね。

また異世界の生命が神話に連なろうとする…

ふふっ、これを阻み自らの種を守るのも生命の書に名を連ねたものの宿命だ。

そうだろ？ 碇シンジくん？」

1週間後―

『大変です！』

急に月面近くで高エネルギー反応確認！

パターンオレンジ、使徒以外のものです！』

マヤの通信が事態の緊急性を物語っている。

やってくるのがまたギルバリスのような強敵であれば…いつ来るかわからない使徒に対処が難しくなる。

しかし時は戻らない。

ひび割れた空間から虹色のスライムのようなモヤが流れ込んでくる。

そしてそこから一つの隕石が降り注いだ。

『異空間から隕石を確認！』

数は1、到着予想箇所は…

本部直上、芦ノ湖です！』

「まずいわね…」

エヴァ各機の発信準備急いで！

遠距離に出しているから、隕石がエヴァに被弾するのだけは阻止して！」

そしてエヴァ各機での発信準備にかかる。

そんな中シンジといたゼットの精神体が…目を丸くしていた。

『リツコ…スパークレンスみたいなパーツが操縦桿についてるぞ☒
ウルトラ聞いてないぜ！』

「言つてないからよ。」

これがイプシロンエヴァでエヴァとあなたが融合したことから着想を得て、スパークレンスを解析した結果をもとに作成した新装備。

いわば、エヴァスパークレンスよ。

そこにキーをセットすればエヴァが強化されるわ。

専用のキーを渡しているけどアルファ、ベータ、ガンマは使えるわ。

だけどデルタは無理ね、エネルギー消費が激しいの。

もし上手くいかなかったらシンジくんと変身して戦つてちようだい。」

んな無茶苦茶な…

でかかった言葉を飲み込んだのは、それが地上への射出タイミングと重なったからに他ならない。

『目標は芦ノ湖へ着水。しかし熱による湖の蒸発見られません！』

…これは☒

赤いコア状の球体を確認、エネルギー増大してます。

ですがパターンオレンジ、使徒とは確認できません！』

着水部分から浮かび上がるのは赤い玉。

周囲のエネルギーを集めながら、今、解き放たれる。

その姿はまさに

世界の終わりを告げる怪獣の王だった。

ギイヤアアアア

雄叫びを上げる怪獣に本能的に怯む。

『なんてことだ……これは、キングオブモンスじゃないか！』

かつてティガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩が3人がかりで倒した最強の怪獣！

光線、格闘、あらゆる部門でトップの怪獣だぞ！』

Zの説明でヤバさがわかる一同、しかし

エヴァパイロットたちは不敵に微笑んでいた。

「あら、知らないのZ？」

地球には女子3日あわざれば刮目してみよって諺があるのよ。」

「アスカ、それ嘘……」

ほんとは男子」

「でも、この間の僕たちとは少し違うってところを見せてあげるよ！」
アルファエツジ！

シンジがリツコから渡されたNERVキーを起動しエヴァスパークレンスに差し込む。

コードアップ！アルファ！

さらにアスカとレイもそれぞれネルフキーを起動してそれぞれ差し込む。

ベータスラツシャー！

コードアップ！ベータ！

ガンマデیفエーザー！

コードアップ！ガンマ！

そしてそれぞれが新たな姿のエヴァへと変化していた。

初号機は青いガントレットを中心に動きを阻害しない青いライトアーマーが増え

2号機は甲冑のような装備に2振りの日本刀を銜のウエポンラックから取り出し

0号機は紫、青、赤のトリコロールカラーの装甲を追加し、巨大な盾を装備していた、

「ふっ、成功ね。」

エヴァのフィールドエネルギーをスパークレンスからNERVキーで制御、さらにキー自体のエネルギーで強化した、その名もZアーマーよ。

「怪獣如き、ねじ伏せなさい。」

おそるべし、科学者の意地。

キングオブモンスはまず、2号機に羽を3枚に下ろされ、反撃しようとする。すると0号機の強化されたフィールドにより跳ね返されてダメージを負う始末だった。

『シンジ、格闘戦苦手なのにこの装備だと意味が！』

心配するZをよそにシンジは落ち着いていた。

「大丈夫だよ、Zさん。」

そしてキングオブモンスが振り下ろした尻尾に初号機が撃ち抜かれる刹那、それをいなし、その勢いを使い怪獣を宙にぶん投げていた。

「あの顔の赤い球が弱点だね、いくぞー！

チャージ、ゼステイウムナイフ！」

初号機のガントレットからゼステイウムエネルギーを練りだし、装備したナイフに込める。

するとエネルギーの刀身が伸び、小刀のような形状になる。

そして突き立てるため怪獣へ向けて走り、鼻尖へ叩き込み：

そのまま真下に落として、引き裂いた。

両断されかけながらも、まだもがこうとするキングオブモンス、しかし

「シンジだけじゃないのよ。」

アスカが暴れる手足を切り落とした。

そして、内部エネルギーの暴走でキングオブモンスは爆発していった。

『ウルトラすごいぞみんな！』

いったいどうしたんだ☒』

驚いたゼットに聞かれたチルドレンたちは笑いながら答えた。

「Zさんがリツコさんのところにいた間、みんな先生を探して修行したんだ。」

僕は梶さんに格闘技を、アスカは冬月副司令に剣道を、綾波はミサトさんに正確な盾の使い方を、ね?。」

悪戯成功と言わんばかりの笑顔の3人、それを見てZは

『子供の成長は早いですなあ。』

ウルトラ泣きそうだぜ』

光の戦士、情緒がオカンでした。

8話 邂逅 涙のない世界

キングオブモンスを倒して10日、今は実験施設での戦闘訓練の最中だった。

アスカの2号機とZのシンジとの模擬戦は超巨大ソフト棒によるチャンバラだった。

先日のたたかいでベータスラッシャーによる二刀流を披露したアスカは二刀流で、シンジはアルファエッジで一本のソフト棒を構えていた。

『アンタ達、あくまで一般の模擬戦だからね。』

熱くなつて被害出さないでよ!』

ミサトからの注意が、開戦の狼煙になった。

アスカは上段の大振りを右の棒で仕掛けてくるが難なく避けるZ。

しかしそれはブラフで、避けたゼットに左手の棒が襲い掛かる。

「アスカつ、手加減してよ!」

「何言つてんのよシンジ、アンタは実戦だとベリアロクつて黒い刀一本しかないでしょ!」

あと2体だけど、ここで手を抜く理由にはならない、わ!」

そんな感じのやりとりが1分続き終了のサイレンになる。

『2人ともお疲れ様！』

シンジくん、ダメージ受けた回数は3回ね。

十日間でだいぶ進歩したじゃない。

アスカも動きが良くなってるわ、回収ポイントで待機してちょうだい。』

そう、ミサトの放送の通りこの訓練は10日目なのだ。

近接の苦手なシンジ、二刀流が未完成なアスカのための戦闘訓練はまずまずの成果を出していた。

シンジは棍から稽古をつけてもらい武道の動きを習得しつつあるが、決定打はやはりナイフやベリアロクなどの武器によることが多い。

しかし、この訓練でだいぶ様になったようでアスカに何発か食らわされるようになっていた。

『シンジ、なかなかの成長ですな！』

これなら次の戦闘もばっちりじゃないか？』

「そんなZさん、まだまだですよ…」

この程度じゃアスカを守れないから。

…いや、違うんですよ☒

さつき一緒に訓練してたから名前が出ただけで、そう、みんなを守れないから！」

このゼットとのやりとりが司令室に筒抜けで、一同のテンションを上げているのはまた別の話。

そして同じく聞こえていたアスカは

「っつ、もう！」

馬鹿シンジったら」

顔を真っ赤にして俯いているがにやける顔が止まらないようだ。

それを見ていたレイは

『不思議、イライラする。』

私、嫉妬しているのね。』

新たな感情が芽生えだしていたのだった。

「赤木博士、実験の結果どうだった？」

NERVキーの運用によるエヴァへの影響：使用を中止にする必要があるのかね？」

ゲンドウの問いにリツコは向き直る。

この訓練は能力向上と同時に、ネルフキーの使用によるエヴァおよびパイロットへの影響の検証も兼ねていた。

「はい、影響はあまりないです。」

エネルギーによる外装の増加という現象ですのでエヴァの素体自体への干渉は一切ありません。

ただ、元々の外装も若干増加の際に一部を変形させているようですので長い目で見たときに外装の耐久力低下が懸念されますが戦闘でダメージを受ければ交換するので差し問題は無いかと思われれます。」

「わかった。」

今後もキーを運用する方向とする。

また、キーのデータおよび内容については第一級の緘口令をしくものとする。」

使徒を倒した先に待つ敵、ゼーレ。

形式上ネルフの上位組織であることから報告の際のデータは一部改竄しているのだ。

「残る使徒はあと2体。

いよいよだ、ユイ。

今度こそ、家族で暮らせる。」

それから10日が過ぎた時突然奴は現れた。

『駒ヶ岳の観測所から伝達！

未確認飛行物体を確認。

「パターン青、使徒です！」

光学映像に出されたのは天使の輪のような使徒だった。

しかしよくみると二重の螺旋を描くような輪になっていた。

「あれ、どうみる？」

「現時点ではなんとも言えないわ。

ただあれが固定の形態でないことだけは確かかね。」

ミサトとリツコな協議の結果、レイが先行して様子を見ることになった。

仮に高威力の攻撃を持っていてもガンマディフェンダーなら防げるからだ。

バックアップで2号機が離れた位置に出撃、万が一のための措置であり、初号機は格

納庫で待機となった。

そして出撃したレイは念のためライフと盾を装備、様子を見ていた。

「レイ、様子を見て場合によっては仕掛けて！」

「いえ、くるわ」

突如使徒は円を解き、一本の光の棒になって突っ込んできた。

すでにガンマディフェンダーとなって防ごうとするが、

「フィールドを突き抜けて……」

「これじゃ盾も……持たない……」

フィールドをたやすく貫通しその勢いのまま盾に喰らいつく使徒。
そしてヒビが入り：

レイはそのタイミングで盾を手放し両手で使徒を掴むと地面に叩きつけた！
しかしその掴んだ手から使徒は融合を始めた。

『ありえない！』

使徒が、エヴァを通して人の心を知ろうとしているですって？』

「レイ！」

2号機、あのミミズもどきを切るわ！」

リツコの言葉を聞きやばいと感じたアスカは2号機を走らせる、が

掴まれているのとは反対側の頭を2号機に突っ込ませた使徒は、クロスして防ごうとした刀を容易く砕き2号機の腹から侵食する。

「いや、やめて！」

あたしを見ないでええええええ！」

『2号機の侵食、30%を突破。』

危険域です。』

「ミサトさん！」

僕が初号機で出る！」

そして出撃した初号機が見たのは、えびぞりで悶える2号機と何とか融合を防ごうとする0号機だった。

「綾波、もうちよつと耐えて！」

「アスカ、今助ける！」

「ブートアップ！アルファ！」

青き鎧を纏いガンレットからエネルギーの刃をだして2号機につながる使徒を叩き切るシンジ、しかし

2号機を解放した使徒は隙だらけなシンジへ向かい融合を始めた。

そして途端に0号機に食らいついていた方の頭も初号機に食らいついた。

「はあ、はあ」

あれ、使徒は…

え、なにこれ

嘘でしょ、シンジイイイイイ☒

使徒から解放されたアスカが見たのは2か所から侵食され使徒に縛られるような形になった初号機だった。

「碓君、今助ける。」

機体を動かそうとするレイとアスカ、だが融合の時にエネルギーを吸われたのか内部

電源すら無くなっていた。

かろうじてモニターがプラグの予備電源で見える程度だ。

「そんな、碓君…」

レイの瞳からは知らないうちに涙が溢れ出ていた。

『ハハ』は…』

シンジは見慣れない赤い空間にいた。

確か使徒に融合されて…

そしてシンジは足元が赤い水溜まりになっていることに気づく。

その中から2人の白い人間が上がってくるが…

「綾波とアスカ?」

白い人間は見慣れた2人の姿だった。

『ねえ、碓くん／シンジ。』

私と一つにならない?

それはそれはとても気持ちのいいことなの。」

2人は男子中学生なら誰もが喜ぶようなことを言い出したのだ。

その甘い誘惑に乗りそうになったとき

「ダメよシンジ。」

幸せにする女の子はちゃんと手順を踏まないとダメよ。

お母さん、お嫁さんが2人でも別に気にしないけどまだ早いわ。」

茶髪の綾波レイそっくりな人がいた。

え、お母さんってまさか

「え、母、さん？」

初号機の中にいるとは聞いてたけど、まさか会えるとは。

「大体の事情はわかってるわ。」

そいつらは、使徒があの子たちの情報を読み取って形作っているにすぎないわ。」

そうか、ならいけるか。

「話したいことはいろいろあるけど、あまり精神内部にいと戻れなくなるわ。」

この使徒は圧倒的な力で吹き飛ばすしかないわ。

時間がないから手短かに言っておくわ。

お父さんは未来を変えようとしている、だから手伝ってあげてね。

あの人、あなたのことが可愛くて仕方ないんだから。

それと使徒を初号機に食べさせてはダメ。

一度覚醒すればこの世界に絶望をもたらす悪魔になるから。

大丈夫よ、あなたには、他のあなたが持つてない光の力があるんだもの。」

その言葉を聞き終わるとシンジの目は覚めていった。

目を覚ますと侵食の痛みとプラグスーツにはる根のような侵食痕が生々しかった。

「君はこうやって人を知りたいだけだったんだね。

でもごめん、僕の大切な人を守るために君を…

殺します。」

『シンジ！シンジ！』

応答しなさいシンジ！』

『シンジ、私の声が聞こえるか？』

最悪初号機を捨てても構わん！

命を優先しろ！』

Zさんと父さんの声が聞こえる。

「大丈夫だよ父さん。

リツコさん、ちよつと無茶しますが許してくださいね。」

ウルトラマンZ！デルタライズクロー！

コードアツプ！デルタ！

「解き放て！黄金の嵐！」

そしてシンジがエヴァアスパークレンスのトリガーを引く。

すると初号機の内側から光が溢れ出し、使徒が内部から逃げるように出てくる。

そして使徒が再び円の形になる頃には金色の鎧を纏う初号機がいた。

Zのデルタライズクロウの金色の鎧をそのまま纏ったような初号機だった。

溢れ出る光が両手に大型の爪を形成する。

そしてフィールドを歯牙にも掛けないその爪が使徒を蹂躪し、爆散させた直後に初号機はエネルギー切れを起こした。

シンジが目覚めたのは5日後だった。

その間の話はミサトから聞いたが、エヴァは三機ともしばらく修復に時間がかかりそうらしい。

そしてパイロットは使徒に融合されたので全員影響がないと判断される3日間は隔離されたそうだ。

その件をうまいこと誤魔化して報告したら、ゼーレから新しいパイロットを派遣されることになったらしい。

「シンジくん、新しく来る子にはゼットやNERVキーのことは言ってはダメよ。」

彼が敵かはわからない以上、警戒するに越したことはないわ。」

そして退院したその足で久々の外を満喫しに芦ノ湖の方に行くよ

「やあ、待っていたよ。」

碇シンジくん。」

銀髪のイケメンが岩の上に座っていた。

見覚えはない。

「あの、君は？」

なんで僕の名前を？」

「僕はカヲル、渚カヲル。」

君と同じ運命を仕組まれた子供、パイロットたる5thチルドレンさ。

君の名前は这个世界ではとても有名だ、失礼だがもつと自分の立場を自覚したほうが

いい。」

そしてカヲルがシンジを見つめ：

「ああ…君がああ光の戦士か。」

なるほど、老人たちが君に近づけというわけだ。」

うそん、バレとるやないかい。

9話 原初の光

「君の魂と重なるように、あの光の巨人の形が見える。

僕の目は特別でね、変わったものが見えるのさ。

安心してくれ、誰にもいうつもりはないよ。」

新たなパイロット、渚カヲル。

初対面でシンジがウルトラマンZだと見破った。

警戒するシンジにカヲルは手を差し出した。

「そんなに小動物のように警戒しないでくれ。

僕は老人たちの指示でできたけど、そんなことは瑣末な問題だよ。

そして君はとても優しいね、警戒しながらも僕のことを優しい目で見てくれている。

初めて出会うタイプだ、好意に値するよ。」

確かにゼーレにあるこの少年が無理をしていないか、昔の自分に重ねて心配していたのは事実だ。

しかし好意って…

「わかりづらかったかな？」

好きってことさ。

友達としてよろしくね、シンジくん。

僕のことはカヲルって呼んでよ。」

この人となら仲良くやれる。

「こちらこそよろしく、カヲルくん。」

そして2人は握手を交わした。

だがそこへ、

『シンジ、そいつから離れろ！』

ゼツトの声が響く。

「どうしたんですかZさん？」

たしかに見抜かれたのは驚いたけどそんなに警戒するほどじゃ…」

『違うんだシンジ！』

こいつ、レイと同じ感じがする…

作られた命の形、そしてその魂は』

「使徒と同じ、かい？」

初めましてウルトラマンZ、こんなにも早く見抜かれるとは思わなかったよ。

君が気づかなければ、シンジくんと楽しい時間が送れたのにね。』

そう答えるカヲルの顔をシンジは見れなかった。

魂が使徒？何言つてんだ2人とも…

だつてカヲルくんは、僕に優しくしてくれて、友達になつてくれて…

「僕も改めて名乗ろう。」

我が名はタブリス、第17の使徒にして最後の使者。

我が魂は第1使徒のものだ。

君たちに終わりを告げるものだ。」

カヲルくんが、使徒。

その事実には理解が追いつかないシンジ、しかし

次の瞬間、カヲルの拳がシンジの腹に刺さる。

「君の力を分けてもらおうよ。」

ふうん、これで変身していたんだね。」

その手にはスパークレンスとブランクのキーがあった。

慌てて腰のホルスターを見るとスパークレンスもキーも全てあった。

「君の力をコピーさせてもらった。」

ごめんね、シンジくん。

もし君が僕を止めたいならドグマの最下層で会おう。」

そういつてカヲルは宙をまい、本部の方へ行つた。

「おいかけ、なきや」

痛む腹を抑えたながら、本部に駆け出したシンジ。

所変わつて発令所、カヲルはゲンドウへの挨拶のため職員に案内されてきた。

「初めまして、碓司令。」

僕は渚カヲル、5人目のパイロットです。

どうぞよろしく。」

「ああ、遠くからご苦労だった。

キール議長はお元気かな？」

「ええ、とても。」

碓司令によろしくとおっしゃってました。」

「そうか。」

君にも頑張ってもらいたい。

ところで渚カヲルくん……

いや、第17使徒タブリス。

セントラルドグマではなくこちらにきたのはなんのつもりだ？」

その言葉で発令所が一気に緊張する。

パン

そして乾いた音が響く。

ゲンドウが構えた銃から煙が上がり、弾は

カヲルのATフィールドに阻まれていた。

「今日は乙といい、あなたといいよく正体がバレるなあ。

しかしあなたは僕が使徒であると知らなかったはずだ。

シンジくんには連絡できない程度には痛い思いをしてもらっていますけど……」

カヲルの言葉に別の意味で空気が凍りつく。

この使徒、なんてことを……

「貴様の正体を知っているのは前からだ。

答えろ、シンジに何をした。

返答次第では転生すら叶わぬようにしてくれる。」

「まさかあなた…」

なるほど、ループを外れた人か。

いつの世界で僕に出会いました？」

「貴様の知らぬところだ。

でなければ、生命の書から解放された貴様が使徒として現れるはずがない。」

他の職員たちが全く理解できない会話を続ける2人。

「なるほど、ということとは…」

まあいい、僕がここにきた理由は体を返してもらいたいからですよ。」

そしてカラルが手を伸ばすと、ゲンドウの懐から再生されたアダムの一部が飛び出し

て、カラルの手に収まった。

「これで老人たちの思惑とは外れるはずだ。

なにかリリースとの契約だ、そんなものに僕を巻き込むなよ。

さて司令、僕はこれからガフの扉を開きます。

あんなゲテモノとの融合なんてごめんです。

しかし猶予を差し上げましょう。

今から一時間後にこの上空で儀式を始めるので止めたければどうぞ。

まあ、止められればの話ですがね。」

そういうとカヲルの手にあつたアダムとブランクキーが一つになり夜色の輝きを放つ。

そうするとカヲルは姿を消した。

「総員、第1種先頭配置。」

全兵装の使用を許可、直ちに第17使徒の殲滅行動に移れ。

保安部はサードチルドレンの安全の確保を。

エヴァ各機は準備が整い次第順次発進だ。」

ゲンドウの指示によりなんとか元の動きを取り戻す職員たち。

そしてジオフロント内に0号機、2号機を配置すると、ネルフ本部長空にカヲルが現れた。

「僕を真似て作った粗悪品か。」

醜いね、君たちの中にある魂も苦しそうだ。

せめて浄化の時まで、安らかに。」

そしてカヲルがアダムが融合したキーを使う。

『ADAMS』

それだけでエヴァは全て起動できなくなつた。

「大変です0号機及び2号機、起動できません！」

エネルギーは供給されていますが、エヴァ側が起動を拒否している模様！」

「碓、これはまさか……」

「おそらく、取り戻したアダムの力を使っているのでしょう。」

エヴァの素体はアダムのコピーですから。

おそらくあの使徒の魂は……

第一使徒、アダムだ。

またあの子に全てを託すことになるとはな……」

すまないシンジ、頼りない父を許してくれ。

シンジが本場に着いた時に見たのは無傷で倒れるエヴァ二機と、宙に浮かぶカヲル
だつた。

「カヲルくん！」

やめようよ、君となら話し合える。

僕は君の話が聞きたいんだ！」

「遅かったねシンジくん。」

儀式を始めるまで残り五分だ。

本音を言うとな、僕は友達である君に止めて欲しかったんだよ。

だがもう遅い：君たちが弄んだ、地球の始祖の怒りを知るがいい。」

そしてカヲルは持っていたスパークレンスのコピーと夜色のキーを構える。

キーを起動すると、スパークレンスも夜の色に染まった。

『ADAMS』

ブートアップ！THE FIRST ANGEL OF WHITE MOON！

そしてシンジがいつもする様にスパークレンスにキーを差し込んだカヲルは天に掲

げて厳かに言霊を解き放った。

「絶望を誘う原初の光、ADAM！」

そして輝いたスパークレンスの後には、エヴァと同じ形をした光の巨人が立っていた。

『さあシンジくん、いや人類よ。』

絶望をもう一度、サイドインパクトをはじめよう。』

10話 真紅の絆・進化の光

『サードインパクトを始めよう。』

スパークレンスを使い、カヲルが変身した姿。

それは一言で言うとうエヴァの形をした光の巨人だった。

司令室もどよめく。

『目標の反応、第17使徒であるのと同時に…』

第1使徒であるとも計測されています。

マジはこの件については解析不能の見解を示しています。』

「…想定外の事態だ。

まさかアダムが復活するとはな。

シンジのスパークレンスからこの結果を生み出すとは…

全迎撃兵装をフル稼働、シンジを援護するんだ。」

ゲンドウの指示で兵装を起動させ攻撃を仕掛けるものフィールドに弾かれ、アダムが手を振るだけで破壊されてしまう。

これを見ていたシンジは、一瞬俯くが覚悟決めて顔を上げる。

「ゼットさん、カヲルくんを止めよう。

たとえ彼を殺すことになっても…」

『シンジ…』

男の顔になったな。

戦いの前にこれを渡しておく。』

ゼットから渡されたのはZオリジナルのキーだった。

『あいつはかなり手強い。』

私が死ぬこともあるだろう。

その時はオリジナルのキーで戦ってくれ。

私がいなくても変身できるはずだ。

君に私の後を託したい。』

Zも覚悟を決めたようだ…しかし

「嫌です。」

何かツッコつけてんですか。

この戦いを生きて勝ち抜いて、みんなで笑うんです。

だから戦うんですよZさん。」

そういつて笑いながらシンジはキーを起動させる。

「君の絶望なんか、僕たちが砕く！」

絶望を打ち払え！紫電の福音！」

ウルトラマンZ！イプシロンエヴァ！

ブートアップ！イプシロン！

『…そうだったな！』

最強の第1使徒：

相手にとって不足はないぜ！

ご唱和ください我の名を！

ウルトラマンゼエーツト！』

「ウルトラマンゼエーツト！」

トリコロールの執行者が降臨する。

相手はタブリスでありアダム。

先手を仕掛けるが、フィールドが厚すぎて中和しきれない。

逆にアダムの攻撃は苛烈すぎてとめることができなかつた。

『嘘だろ☒』

それなら、ベリアアロク！』

ベリアアロクを手元に召喚し、必殺の一撃に全てを込める。

イプシロンエヴァのエネルギーとベリアロクの光が混ざり合い、夜の輝きのような眩いエネルギーが刀身にこめられる。

『イプシロン・デスシウムスラッシュユ!』

『なんだこの威力は☒』

フィールドが持たない…』

全エネルギーとフィールドエネルギーを込めた一撃はなんとかフィールドを切り裂き、アダムの体から着弾の爆発が起こる。が、

『なるほど、フィールドを切り裂き僕にダメージを与えるか。』

それがポンポン放たれたら流石に僕も不味かったけど、今ので出涸らしかい?。』

確かにコアの真横に深いダメージの跡が見える。

だがそれだけだった。

それにひきかえ、乙は全エネルギーを使い切り変身解除寸前だった。

『残念だ。』

君達の敗因は僕が覚醒してしまっかけて与えたことだ。

ばいばい、シンジくん。』

そしてアダムはフィールドエネルギーを圧縮し、ゼットに向けて打ち出した。

最強と言われた14使徒…

それとは比喩物にもならない威力のフィールドを使った攻撃。ゼットになすすべはなく、その場に倒れた。

「ぐはっ」

変身を解除されたシンジが倒れ込む。

しかし横には目の光を失い、オリジナルの姿で倒れ込むゼットの顔があった。

「何やってるんですか？」

ほら、早く変身しましょうよ。

いつものやつ言ってくださいよ！

ほら、ご唱和ください我の名を！

ウルトラマンゼット！って！」

しかしゼットは起き上がらない。

徐々に体が石化しつつある。

「なんで、ゼットさんが石に…？」

『聞いたことがある…』

遠い宇宙の光の戦士たちは、死するとき体が石になると。

それが復活のための準備なのか生体なのかは知らないけどね。

これで終わりだよ、君がゼットになれなくなった以上、初号機に乗ったところで勝ち

目はない。

前倒しだが儀式を始めようか。」

そういうとアダムは背中から四枚の羽根を生やし、宙に浮かび上がった。

そして、コアを中心にこれまで倒してきた使徒の姿が浮かび上がり何かの模様を描いていく。

「あれは生命の樹か。

コアから自らの生み出した使徒の情報を抽出し、儀式へのプロセスを進めているのかもな。」

そこにはゲンドウがいた。

よく見れば後ろにNERVスタッフ全員がいた。

「ガフの扉が開かれれば直下のものは全て飲み込まれる。

今レイとアスカを救出しているところだ。

世界の終わりまで生き残ろうじゃないか。」

そういうと父さんはしゃがみ込んで僕を抱きしめた。

「すまないシンジ。」

お前に辛い思いばかりさせて、結局お前の明日を用意してやることができなかつた。

だがお前はよく頑張った。

みんな誰もお前のことを責めはしない。

だからもういいんだ。」

そしてみんなから賞賛の拍手が送られる。

心地いい。

とても心地いい。

もう頑張らなくてもいいと心地よい声が囁く。

でも

「だめだよ父さん。

僕たちはまだ、ちゃんと生きていない。」

「…シンジ?」

「僕は一度死んだんだ。

そのときZさんが選ばせてくれた。

戦いを拒んであのまま死んでいくのも一つの選択肢だった。

でも、僕はこの一度だけの人生で、みんなを守りたいから生き返って戦う道を選んだんだ。

僕はまだ、生きているんだ。

この命が果てない限り、諦めてなんていられない！」

そう言うシンジの目は赤く輝いていた。

「たとえゼットさんがいなくても、僕は戦う。」

そのシンジの言葉にみんなの顔に力が戻ってくる。

「ふっ、まさか、息子に教えられる日が来るとはな…」

諸君、今一度抗うのに付き合ってください。

中学生が諦めていないのに、大人が諦めてはいられないだろ！」

そのゲンドウの言葉に全員が今自分のできることに取り組んでいく。

そしてその思いが、希望がゼットに光を取り戻した。

『シン、ジ…』

そうか、私は一度死にかけて…』

「ゼットさん！」

よかった、戻ってきたんですね。」

『ああ、闇の中でシンジの声が聞こえた。

相棒が諦めてないのに、ウルトラマンの私が寝ているわけには行かないよな！

勝ち目があってもなくても抗うだけだ！

ウルトラ気合い入れるぞ、シンジ！』

「行きましよう、Zさん！」

2人の絆が、進化の力を呼び覚ます。

シンジの目が真紅に輝きZから渡されたオリジナルのキーが輝き出した。

「オリジナルのキーが…」

まさか、進化した☒」

『シンジ、その目は…』

いや、今はそんなことよりカヲルだ！

あいつが絶望を誘う原初の光なら、こっちは希望を導くだけだ！

絆の力で進化した光をみせてやろう！』

そして新たなキーを起動する。

「希望を導け、真紅の絆！」

ウルトラマンゼット！アドバンスゼステイウム！

ブートアップ！アドバンスA t o Z！

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンゼエーツト！』

「ウルトラマン！ゼエーツト！」

そして立ち上がる最後の希望、進化した光。

その名はウルトラマンZ アドバンスゼスティウム。デルタライズクロウを超える、新たな力。

ゼットとシンジの絆、そしてシンジの持つ謎の力が導いた進化の形。体表は青と黒から、部分ごとに赤より濃い真紅の色が混じっていた。

『見てくれが変わったところで、何も変わりはない。』

アダムがフィールドエネルギーを打ち込んでくる。

が、Zは片手で払い除ける。

『アダムとなった僕のフィールドを片手で☒』

『シンジ、あまり長い時間は変身できそうにない。』

フィールドごとぶち抜くぞー！』

そしてZは手に青と赤が入り乱れたエネルギーを纏い、最初にA、最後にZを描くように手を動かして必殺技を放つ。

『アドバンス！ゼスティウム光線！』

直感で危機を感じ取ったアダムは、光線を弾き、そらし、止めようと角度を変えたり密度を上げたATフィールドを幾重にも重ねた。

そして重なった分厚いフィールドはゼットのすぐ目の前まで展開された。

最初は阻まれる光線に安堵したアダム、しかし

パリン

1枚、また1枚と割れるフィールド。

そしていよいよ、アダムが最終防衛ラインとして貼った最大級のフィールドにたどり着くが、

『ふっ、ははははははははははは！』

たかが2人のちからでなんとかなるものか！

僕はアダム！

全ての始祖だぞ！』

フィールドを越えられないシンジ達に勝ち誇るカヲル、しかし

『それがどうした！』

『…なに？』

Zの一言で笑いをやめた。

ゼツトの言葉をシンジが引き継ぐ。

「僕たちはいつだって、1人じゃ勝てない相手と戦ってきたんだ！

君が何だろうと関係ない、僕たちの絆が、負けるなもんか！」

『よく言ったシンジ！』

フルパワーで行くぞ！』

そして2人の声が重なり合う。

『ぶっ飛ばえ!』

そして光線はついに、最大のフィールドをぶち破り、アダムのコアを撃ち抜いた。

アダムはその場に崩れ落ちながら光となつて消えていく。

変身解除したシンジがアダムの倒れた場所に行くと、そこにはカヲルが横たわつていた。

しかし体は倒された影響なのか、端の方から光となつて消えていつていた。

「ああ、シンジくん…」

きつと僕を止められるのは君だと思つていたよ。」

「カヲルくん…」

こんなのつてないよ!

君と友達になれると思つたのに…」

シンジは涙ながらにカヲルを抱きしめた。

「本当に君は甘いなあ。」

なら、僕は友達として君にこれを託そう。

しばらくは眠りにつくだろうけど、いつか君を助ける時が来るはずだ。」

そして受け取つたのは、なんとアダムのキーだった。

しかし、シンジが受け取ると光が失われて使えなくなった。
「君と出会えてよかったよ。」

泣かないで、きつとまた会えるさ。

縁が君を導くだろう。

それまで、サヨナラシンジくん。」

そしてシンジが抱きしめていたカヲルだった光は全て散り、カヲルが使っていたスパークレンスが落ちて乾いた音を立てた。

「…サヨナラ、カヲルくん。」

君に出会えて、よかったよ。」

アダムのキーを握りしめながら、シンジは空に散っていったカヲルの光を見上げ続けていた。

最後のシシャとの戦いから半月、怖いほどに静かな時間が流れた。

ゲンドウと冬月は2人で語らう。

「これで全ての使徒は倒した。」

「ここからだ、後の敵は人間なのか…?」

「冬月先生、まだわかりません。」

私の知る死海文書の内容とはかけ離れている。

タブリスを倒したのにも関わらず、ゼーレが仕掛けてこない。

そしてZの存在、備えるべきことは備えねば……」

2人の声は部屋の闇に吸い込まれていった……

11話 リリン・カニバル

最後の使者、渚カヲルを倒してからさらに一月が過ぎた。

カヲルを倒してからゼーレとは連絡が取れず、いつNERV本部を攻めてくるかわからない緊張状態がひと月近く流れて、職員の疲労はピークに達していた。

せめてこれられても対抗できるように、考えられる対抗策を打ち出していた。

そしてパイロットをはじめとした職員たちは、万が一を考えて本部付近での生活を余儀なくされていた。

「ゼーレに関しては目立った動きはありません。」

ただ、建造中だった量産型エヴァについても情報が全く入ってきません。

おそらく、なんらかの仕事を重ねているとみられます。」

「^ご苦労だったな梶くん。」

日本政府の方はどう動こうとしている？」

司令室ではゲンドウと梶の情報交換が行われていた。

梶は日本に着いてすぐ、ゲンドウから情報収集を依頼されていた。

真実を教えてもらうことを条件にだ。

「政府の方にはウルトラマンZと敵対するのとゼーレにつくのがどちらが得か考えるように脅しをかけてます。

エヴァだけでは奴らの天秤は権力に傾くでしょうしな。

なにせ、これまでの使徒との戦いは官邸にも情報として流れていますからね。

シンジくんの正体は隠していますが、明らかにNERVとのつながりがあることは奴らも感じているでしょうし、私が知る限り現在までゼーレや国連から日本政府に連絡があつた様子は見られません。」

「わかった。

申し訳ないが頼んだぞ。

君の働きに関する臨時ボーナスについては一考する。

悪いようにはせんよ、葛城くんとの結婚時間の足しにでもしたまえ。」

「司令もお人が悪い。

我々は今はそんな関係ではありませんよ。」

「人とは分からぬものだよ。

君たちを見てみると周りがむず痒くなる程思い合っているのにくつつかないからな。

それに人の命は儂い。

手が届くうち、会えるうちに想いを伝えることも必要だよ。

これは経験者としての忠告だ。」

ゲンドウは妻を初号機に取り込まれてから10年以上経つ。

その事実を知るものとして、この言葉がとても重く感じた。

「……忠告、痛み入ります。」

何はともあれ、この戦いを生きて乗り越えねばなりませんからな。

私は追加の情報収集にあたりますのでこの辺で。」

そして梶は部屋を出て行った。

入れ替わりにリツコが入ってくる

「司令、ご要望の品が完成しましたので持って伺いました。」

リツコから渡されたアタッシュケースの中身を確認しニヤリと笑うゲンドウ。

「ゼーレ対策の陣頭指揮も任せているのにすまないな、赤城くん。

これがあれば、最悪の事態は避けられるかもしれん。

ところで君はちゃんと休めているかな？」

「お心遣いありがとうございます。」

しばらく仕事続きでしたので、ひと段落すれば休みをいただきます。

しかし司令、ゼーレはなぜ動きを見せないのでしょうか？」

「わからん。」

エヴァシリーズの完成に時間をかけているのか、それとも別の理由で気を伺っているのか……

いずれにせよ、予想される事態への対策……

マジのハッキング防止、エヴァと市街地兵装の強化、戦略自衛隊の投入阻止のための牽制を行うしかないな。」

ゼーレが沈黙を保つ意味、時間を開ければ開けるほどこちらが対策をとるのは予想できることだ。

では何か？

それすら塗りつぶすほどの用意があるとしても？

「どのみち、これから起こることは残った人類同士での共食いに他ならんよ。」

我々はなんとしてでも補完計画を阻止せねばならん。」

力説するゲンドウの言葉を頼もしく感じリツコは部屋を後にしたのだった。

「ああ、やっぱりだめだ。」

シンジは頭を抱えなくなった。

進化した光の力、アドバンスゼステイウムのキーが元のオリジナルキーに戻っていたからだ。

そしてカヲルから受け継いだアダムのキーはあれ以来ただのキーの形をしたものと

しか言えない状態だった。

『一瞬の奇跡だったのか、それとも…』

あれ以来怪獣も来ないが、ゼーレの戦力…

量産型エヴァンゲリオンと戦うことを考えると、アドバンスゼスティウムへの覚醒は必須だな。

可能なら新しい力を手に入れたいが、そのヒントになるアダムのキーがこれじゃあな…』

「あの進化の力を使うには、きつとあの時の感覚が必要になるんですけど…

もう少しのところで辿り着けないんですね。」

ゼスティウムの先の力へ至る感覚はわかっているが、あと一歩のところまで掴みきれない。

『焦っても仕方がない。』

こういう時はアスカとレイと羽を伸ばしてみてもどうかかな?』

たしかに、彼女らといることが一番のリフレッシュかもしれない。

そして僕はアスカたちの待っている家へ足を向けた。

今、僕たちパイロットはミサトさんたちと引越してネルフ本部近くの一軒家に住んでいた。

ゼーレの奇襲で分断されるのを防ぐためだ。

正直この1ヶ月は気が張って疲れていたけど、それ以上にみんなと過ごす時間は心安らぐ時間だった。

このままゼーレが来ずに、みんな一緒にいたらいいのに…

そんなことを考えてたら家の前まで帰ってきていたらしい。

今はもう、家に帰ることが堪らなく幸せなんだ。

ドアを開けて、すっかり習慣になった言葉を言う。

「ただいま！」

こんな時だけど、僕は今、たまらなく幸せだ。

四時間後、日本国官邸。

「なんだこの大衆は☒」

奴らの主張はなんだ？」

官邸前には性別、年齢を問わずあり得ないほどの人が押しかけていた。

デモ行進でもなく、何も言わずに集まっていた。

「いえ、それがなにも…」

警備の報告では全員目がうつろであると…」

わかるのは緊急事態であるということだけだ。
そして事態が動き出した。

「ほ、報告いたします！」

大衆が変貌、全身白い短髪の女性型になって警備員たちに襲いかかり始めたとのことです！

現在NERVには連絡中、戦略自衛隊にも出動を要請しています。

皆様はシエルターの方へ！」

なんなんだこれは

モニターには報告通りの様子が写り、警備員たちが素手で引き裂かれ、首を折られている。

そして一体がカメラの方を向くと、全員がカメラの方を向き笑い出した。

誰でもいい…早く誰か！

「状況を知らせろ！」

ゲンドウの声が司令室に響き渡る。

官邸前に現れた謎の怪物たちの報告を受け、夜間にもかかわらず緊急招集が全職員にかかった。

「不明です！」

戦略自衛隊が出動しているようですが、現地の報告ははいつてきていません！
官邸付近をスキヤン…嘘！

パターン青多数、使徒です！」

ありえない、全ての使徒は滅ぼした。

最後の敵は人間だったはず…

「碓、これはまさか☒」

「ああ、まさかゼーレがシナリオを歪めてくるとはな…

これは第18の使徒、リリンだ。」

「待ってよ父さん！」

リリンって、僕ら人間なんだろう？

僕らはパターン反応なんて出ないじゃないか！」

シンジの質問にパイロットたちは同意して頷く。

その時

「映像、出ます！」

これって、レイ？」

そこには官邸前で蠢く白い人型がいた。

確かによく見ると白い綾波レイの集団だが、そこにいるのはレイと同じ姿をしているだけの怪物が目を見開いて笑っていた。

「レイ、プラグスーツに着替えるわよ。」

アスカが気を使ってその場からレイを連れ出す。

「おそらく、リリスの因子が強い者たちが集められ、使徒化させられたのだろう。

あれはいわば、リリン・インフィニティとでも言うべき存在だ。

やつらはどこへ向かっている？」

「現在は官邸を離れて：第3新東京市に向かっています。

およそ3時間で到着の見込みです！」

「なるほど。」

総員、第一種戦闘配置。

非戦闘員は残り二時間で取り残された人の避難誘導ののち、退避せよ。

他のものは対人戦闘用意、エヴァパイロットについては各機体で待機だ。

諸君、おそらくこれがゼーレとの最後の戦いとなる。

戦略自衛隊と連携し、奴らを叩く。

奴らは使徒だ、もはや人ではない！

必ず生き抜くぞ！」

12話 インフィニティ

突如現れた使徒化した人間、18使徒リリン・インフィニティ。

その姿は白い綾波レイ、だがその表情は狂気に彩られている。

やつらはふらつくような足取りで第3新東京市を目指していた。

その途中の民家では

「おいおい、あの嬢ちゃん裸で歩いてら。」

「やだよあんた、いやらしい目しちやってき！」

真つ白だけど今日は仮装行列かなんかなのかい？

…あら、こつちにくるよ。

聴いてみようかね？

おーい、お嬢ちゃ

一体のリリン・インフィニティが住民に近づき、住民のおばちゃんも笑顔で話しかける、がおばちゃんの顔に手を添え

ゴキン

「ギィィィィ」

奴は見境なく人を襲い出す。

リリン・インフィニティの本能、それは使徒化していない人類の選別。

補完されるべき魂はインフィニティ化している者だけで充分というのが奴らの結論だ。

「ひっ！」

妻が殺されて頭が真っ白になるおじさんだったが、次の瞬間

ピシッ

顔面が石のように固まり、そのまま仮面のように剥がれ落ちた。

そしておじさんが顔を上げた。

そこにいたのはおじさんの体を纏ったリリン・インフィニティが狂気のおじさんの体をはき出して歩き出す。て立っていた。

リリン・インフィニティはおじさんだったものの体を脱ぎ捨てて歩き出す。

母なるリリスのところへ。

周辺カメラで使徒化の工程を確認したNERV。

「これは…まだまだ増えるということなのか。」

冬月が言葉を漏らす。

その内容がかけ離れてはいるが、現実になることが目に見えているため、誰も口を開

かなかった。

「リリン・インフィニティが半径30キロ以内に入ったらジオフロントへの入り口は全て封鎖させる。

対地上戦闘の用意だ、第3新東京市周辺の防壁を作動させ市内への流入を防げ。戦略自衛隊には空中で向かってくるやつらを殲滅するよう依頼しろ。

奴らがフィールドによる攻撃を仕掛けてくる可能性もある。

戦闘員については戦車、ヘリ等の兵装の使用を許可する。

うち一割については避難した市民のシエルターの護衛に回せ！

エヴァについてはジオフロント内へ奴らが侵攻してきた場合出撃させるが、相手は人型だ、子どもたちに人殺しをさせるわけにはいかない。

我々で奴らを片付ける。

諸君、大人の意地を見せてやろうじゃないか。」

ゲンドウの指示とゲキで慌ただしくなる。

カヲルとの戦闘でシンジが戦っている姿をまじかで見て、子どもたちに戦わせている現実を改めて理解していた大人たちは奮起する。

戦いは大人の仕事だ。

子どもたちだけに辛い思いはさせない。

その思いだけは戦闘員、整備員全員が共通して抱く思いだった。
「私たちも負けてられないわ！」

作戦課についても各地のカメラから情報を収集、対策や作戦立案を開始するわ。
時間はないからちよっぱやでやるわよ！」

ミサトたち司令部も動き出す。

3時間が過ぎた午前2時

リリン・インフィニティが第3新東京市外壁前に到着。

外壁の前になすすべもなく、よじのぼり始めるが戦略自衛隊による空中からの攻撃により蜂の巣にされる使徒化した人類、しかし

「やはり、再生能力を備えているか。

使徒ほどではないにしろ、人間とは比べ物にならない速さだ。」

吹き飛ばされた端から徐々に回復し出した。

ゲンドウは冷静に状況を分析する。

そして改めて、人型の使徒という脅威を目の当たりにして思うのは
「奴らを滅ぼさねば我々に未来はない。」

なすすべきコトは一つ。

生きる者同士手を結ぶ、つまり

戦略自衛隊と手を組み奴等を滅ぼすことだった。

戦略自衛隊、ネルフとリリン・インフィニティとの戦いは六時間にも及んだ。

大型火力兵器によりリリン・インフィニティの半数が消失。

日が登り出したのと同じ時にどこかへ姿を消したのだった

13話 TRYNNITY・NEXUS

「なぜだ。」

何故リリン・インフィニティは引いた？

大半を焼却したとはいえ、未だ脅威たりえる存在の奴等が…

一体なにを考えている？」

戦略自衛隊の大出力兵器、n2爆弾の投入により大半を焼却せしめた。

その代償として、ジオフロントの天井である一部の装甲板が融解してしまうというアクシデントはあったものの、ジオフロントへ至る前に第3新東京市の防壁が侵入を防いでいた。

敵からすれば、一部とはいえ侵入可能な箇所が増えたのだ。

それに奴らの数はいまだに多く、把握は困難といえる物量だ。

大型兵器に恐れをなしたのかそれとも…

ゲンドウが思考を加速したその時、けたたましくアラートが司令室に鳴り響く。

「大変です！」

マギがハッキングを受けています！

現在までに1割強が無力化、完全掌握までおよそ900秒です!」
「防御プロトコルを展開、1秒でも長く進行を遅らせろ。」

赤木、伊吹両名は直ちにプロテクト作業を開始。

以降のオペレーターは青葉が担当しろ。」

ありえん、このタイミングでハッキングだと☒

ゲンドウの思考が最悪の結論を導き出す。

冬月も同じタイミングで答えに至ったのか驚愕の表情を浮かべる。

「碓、まさか☒」

「間違い無いでしょう。」

ゼーレが約2ヶ月も進行を遅らせたのはエヴァシリーズの完成遅延がげんいんではない。
計画にリリン・インフィニティを組み込み、奴らを覚醒させるために今日までなにもしてこなかったんだ。」

この私ですら知り得ない存在を、なぜ計画に組み込めた…

やはりイレギュラーが原因なのか…

しかしゲンドウの思考は答えを導き出す直前で止められる。

「司令!」

こちらへ飛来する未確認飛行物体を8機確認！

現在は戦略自衛隊の航空部隊が迎撃中とのことですが対象が大きすぎて有効打にはならないとのこと。

さらにそれぞれからパターン青を確認！」

司令室がざわつく。

こんな時に大型の飛行する使徒が8体も現れたというのか。しかしゲンドウと冬月はそれで全てを察する。

「…総員、第1種戦闘配置。」

直ちにエヴァ二号機の出撃準備にかかれ。

シンジは初号機で待機、発進の用意だけしておけ。

レイは司令室で待機、0号機は凍結とする。」

「司令☒」

一体どう言うお考えですか？」

流石の指示にミスアトも嘯み付く。

Zアーマーとアスカの能力があり、使徒一体であれば余裕で倒せるとはいえ、相手は8体でおおかつ0号機を凍結するとは正気の沙汰ではない。

「葛城くん、敵の正体が私の推測通りなら

あの8体は量産型エヴァだ。」

司令室がざわつく。

それに構わずゲンドウがつづける。

「現時点でパターン青が出るのであれば、奴らには使徒の細胞たるS2機関が内蔵されパイロットはおそらくリリン・インフィニティだろう。

そして奴らの狙いは、リリスの肉体、依代となるエヴァだ。

その核となるのが：リリスの魂を宿すレイだ。

レイを奪われれば最悪の事態を迎える。

アスカくんの実力であれば奴らを沈黙させるのは難しくはないだろう。

問題はエヴァシリーズの数だ。」

秘密を知っていたシンジ以外はどよめく。

リリン・インフィニティの姿がレイに似ていた理由にもそれで納得がいくと言うものだ。

「父さん、数が問題って多すぎるってこと？」

シンジが気になったことを尋ねる。

「いや、その逆だ。

エヴァシリーズは各国で9機開発されていた、はずだ。

一機少ないのが奴らがまだ何か隠しているというのであれば、シンジ。そいつはいまこちらに向かっている8機以上の脅威となる。

その時はお前とゼットの力が必要になる。

可能な限り2号機のみで制圧、無理と判断すれば初号機も投入する。

それに奥の手はまだ：おっと、これ以上は今はいえんが負けるつもりはない。

行けるか、アスカくん？」

そしてアスカに尋ねるゲンドウ。

「任せてください司令！」

シンジ、あなたは大本命の時のためにドーンとかまえときなさい！

露払いはアタシの刀でするわ。

だから、アレ借りるわよ。」

「気を付けてアスカ。

あれって：まさかアレ☒

練習では確かに何度か使ったけど：

わかった、まかせるよ！」

そしてシンジはアスカにあるキーを手渡した。

アスカはキーを受け取るとその手を掴んで抱き寄せた。

やだ、男前！

「大丈夫よ、これを借りるのはただの保険だから。

ちゃんと帰ってくるわ、あんたのところにね。」

そう耳元で囁いてアスカは2号機のところへ走り出す。

それを見送るシンジの肩にゲンドウが手を置き

「…シンジ、孫の顔が楽しみだ」

司令室、ほんわかしました

「アスカ！」

「レイ！」

あんた司令室にいないとダメじゃない！」

アスカを追いかけてきたレイがアスカの手に何かを握らせる。

「アンタこれ！」

「デیفエーザーのキーじゃない！」

「私は今回戦えないから。」

私の祈りがあなたを守ってくれるように、これを。」

奇しくもイプシロンエヴァのキーを手に入れた時のような状況になった。

今回は託される立場になったアスカ。

2人の思いを受けて力がどんどん湧いてくる。

「任せときなさい。」

あんたが生きる未来はあたしが作るわ。」

そしてジオフロントへ出撃したアスカが見たのは宙をまう白いエヴァの姿だった。

遠目に見れば白き鳩のように見え、名前を考えれば平和をもたらす福音と言えなくもないだろう、と場違いなことを考えていた。

そう思っていたのが20秒前のこと。

降りてきたエヴァの姿は顔のない、白いウナギのようなエヴァだった。

唯一顔と認識できる口で、口角を上げこちらをニヤニヤと見てくる。

「気持ち悪い…」

悪いけど負けてらんないのよ、アンタ達なんかにね！」

アスカはそう叫ぶと即座にベータスラッシュャーへと換装し、量産型に切り掛かる。

しかし、敵の持つ諸刃の剣に受け止められ中々有効打につながらない。

「いんちく、しよー」

ようやく一機をダルマにして首を跳ねることで無力化したアスカ。

ケーブルは切られていないから時間気にする必要はないが、早く片付けたいのが本音だ。

仕方ない、ケーブルがついている今なら：

「リツコ、ごめん！

あれをやるわ！」

アスカからの通信にリツコが驚く。

「アంతタまさか、アレをやるの☒

…いいわ！

その代わり、必ず生きて帰ってきなさい。」

リツコからの返事に最高の笑顔で返したアスカはシンジから借りたキーを起動させる。

ウルトラマンZ デルタライズクロー

そして新たに操縦桿に付けられたサブスパークレンスにキーを装填する。

「闇を切り裂け！紅蓮の嵐！」

コードアツプ、ベータ！

コードアツプ、デルタ！

コードミックス！

デルタライズスラッシュャー！

そこに立っていたのは全く新しい2号機だった。

元々の赤は光沢を持った真紅へと染まり、部分的に金色の鎧が追加された、いわば2号機版デルタライズクロウであり、ベータスラッシュャーと融合し、新たな力を纏う。

そしてこれまでとちがうことを裏付けるように加速度的に量産型達は倒れ伏していった。

あるものは首を落とされ、あるものは胴体から一刀両断された。

しかし、

「ちっ、ケーブルが切られたか…

げっ！

思った以上に電力消費が早いな。」

リツコの懸念事項通りにエネルギー消費が激しく少しずつ活動停止までのカウントダウンは早まっていた。

残り三体まで減った量産型を見てデルタライズクロウのキーを抜き、予備の電源へと走り出す。

しかし

「嘘でしょ…」

なんでこいつらまた動き出してんのよ！」

目の前には欠損部分はあるものの再び動き出す量産型の姿があった。

3体は欠損部分が多すぎて行動はできないが、それでも五体は脅威としか言えない。

そして奴らは浅いダメージを2号機に与えては離脱を繰り返す。

このままでは…

「初号機出しますー！」

シンジが初号機で射出口へ移動するが時間はかかる。

ここで変身すれば施設が壊れる。

どうかアスカを守って神様！

そしてシンジの祈りは届く。

『シンジ、キーからオーラが！』

Zの指摘でキーからオーラが溢れていることに気づく。

そしてキーは飛んでいった。

「そっか、僕の祈りが…」

アスカ、すぐ行くからその力でなんとか耐えてよ！」

ところ変わりアスカは残り4分を切った2号機で敵をいなしていた。

実はバッテリーの強化で最大10分は稼働できるようになっていたエヴァでこの残り時間は心もとない。

「くそ！」

S2搭載型ってやになっちゃう！

コアさえ破壊できれば……」

苦痛に歪むアスカの顔を嘲笑うようにエヴァは笑う。

その時射出口を突き破り、光が2号機のコアに突っ込んできた。

突然の状況に警戒する量産型。

しかし内部では……

「なんなの一体……ってこれ！」

シンジのキーじゃない！

なるほど15使徒の時と逆のことが起きたわけね。」

シンジのところから飛んできたのはイプシロン・エヴァのキーだった。

アスカ達の祈りが生んだキーが、シンジの祈りでアスカの元に届く。

運命を感じざるを得ない状況だ。

そしてそのオーラに呼応するようにベータスラッシャー、レイから渡されたガンマ

デифエーザーのキーが輝き出す。

もしかして…そう言うことなの？

「はっ！」

いいわよ！あたし達の絆で世界を救う！

こちらはまだ花も恥じらうティーンエイジャーだつちゅうの！

青臭いこと言つても許されるのよ！

行くわよ、シンジ、レイ！」

そしてアスカがベータスラツシャーを引き抜き、全てのキーを起動する。

ウルトラマンZ！イブシロン・エヴァ！

エヴァ・タイプセカンド！ベータスラツシャー！

エヴァ・タイプゼロ！ガンマディフェンダー！

三つのキーが空中で力を放ち、中心で新たなキーを生み出した。

「見せてやるわ！」

紫電の絆、山吹色の希望、真紅の情熱！

混ざり合え、鋼鉄の福音！」

エヴァンゲリオン・トリニティ！

コードアツプ！トリニティ・ネクサス！

顕現する三位一体の巨人。

ベースの2号機を鋭角にしたスタイルに他のエヴァのカラーリングで染め上がる。
「エヴァ・トリニティ…あたしは1人じゃない！」

かかってきなさい、スクラップにしてやるわ！」

14話 アシタヲネガウヒカリ

進化した2号機。

その名をエヴァンゲリオントリニティ、イプシロンエヴァをベースとしたエヴァを強化するためのZアーマーの終着地点にしてエヴァパイロットたちの絆の産物。

そしてトリニティになったことで手にしていた刀も様相を変える。

トリニティブレイド、鐔の部分に大型の三色の三角形と矢印のついたトリガーのついた刀だ。

刃は分厚く、業物というよりも特殊能力を充分に発揮するための武器となっている。

アスカは早速紅い三角に向けてトリガーを引く。

クリムゾン・セカンド！

音が鳴り響き、その場で居合抜きをするアスカ。

斬撃は真紅の光の斬撃となり一体の量産型をコアごと両断し、その余波で周囲の量産型を燃やしていく。

コアを両断されたエヴァは他の使徒と同様に形状崩壊を起こす。

他のエヴァは燃え上がる炎の中、その肉を焼けただらせながらも這い出てくる。

その傷は時間がかかるものの塞がりつつある。

「ちっ、なら手数で勝負よ！」

力を貸しなさい、レイ！」

続けて山吹色の三角に矢印を合わせトリガー引く。

サンライトイエロー・ファースト！

ブレイドを天に掲げエネルギーを放つ。

天から山吹色の光剣が降り注ぐ。

既に体が欠損して這いずり回っていた二体のコアが撃ち抜かれ崩壊し、そのほかのエヴァも体をくり抜かれていく。

「すごいですねアスカ。」

もはやウルトラマンZとやってること変わりませんよ。」

司令部でマヤが思わず呟く。

フィールドエネルギーの運用、動き、もはや通常の人の域を超えつつある。

しかしリツコは顔を顰める。

「そうね、シンク口率を無視してこれだけの動きができるのは好ましいことだわ。

ただ、人間離れしているのは確かよ。

これほどの能力、後で悪影響がなければ良いのだけだ。

それに……」

リツコは言葉を濁す。

それを見てゲンドウは

「冬月先生、私も備えます。

あとはお願いします。」

「碓、何を……？」

冬月の問いかけに答えぬまま、ゲンドウは司令部を抜け出す。

逃げ出したのではない。

自らの鼓動が導く、悪夢の予感を覆すために。

アスカは目の前の残り五機を仕留めるために、ブレイドの三角形を紫色に合わせトリ

ガーを引く。

ヴァイオレット・ソード！

刀身に紫電の光が瞬く。

量産型が諸刃の剣で受け止めるが、それすら両断してしまう切れ味がこの力の特徴

だ。

そのまま両腕ごと切り落とし、帰す刀で股からコアごと切り上げる。

残り四体。

そこでコンソールがけたたましいアラームを鳴らす。

まだ一分も経っていないはずだ。

しかしモニターには予想だにしない数字が、残り20秒の表示が出ていた。

「嘘でしょ!」

あと3分は残っているはず……まさか、トリニティつてこれまで以上にエネルギー食うの☒」

ならば、奥の手を使うしかない!

全ての三角形が稼働し、一枚に重なったところでトリガーを引く。

トリニティライズ!

三色のエネルギーがブレイドの刀身で渦巻く。

エヴァ・トリニティの切り札、理論値的には使徒すらチリも残さず崩壊させる斬撃が放たれる。

「消、え、う、せ、ろおおおおおおお!」

突き出した刀身から溢れ出すエネルギーがフィールドを張る量産型の一機を捉える。

フィールドを意にも介さず、そのコアを飲み込む。

まずは一機。

その真後ろにいた機体はフィールドだけではなく剣を回転させふせごうとする。

流石はS2機関内蔵型の機体、余波で削れる肉体すら超速再生する。

だが、それすらこの技の前には5秒ともたなかつた。

二機目を飲み込み、三機目の剣を折った時だった。

エネルギーの斬撃が霧散した。

「嘘！」

エネルギー切れ、こんなところでなんて……」

Zアーマーが霧散し、膝をつく2号機。

残る量産型は二機。

エネルギーの余波で僅かとはいえ行動に支障をきたす程度にはダメージを受けた量産型は行動可能になるのに18秒を要した。

パイロットであるリリン・インフィニティの思念が伝わる。

『下等な劣等種が！』

進化した我らに牙を剥くなど！』

傲慢。

人類は知らないが、パイロットとして選ばれたりリリン・インフィニティはその中でもさらに進化した上位種にして補完後の世界を牽引すべく選ばれた10体の個体、10星と言われる存在だった。

その中の最上位種を除く存在がパイロットとして選ばれていた。新世界の福音となるべく。

そしてそれぞれの名は太陽系の各惑星からとられている。

残る2体の名はウラヌスのウルン、ネプチューンのネプタ。

汚された上位者の名をとりもどすべく、汚名を着せた目の前の下品な赤き巨人をどう汚すか、どう殺すかあらゆる想像力を掻き立てる。

ただでは殺さぬ、生を受けたことを憎むようにしてくれる。

蹴り倒し仰向けになった2号機の四肢を末端から切り刻むため、諸刃の剣を突き立てようとした瞬間、2号機の手の上にATフィールドが発生する。

ありえぬ、本来の姿ではないがロンギヌスの模造品だぞ☒

エネルギーの切れた2号機には本来防げるはずがない。

フィールドの中心、そこにはあり得ない人物が立っていた。

「リリン・インフィニティ、私の義娘になにをしようとしている?」

機体越しても感じるほどの強烈な殺気を放つネルフ司令、碓ゲンドウの姿がそこにはあった。

そして懐から見たことのない形状をした黒い銃を取り出す。

『碓ゲンドウ…』

ゼーレからの最後通告だ、我らと共に補完計画を完遂せよ。』
量産型から響く無機質な声。

最後通告か、笑わせる。

「無意味なことだ。」

シンジの出る幕などない。

貴様らに最後の審判を下すのはこの私だ。」

ゲンドウはポケットから一つのキーを取り出し起動する。

エヴァ・ラストナンバー！

「目覚めろ、絶望の執行者。」

そして先ほどの銃、カラルのスパークレンスを改良した黒い携帯型エヴァスパークレンスにキーを差し込む。

コードアップ！ザ・ジャッジメント！

そこに現れたのは姿形はほぼ初号機ではあるが、その装甲はどこか近未来的な姿を思われるものだった。

『133号機。』

この世界にあつてはならぬ禁忌の存在。

しかし、ここまでねじれたシナリオだ、私も好きやらせてもらおうか。』

すかさず量産機の攻撃が始まる。

しかし、全ての攻撃はゲンドウのフィールドの前に無力と化していた。

『無駄だよ。』

君たちのフィールドとは年季が違う。

かつては神の領域に片足をつっ込んだのだ、ただの進化体程度では歯が立たんよ。』
まずは一体。

ネプタの量産機が頭頂部からフィールドを纏った手刀で真つ二つにされる。

そしてその手から量産型の諸刃の剣を奪い取ると、剣がロンギヌスの槍に変形した。

『やはり、ロンギヌス・レプリカか。』

貴様らに未来はない。

あの子たちの未来を今度こそ用意するために貴様らを葬る。』

そしてロンギヌスがフィールドごとウルンを量産機ごと切り裂く。

最後の量産機が地面に倒れ伏す。

ここまでの時間1分21秒、圧倒的と言わざるを得ない。

『2号機を回収ポイントまで運ばねばな。』

ケーブルを繋いだところで補修をせねば戦わせることはできん。』

2号機を抱えて回収ポイントへ向かい下ろすゲンドウ。

『聞こえるか葛城くん。』

私だ、碇だ。

アスカの回収を頼む。』

司令室は啞然としていた。

シンジがウルトラマンになれる姿を知っていてなお、父であるゲンドウが見知らぬ工
ヴアに変身したのを普通に受け止められるわけがなかった。

しかし彼らも仕事人である。

ゲンドウの言葉で我に帰りすぐさま動き出す。

ミサトは外部マイクでゲンドウに回収指示に対する了解を伝えた。

『これでいい。』

あとはシンジ達がこの先どうなるかは彼らが…

む☒』

エヴァとなっているゲンドウは何かを感じ取っていた。

最悪の予感、とでも言うべき激しい胸騒ぎ。

司令部からも同様のアラームが鳴り響いていた。

「今度は何☒」

「国境海域付近に設置された観測機からの報告です！

高速の飛行物体を確認、パターン青です！

これまでに観測されたことのないようなエネルギー量です！」

「司令！

すみませんが、もう一戦お願いできますか？」

状況はゲンドウの耳にも入っていた。

『状況は把握した。』

おそらく奴らの本丸だろう。

シンジも遠くで構わんから出せ。

出撃ルートが塞がっているのならZになってでてきてもかまわん。』

指示を出しながらゲンドウは周囲の変化に気づいた。

いつの間にか嵐が吹き荒れている。

そして空から舞い降りてくる、光を飲み込む影の巨人。

その姿はまさしく醜悪なウルトラマンだった。

カラータイマーの部分には赫赫と輝くコア、その体表は白と濃紺のコントラスト。

頭部は銀色の鶏冠にウルトラマンの大きな瞳の中にギョロギョロと動く目玉。

そして使徒に混じって伝わるこの感覚は

『まさか…』

培養したゼットの細胞を組み込んだのか☒』

目の前にある醜悪な生命体は世界を守る光の巨人と同じ空気を纏っていた。

これまでの使徒戦で負ったダメージの中ではZの細胞、体表が剥離することもあった。

当然人間であれば微細なそれが、ウルトラマンサイズだと容易に見つかる。

極秘裏にそれを回収したゼーレがそれを培養していた。

こいつは、危険だ。

覚醒したシンジでも命がけで戦わなければ勝負にならないほどに。

ゲンドウは肌でそれを感じ取っていた。

次の瞬間、エヴァが動く。

一瞬で背後に回り込まれたゲンドウ、咄嗟にフィールドをはるが

フィールドを透過して殴られる。

馬鹿な、フィールドを透過するなど！

ゲンドウも何とか捌き続けるが次第にヒット数が増えていく。

そして、決定的な拳が刺さりゲンドウは体制を崩した。

その瞬間を狙い、敵が両腕にフィールドエネルギーを凝縮させ、放つ。

ゼスティウム光線に似たそれは、ゲンドウが全力で貼ったフィールドすら容易く碎

き、13号機を飲み込んだ。

光線が過ぎ去った後には膝をつく丸焦げの13号機が煙をたなびかせながら、その姿をうつすらと残し徐々に消えていった。

13号機をたやすく屠ったエヴァ、その名をエヴァ・シグマ。ウルトラマンZを模した災厄を運ぶ天使。

そこに収まるのは太陽系から除外された最後の惑星・冥王星の名を冠するプルトと呼ばれるインフィニティ。

他の惑星の名を持つ10星と比べて比較的高い戦闘能力を有する。

そしてシグマの最大の特徴はコアへのダイレクトエントリーステム。

かつて碓ユイを飲み込んだそのシステムで他のエヴァ量産型とは違い、完全なシンクロへと至り、なおかつウルトラマンの細胞によるATフィールドの無効化、アンチATフィールドを操り戦闘することでゲンドウを下したのだ。

シグマの見つめる先には横たわる碓ゲンドウの姿があった。

哀れな旧世代の王よ、その命で我らへの贖いの贄となれ。

シグマが右足を高くあげ、そのままゲンドウを踏み抜こうとした瞬間

コードアップ！デルタ！

黄金の光を纏う初号機が両手でその足を止める。

「おい、なにをやっているんだ…」

シンジの低い声がプルトを戦慄させる。

「この人は僕の父さんだ。」

それ以上やるなら僕が相手だ！」

15話 calling

エヴァアシグマの攻撃を受け止めた初号機。

話はこの場面から2分前に遡る。

なんとか地上へ出撃した初号機は、ミサトの命令を受けてアスカの回収に動き出していた。

回収地点に横たわっている2号機。

シンジは慌ててプラグから飛び降りると、2号機のプラグ射出用の外部コードを打ち込みプラグを露出させる。

中にいたアスカは想像通りぐったりしていた。

「アスカ、アスカ！」

しっかり、怪我はない☒

シンジの声かけにうつすらと目を開けるアスカ。

「シン、ジ…」

そうか、アタシは司令に助けられて…」

頭のはてなマークが盛大に飛び交うシンジ。

初号機に外部カメラの映像は届いていなかった。

そのことを何となく察したアスカ。

「アタシのエヴァ・トリニティが動かなくなつた時に司令がアタシを量産機から守ってくれたの。」

シンジがゼットになるみたいに、見たことのないエヴァに変身したわ。

それであつという間に量産機を倒して、そこから先は気絶しちやつたから覚えてないの。」

アスカが何を言っているのか分からなかったシンジだが何となくは察した。

やはり父には何かの秘密がある。

だけどそれは、自分達に敵対する何かではない。

そんな考えに浸っていたところ、ミサトから通信が入り我に帰る。

「シンジくん！」

もう一機の量産型が司令と交戦に入ろうとしているわ！

問題はエネルギー量以上に、外見がゼットに似ているの：

シンジくんもすぐ向かつて！」

ミサトの声から緊急事態を察したシンジ。

そこへアスカが持っていたキーを握らせる。

「シンジ、トリニティのキーは機能停止してるから使えないけど…

他のあんたから預かったキーは無事よ。

持ってきたさい！」

気合いと共に渡されたキーを握りしめ、初号機に乗って父の元へと向かう。

父さん、どうか無事で…

幸いにもシンジは間に合った。

大地に横たわる父、その父を踏み潰そうとするウルトラマンを醜悪に形どったエヴァ。

やらせない！

そこからは無意識にデルタライスクローを起動し黄金の嵐で加速する。

足を受け止め、エヴァを弾き飛ばすシンジ。

そして物語は現在へと繋がる。

黄金の嵐でかなり遠くまで吹き飛ばしたシンジは、急いでゲンドウを回収する。

「父さん！

無事？」

「シンジか…

すまない、あのエヴァ…

エヴァ・シグマには勝てなかった。」

「シグマ？」

「あのエヴァに乗っているインフィニティがそう言っていた。

すまないシンジ、あとはお前たちに託してもいいか？」

そう言ったゲンドウの目は、申し訳なさどシンジへの信頼で溢れていた。

父からの信頼。

それはひ弱な少年を戦士へと変えた。

シンジが抱いた覚悟、それは父を、全てを守るために敵を倒すと言う覚悟。

そしてその覚悟が、少年を覚醒させる唯一の trigger。

覚醒した碇シンジはその瞳を真紅に染める。

「父さんは、初号機の中で待っていて。

行きましょうZさん。

今なら、あれが使える。」

その右拳を眩い光に輝かせて、エントリープラグを出ていく。

『シンジ、その目はまさか……

いけるのか？』

自信に満ちた顔で頷くシンジ。

真紅に輝くオリジンのキーを握りしめ、起動する。

「希望を導け、真紅の絆！」

ウルトラマンZ！アドバンスゼスティウム！

ブートアツプ！アドバンスA to Z！

青と銀、黒と真紅の巨人が顕現する。

『はい、よ偽物！』

お前の歪な力と、私たちの絆のどちらが強いか見せてやる！」

激しい肉弾戦が始まった。

Z最強の形態であるアドバンスゼスティウムは通常の徒手格闘戦ですらデルタライズクロウを大幅に上回る能力を見せる。

現にグンドウが手も足も出なかったシグマ相手に着実にダメージを与えていた。

しかし戦況も徐々に変化していた。

シグマの拳もZを捉え始め、逆にZの攻撃はいなされ始めた。

とは言え、全ての攻撃がふせがれているわけではない。

だが流石は使徒とエヴァ、そしてウルトラマンの融合体というべきか、とうとうZが決定打をくらい後退してしまう。

そこですかさず体制を立て直したZとシンジはさすがと言うべきだろう。

しかし、シグマは必殺の一撃を放つ体勢に入っていた。

両腕にゼステイウム光線のエネルギーとフィールドエネルギーを凝縮するこの技はゲンドウを倒した光線とは違い、真にシグマの必殺技と言える技だった。

この星の使徒に楯突く愚かな異星の巨人よ、その魂ごと散らしてくれる。
インフィニティの思念が伝わってくる。

これは、やばいやつだ！

乙も全力の一撃を瞬時に放つ。

『アドバンス、ゼステイウム光線！』

黄金の光線と真紅の光線がぶつかり合う。

その光線のぶつかり合いによる爆発はジオフロントを覆う装甲板を全て蒸発させ、二体の戦いの舞台をジオフロントへ移させた。

乙は手元にベリアロクを召喚し、そのエネルギーを真紅の斬撃に変換し、シグマに向けて放つ。

土煙が舞う中の奇襲は全ての斬撃を命中させ、シグマの左腕を切り落とすと言う深手をおわせた。

司令室からも歓声上がる。

着実なダメージを与え、深手をおわせた。

このままいけばいずれは！

しかしその希望は、歓声と共に凍りつく。

傷の断面が盛り上がり、素体の左腕を形成し出したのだ。

そして右手にはいつの間にかロンギヌスレプリカを構えて突っ込んできた。

面食らったZだがベリアアロクで、受け止め払い除ける。

Zとシンジの心の焦りを表すかのようにカラータイマーが赤く点滅し出す。

やばい、一撃で仕留めないと勝ち目なんかない！

残りの全ての力をベリアアロクに込める。

闇色のエネルギーが迸る。

『アドバンス・デスシウムスラッシュユー！』

光線の時とは比べ物にもならない馬鹿げたエネルギーの斬撃がシグマを飲み込もうと空間かける。

しかしシグマも槍にウルトラマンの光を込めて投擲する。

拮抗したのは一瞬だった。

辺りを閃光が包み込み、この戦いの決着を誰もが知覚できない。

やがて聞こえる地に倒れ込む何かの音。

Zの体に新たなダメージはない。

そして視覚を取り戻した時、目の前に倒れ伏したのはシグマのものと思わしき肋骨から下の巨体が倒れ伏していた。

「僕らの、勝ちだ。」

そう呟いた時には全ての力を使い果たし、シンジは元の姿に戻っていた。

司令室でも勝利に沸いていた。

ミサトもその余韻を感じながらもシンジを回収する指示を出していた。

これで全ての戦いにケリがついた。

アスカも、レイも、あのゲンドウですら、天に向けて拳を突き上げていた。

司令室の冬月が涙ながらに呟く。

「これで、我々にも平和な明日が来るのだな…」

「そんな明日、劣等種のあなたたちに来るわけないじゃない。」

愚かね、ただのリリンの皆さん。」

司令室に響く声は聞き覚えのある声だった。

レイの声だ。

誰もが驚きレイの方を見る。

しかし、レイ自身が驚き首を振る。

「今の声、私じゃない！」

そしてレイの後方、闇の中から歩いて出てきたのは

「綾波、レイ」

リツコが眩き驚きが伝播する。

新たに出てきたレイは、レイより三つほど年上に見える、ダークシルバーの髪をセミロングにしていた。

インフィニティのような狂気の微笑もなければ、純白の容姿でもなかった。「久しぶりね、リツコお姉ちゃん。」

そして初めまして、二番目のわ・た・し?」

その言葉に答えを見出したのは司令室では冬月とリツコだけだった。

「あなたまさか!」

綾波レイNo. アン☒

あり得ない、あなたの魂は既にこのレイに!

それにあなたはあの時母さんに……」

「殺された?」

あのあとすぐくなくてくれたでしょ?

あれは嬉しかったなあ。

リリスの魂が二番目の私にあっても問題ないもの。

今の私は、私自身の魂を持っているから。

私の名前は太陽のシャニ。

リリン・インフィニティ10星のトップで、全てのリリンの母、マザーリリンとでも

言うべき存在よ。

その末の妹を迎えにきたわ、邪魔をしないでちょうだい。」

その時けたたましくアラームが鳴る。

「エヴァシグマ再起動！」

両腕を再構成中ですが時間の問題です！」

「もうプルトつたら。」

その場には新世紀のアダムもいるのね。

さあ、どうなるのかしら？」

シンジは理解できないものを見ていた。

目の前にはついさっき体の半分を消し飛ばしたはずのシグマがこちらを見下ろして
いた。

やばい、もう力を使い切って変身して戦う余力なんか無い。

そしてシグマが再構成の終わった手をこちらへ伸ばしてくる。

圧倒的恐怖心を感じながら脳裏に浮かんでいたのは以前乙に言われた言葉だった。

『シンジが諦めていないのに、ウルトラマンである私が諦めてはられないよな！』

乙さん、僕は最後まで諦めませんよ。

そう思ったシンジは無意識に叫んでいた。

「ウルトラマン、ゼエエーット!!？」

その時、シグマの左横から紫色の光の光線がシグマに襲いかかる。

よろめくシグマ、シンジは光線の放たれた方向を見ると、見覚えのあるウルトラマンが立っていた。

あれは、確かガンマフューチャーに変身するときに力を貸してくるってZさんが言ってた…

「ティガ先輩？」

いや、似てるけど違う。

「あのウルトラマンはティガ先輩じゃないっすよ。」

あの人はウルトラマントリガー。

超古代から目覚めた光の戦士っす。」

傍には灰色の服を着た男の人が立っていた。

この人、どこかで…

『ハルキ…なのか？』

具象化したZさんが呟く。

ハルキさんってまさか☒

「Zさん、探しましたよ！」

今はこの子と戦ってるんっすね！

ナツカワハルキ、ただいま参りました！」

16話 c r a z y b a d l o v e

「新しい形態☒

すごいんっすねシンジくん…」

エヴァシグマとの戦闘中現れたZの相棒ナツカワハルキ。

これまでの経緯をかいつまんでZが説明していた。

「でもこれで納得がいったっす！」

Zさんが消えた次元を探すためにガッツセレクトに残ってたZさんのエネルギーの記録を次元測定器で探してたんすよ。

そしたら、一瞬莫大な反応があつたのでポイントを特定してケンゴ君と飛んできたんすよ。」

『そういうことは、ケンゴがトリガーであるのはみんなに知られたんだな？』

しかし次元を超えてくるとは…

もしや、ゼロ師匠のウルティメイトイージスの力で？』

「最後の戦いでバレちゃいました、俺とZさんの関係もバレたんでこうしてここに来れたんですけどね。」

ゼロ師匠とは会えてないっす。

ここに来たのはケンゴくんの新しい力っすよ。」

ここまで話内容が理解できず置いて行かれている主人公、碓シンジ。

口を挟もうとした時、再び地響きが起きシグマが地面に倒れ伏す。

そして紫色のウルトラマン、トリガーがその光を散らしながら人型になり、シンジたちの元へと走り寄ってくる。

「ハルキさん、一応倒しましたがど吹き飛ばした腕とかがゆつくりですけど再生されます！

あのウルトラマンもどきはなんなんですか？」

「お疲れ様でしたケンゴくん。」

シンジくん、彼はマナカケンゴ君。

さっきのウルトラマントリガーに変身してた人です。

彼は、なんとか俺たちと違ってウルトラマンご本人の人間体って感じですよ。

ケンゴ君、彼は碓シンジ君と言ってこの世界でZさんと一緒に怪物みたいな使徒ってのと戦ってたそうです。

俺たちのキングジョーみたいなエヴァだったので戦ってたらしいんですけど、あれは敵のエヴァでZさんの力も持ってるやつで話を聞く限り一撃で全て吹き飛ばさないと厳し

そうですね。

もうエタニティコアの力は使えそうっすか？」

「いけますよ！」

Zさんもいるなら、一気に決めれそうですね！」

『シンジ、デルタライズクロウのキーをハルキに渡してくれ。

私たちが戦っている間に、司令を本部まで避難させてくれ。』

Zのいう通りにキーを渡すシンジ。

自分にはもう戦える力は残っていない。

後を託す形になるのが心苦しい。

しかし、それは杞憂だというようにハルキが肩を組んでくる。

「シンジくん！」

ケンゴくんも色んな怪獣たちと戦ってきた歴戦の戦士です、そのケンゴ君が苦戦しながら倒した相手を一度は倒したなんて凄すぎるっすよ！

後は、俺たちに任してください。

その代わり無事でいてくださいね！」

シンジは報われた気がした。

早く父を安全なところに逃すためにエヴァをの元へと急ぐ。

シンジが立ち去ると並び立つ2人のウルトラ戦士。

「Zさん、一緒に戦うのは久しぶりですね！」

俺はシンジくんの強化形態の力は使えないので、シンジくんの方が良かったかもしれないですけど、我慢してくださいよ！」

『ハルキならデルタライズクロードで十分だろ！』

ウルトラ気合い入れていくぜ！」

並び立つ2人がキーを起動させる。

ウルトラマンZ！デルタライズクロード！

ブートアップ！デルタ！

グリッタートリガーエタニティ！

ブートアップ！グリッターゼペリオン！

「闇を飲み込め！黄金の嵐！」

「宇宙を照らす、超古代の光！」

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンZ！」

『ウルトラマン Z！／トリガーア！』

復活するエヴァシグマ。

その前に立ちはだかるのは2体の黄金の光を放つ巨人。

Zはベリアロクを、トリガーはグリッターブレイドを構える。

最大の大一番が始まる。

トリガーの斬撃がシグマの腕を斬り飛ばすがすぐさま再生し、ロンギヌスコピーですぐさま斬り掛かってくる。

そこですかさずZがベリアロクでロンギヌスコピーを受けとめる。

唾競り合いを続け弾いた瞬間ベリアロクのデスシウムフアングを浴びせるがそれもすぐさま回復される。

しかし、ウルトラマンたちは気がついていないがシグマの回復力も徐々に衰え始めていた。

シグマも2体相手に、ロンギヌスコピーを巧みに操り確実にダメージを与え始めていた。

両陣営の力は完全に拮抗していた。

どちらが先に力尽きるのか：持久戦の様相を呈し始めていた。

「父さん、しっかりして！」

すみません、父さんを運んでください。」

シンジは父ゲンドウを回収地点へと運び、慌ててやってきた救護班に引き渡してい

た。

おそらく体のダメージを見る限り、この戦いが終わるまで目を覚ますことはないだろう。

父が変身していた謎のエヴァや自分たちに隠している秘密について教えて欲しかったが、それこの戦いを乗り越えないと許されなことはシンジもわかっていた。

最後の敵、エヴァンゲリオンシグマ。

奴を倒せば全てが終わる。

変身はできなくても、初号機での援護なら…

そう思い立ち初号機に乘ろうと振り向こうとする。

しかしその瞬間、シンジの脳裏を言いようのない悪寒が走り抜ける。

この場にとどまっただけではない。

反射的に横つとびに飛ぶシンジ。

次の瞬間、シンジが立っていた場所には巨大な手があった。

そう、見慣れた初号機の手が。

「あら、思ったよりやるわね。

もつとナヲナヨしてると思ってたけど、これを避けるとは…

歴戦の戦士の勘ってやつかしら？」

振り向くと初号機の肩にはレイがいた。

いや、違う。

「綾波……じゃないよね？」

あなたは、誰だ！

シンジがぶつつけた疑問が意外だったのか、一瞬驚いたレイそっくりの女。

顔を満面の笑みに歪めるその顔は、本来の整った笑顔を醜悪にし、欲情したかのよう。ななんと形容し難い表情だった。

「うっ、ふふふふふふふふ」

さすがは私の見込んだ新世紀のアダムね。

あの子と間違えられるかもと思ってたから、こんなに嬉しいことはないわ！

私はシヤニ、リリンインフィニティの頂点にしてあなたの伴侶になるものよ。

あなたはね、新世界の始まりの男であり、生まれ変わった世界で全てのインフィニティの頂点であり神となるのよ。」

何一つシヤニの言うことが理解できないシンジ。

そんな状況でも問わずにはいられなかった。

「君が何を言ってるかわからないよ！

なぜ初号機を動かしているの☒

なぜ僕なんだ!」

「そんなに怖い顔しないで、ね?」

言ったでしょ、私は全てのインフィニティの頂点だと。

私にも宿っているのよ、リリスの魂の一部がね。

リリスの写し身たるこの巨人を操るなんて造作もないわ。

なぜあなたを選んだのか:それはそういう宿命だからよ。

さあ、聞きたいことはいろいろあると思うけど儀式が終わってからね。」

そういうと、再び初号機が動き出し、今度こそ捕まってしまうシンジ。

「あなたは個の形を保ったまま何度かインフィニティとして覚醒しているのよ。

さあ、目覚めなさい。

そして見せてちょうだい、あなたのシン化を。」

やばい、もう意識が

Zさん:

そこでシンジは意識を手放した。

シグマとウルトラマンたちの戦いは大詰めを迎えようとしていた。

シグマが光線の構えをとる。

乙とトリガーもそれぞれ光線を放つ体制に入る。

そしてシグマが放つ赤黒い光線と2体の黄金に輝く光線がぶつかり合う。

『みんなの笑顔のために！』

うおおおお、チエストおおおお！」

2体のウルトラマンの気持ちしがシンクロし、次第にシグマの光線を飲み込み、細胞の一欠片も残さず蒸発させたのだった。

「よおし！」

乙さん、ケンゴくん、これで終わったすね！」

「お疲れ様でした！」

あとは力を貯めて、元の世界に帰るだけですわね！」

『やっぱりハルキのチエストは気合が入りますなあ！』

シグマは復活の様子もない。

完全に勝利したウルトラマンたちは談笑とグータッチをしていた。

その時背後からゼットたちを巨大なエネルギーの塊が襲い、吹き飛ばされる。

なんとか立ち上がりながら攻撃があった方向を見るとそこには

普段閉じられている口を開き、雄叫びを上げながらこちらに手をかざす初号機が立っ

ていた。

その目は覚醒したシンジと同じく巨大な真紅の瞳孔が見えており、蛍光色の緑でペイントされていた箇所はオレンジの光を放ち、そして頭上には天使の輪のようなエネルギー体を浮かべていた。

『シンジ！』

何をやってるんだ、シグマなら倒したぞ！

それになんだそのエヴァの姿は☒』

思わず語りかけるZ。

しかしその返答はフィールドエネルギーを圧縮して返された。

すぐさま応戦しようとしてそれぞれの剣を振るうが、ATフィールドに阻まれて一切の攻撃が通用しなかった。

逆に初号機の攻撃は苛烈さを増し、ウルトラマンたちは立つていくことすら困難になるほどのダメージを負っていた。

その時広域マイクでミサトが語りかけてくる。

『Z！』

シンジくんは初号機の中にいるけど、彼は何かには操られているの！

お願い、シンジくんを助けて！』

やっぱりな、シンジが自分の意志でこんなことするはずがない。

自分の闇に打ち勝った、目に光を宿したシンジにデルタライズスクローのキーを託した時から、Zはシンジを信じていた。

『何か知らないが、早く目を覚ましなさいよシンジ！』

行くぞハルキ、ゼステイウム光線！』

シンジを救うために、残りのエネルギーを全て光線に込めて放つ。

戻ってこい、相棒！

Zさんの声が聞こえた気がした。

なんて言ってたかはわからないけど…

そこでシンジはプラグ内で寝ていて目を覚ましたことに気づく。

「あれ、僕は初号機につかまれていたはず…

なんでプラグの中に…え？」

そこでモニターの外の景色にようやく気がつく。

一面の焼け野原、ジオフロントの遮蔽ドームが焼き切られ空が見えている。

辺り一面は火の海になりつつある。

いや、そんなことはどうでもいい。

それよりなぜ、

初号機の前にZとトリガーが倒れている？

もしかしてこれは、Zさんを倒したのはまさか

僕？

「うわああああああああああああああああああああ！」

少年の悲痛な叫びが辺りを包み込み、絶望がもたらされた。

17話 ゼツボウノヤリ

ジオフロントに広がる地獄絵図、その中心にいたのは倒れ伏す2人の光の戦士と絶望に染まったシンジとシンクロするように天に向かって叫ぶ初号機だった。

その中で全てをNERV本部の頂点で見ていたシャニは妖艶な笑みを深くする。

「これでアダムは絶望に堕ちたわね。

ここまでできたら中の碇ユイには覚醒することもできない…

さて、ゼルエルを射抜いたあと行方がわからなくなったオリジナルのロンギヌスも間もなくここにやって来る。

まったく、絶望の槍とはよく言ったものね。

神の子の絶望に呼応して引き寄せられる性質とは恐れ入るわ。」

そう言いながら肩をすくめたシャニは自身の直下、ネルフ本部の地下にしてリリースを封印するセントラルドグマに視線を向けた。

「これで全てのピースが揃う…」

今の綾波レイは肉体ごとリリースに戻したけど、リリースは眠ったままな状態。

でも当然よね、私自身気づいていなかった真実…

まさかりリスの魂が私とあの子の中で二分されていたなんてね。

あの子に宿った陽の魂でリスが目覚めなかったということは…私の持つ陰の魂が核つてことよね。」

試したことないけど、呼べば目覚めるのかしら？

起きろ、リス。

次の瞬間轟音と共に巨大な綾波レイが地下から迫り上がってきた。

だがその質量とは裏腹に施設には一切の壊れはない。

巨大化したけど質量はないということなのか、モニターしていた司令室ですら一切わかっていなかった。

ただ一つ分かっていたのはパターン反応から目の前の存在がリスであるということとだけだった。

一同が呆然とする中で冬月だけがうめくように呟く。

「リスがレイの姿をかたどっている…まさか、あの初号機を取り込んで儀式を始める気か☒」

そして全長百二十メートルほどになるまで巨大化したリスとその肩に乗るシャニ。

その手には初号機を掲げている。

すると、どこからともなく高速でロンギヌスの槍が飛来し初号機の喉元で止まる。

「これで、儀式に必要なものは全て揃ったわね。

それじゃ私も一旦リリスに戻りますか。」

そういうとシャニはリリスの首元から体内に吸収されていた。

直後、リリスの髪が暗めの銀髪に染まる。

黒目に赤い瞳孔、この世の悪夢と言わんばかりの見た目に染まる人の始祖。

それは行動の主導権をシャニが握ったことを示していた。

リリス、もといシャニが次にした行動は初号機の胸部装甲をもぎ取ることだった。

無惨にも露出する初号機のコア、そこにロンギヌスが触れた瞬間に初号機を包み込み生命の木となる。

前後上下左右に突き出したどの方面から見ても十字架と言える形状の生命の木になった初号機をリリスはその豊満な胸の谷間に押しつけ少しずつ、少しずつ飲み込み、ついには一体化を果たしていた。

そして儀式の始まりを示すように四枚の光の羽がシャニの背から生えてくる。

「あの羽は、15年前と同じ」

司令室でこの動きを見ていたミサトが叫ぶ。

ミサトは、セカンドインパクトを爆心地で見た唯一の生き残り。

何が始まるのか、その正体を感じて捉えていた。

「デストロドー反応が増大している☒

このままで人が形を保てなくなるわ、どうなっているのみさと！」
計器を見つめ、ことのしだいを理解したリツコがミサトに問いかける。

しかし、ミサトは答えない。

これから起こることに、もう誰も抗えはしないと感じていたからだ。

しかし、その絶望的な静けさを破る爆音が鳴り響いた。

モニターを全員が凝視する。

そこには、立ち上がりシヤニにむけてベリアロクの黒い斬撃を放った体制でとまるZが立っていた。

『おいおい、全開のパワーで打ち込んだのにダメージがないぞ☒

シンジを引き剥がすのは骨が折れそうだな。』

そう呟くZ、次の瞬間幾重にも重なったフィールドがZを押しつぶす。

「まだ倒れていなかったのね、ウルトラマンZ。

無駄よ、碇シンジは儀式の核として私の中にとどまりやがてインフィニティの王として生まれ変わるの。

この儀式が終われば、人はインフィニティかそうでないものかへ生まれ変わるのよ。

その世界にあなたたちの生きる場所はないわ、だから消えなさい光の戦士よ！」
シヤニの言葉に戦慄するZ、早くシンジを助けなければ。

焦りは募るが、デルタライズクローでは歯が立たない。

アドバンスステイウムにはシンジがいないためになれない。

万事急須といったところだった。

そこで、ずっと黙っていたハルキが口を開く。

「Zさん、シンジくんを救うために何かを投げ出す覚悟はありますか？」

最初ハルキの問いかけの意味が全くわからなかったが、すぐに答える。

『当たり前だ！』

私は、相棒を見捨てたりはしない！

そのためならこの命、燃やしても構わん！』

Zの覚悟を受け止めたハルキ。

背中からあるものを取り出した。

『Zライザーじゃないか！』

なんだ、直っていたのか！』

それはZ本来の変身アイテム、ウルトラZライザーだった。

「一応は使えるようにアキトくんが直してくれました。」

ただ、デルタライズクロー以上の力を使うと壊れる可能性が高いのでスパークレンスが壊れた時の予備として持ってきてきました。」

『だけど、ライザーで変身し直したところでパワーは変わらない！』

新しい力でもあれば別だが……』

言いかけてハツとした乙。

まさか……

「そのまさかです。」

アキトくんがこのメダルを作ってくれたおかげで、新しい力が手に入ったんす。」

そういうハルキの手には、トリガーのメダルがあった。

そしてハルキはさらに、コスモスとオーブのメダルを取り出し手の上に並べる。

そうすると手の中でメダルが輝きだし銀色に光る新たなメダルに進化した。

「デルタライズクローとは違って、何かを救いたいという思いがメダルを進化させました。」

これに賭けてみませんか？」

乙は即座に頷いた。

これが最後のチャンスなのだ。

そしてハルキの手にアクセスカードが舞い降りる。

ハルキ、アクセスグランデッド！

ライザーがカードを読み込む。

「混沌を照らせ、慈愛の聖剣！」

コスモス・エクリプス！

オーブ・オリジン！

グリッタートリガーエタニティ！

セットしたメダルを読み込み、新たな力を呼び覚ますウルトラマンたちの名を高らかに叫ぶ。

「押忍！」

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマン、Z！」

「ウルトラマン、ゼエエツト！」

そしてライザーを天に掲げ起動する。

数多の輝きを放ち、三体のウルトラマンがZと融合していく。

混沌すら包み込むその名を

ウルトラマンZ・シータセイヴァー！

トサカの下にエタニティのような金の筋が見える。

体はエクリップス、オリジンの色を混ぜたように黒、赤、青、金に、彩られていた。デルタのような刺々しさはない。

しかしその名を体現するかのように剣士であり救世主を思わせる薄い装甲を纏っていた。

そのままベリアアロクでフィールドを細切れにする。

『お前がなんだろうと関係ない！』

シンジを返してもらおうぞ！』

18話 THE LAST NAME

赤く濁る水が辺りの空間を満たしている場所。

その自らは血生臭い、LCLの香りがしていた。

おそらくそんな環境で目を覚ましたら寝覚めは最悪だろう。

しかし、何事にも例外は付き物で、ここで平然と目覚めた人物がいた。

そう、碓シンジである

『あれ…僕は何をして…』

そうだ、シャニに捕まって操られた初号機の中にいて槍が僕を…

「あら、気がついたのね。

貴方が目覚める頃には全てを終わらせておくつもりだったんだけどね。」

そう言つて声が聞こえた方を振り向くと大人の綾波レイ、いやシャニが立っていた。

そしてようやくシンジは自分がエントリープラグの中ではなく何かの膜に包まれているということに気がついた。

「驚いたかしら？」

今貴方の体は再構成の真っ最中なのよ。

他のこの星の生き物達は全て形を失って一つになっっているけれど、貴方の今の状態はそれとは違う。

貴方の体はよりインフィニティの力に耐えられるように変わりつつあるのよ。」

そう聞いて慌てて自分の体を見回すが特に変わったところが見られない。

シヤニ達のような見た目になるかと思っていたシンジは少しだけ安心し、仲間のことが気になったがそれ以上に気になっていたことを尋ねてみた。

「シヤニさん…でしたよね？」

前に言っていたことで気になってた事があるんですけど、僕がインフィニティに覚醒してると…

それも何回も…僕思い当たる事がないんですけどどういう事なんですか？」

シンジが声をかけると鳩が豆鉄砲を食らったような表情に変わる…

「驚いたわ、仲間の状態を聞いてもつと動揺するかと思っていたけれど…

まあいいわ、質問に答えてあげる。

貴方が覚醒した話だったわね、貴方目の色が変わったことか不思議な力が使えた事がないかしら？」

そういえばカヲルちゃんと戦った時にゼットさんが僕の目を見て驚いてたな…アドバンスステイウムになった時のことだったような…

シンジの様子を見てシャニが続ける

「なんとなくは思い当たる節があるようね…」

おそらく貴方が思い当たる時のことが覚醒していた時のことよ。

Zの力もあるから混乱していたのでしようけど、あれは間違いなく貴方の中のリリンの力が覚醒して断片的にインフィニティの力を使っていたのよ。

貴方も見たのでしょ、普通のリリンがインフィニティになるところを。

私たちが上位種が覚醒した時に私とリリスの魂が繋がっていてね、それにレイの肉体にリリスの魂が定着してしまったのかインフィニティ化するとあの姿になるのよ、本来はね。

しかし貴方はその姿から変わらなかった…ということとは更なる上位種に進化したかそうなる資格を持っていると言う証…

やはり貴方こそ新時代のアダムに相応しい、さすがは選ばれし神の子と言ったところかしらね。」

シャニの口から繰り返し言われるシンジの別の呼び名、神の子・新たなアダム。

「シャニさん、なんで僕のことをアダムとか神の子と呼ぶんですか」

「そうね、まずそこから説明しないといけないわね。」

シンジくん、貴方はなぜエヴァ初号機のパイロットになれたのかしら

母親がエヴァの開発者だから？

母親がエヴァに取り込まれたから？

違うわ、答えね：

これが仕組まれた運命だからよ。」

シンジは混乱していた。

仕組まれた運命だつて？ だつたらトウジが、綾波やみんなが傷ついて大変な目に遭つたのも誰かが決めたことだつていうのか？

シンジが狼狽するのも構わずにシヤニは言葉を続ける。

「もつと分かりやすく教えてあげる。

過去・現在・未来の全ての出来事が書かれた預言書、名を死海文書。

全ての元凶であるゼーレがそれをもとに人類を強制的に進化させようとしたのが人類補完計画。

分かるかしら、要は使徒と戦うことは神様か何かが決めた運命でゼーレはそれをなぞっているに過ぎないの。

そしてその物語、いえ、ここまで来たらもはや神話ね。

その神話の登場人物の名が刻まれたものが生命の書。

ここには使徒の名、つまり貴方のお友達だった渚カヲル達だけではなく、対抗するリリンの名やその役割も刻まれているの。

エヴァ初号機に乗り全ての中心に位置する少年、第3の少年・碇シンジとね。

つまりね、この世界は最初からエンディングまで決められたストーリーをなぞって
いるだけのよ。

繰り返し、何度も何度もね。

その中で貴方は全ての中心、新たな時代を切り開くのも全てを終わらすことも望みのまま、ゆえに新時代のアダムとも神の子とも呼べるの よ。」

そこでシャニは大きなため息を一つ着く。

「まあそれも今となつては関係ないのだけどもね。

なんでかかっていうと、二つの書には私の名前はおろかりリンインフィニティの名は存在していないのよ。

貴方の相棒のゼットもね。

この世界にはいつからか何かしらのイレギュラーが混ざり込んでしまっていて本来のシナリオから逸脱したどころの騒ぎじゃないわ。

完全に新たな神話として動き出しているのよ。

その中で私の目的はただ一つ。

私たち綾波シリーズは補完計画のためだけに生み出された人形にすぎない、けどインフィニティに覚醒した今ならただ一つの命として生きれるの。

お願いよシンジくん、私と共に補完計画を行ってインフィニティの世界を作って、そこで私たちが始まりの2人になって新しい時代を始めるの。」

つまり、補完計画の結果はシンジがコントロールできるといふことなのか…

「シャニさん、それって僕が補完計画の結果を決めれるってことだよな？」

インフィニティの世界を作ったとして、他のみんなはどうなるの?」

シャニは目を逸らそうとしたが、覚悟を決めシンジの目をまっすぐ見据える。

「リリンの因子が強ければ貴方のように自己の姿を保って覚醒できるわ。」

弱いものは…よくて今の他のインフィニティ同様廃人の様になるか、最悪消滅するわ。

でも仕方のないことなの?

このままの世界が続けばインフィニティになった人たちは世界の敵だと殺されてしまうのが目に見えてるの。」

ならより多くの命を救いましょうよ。」

シャニの言葉に心が揺れ動くシンジ、しかし

「ごめんシャニさん、それはできないよ。」

世界の先を決めるなんて僕一人じゃ決めちゃいけないんだ。

でも、僕はインフィニティになったみんなもシャニさんもみんなが生きていける道を探したいんだ、だから一旦全てをやめよう。

今ならまだ間に合うよ。」

シンジの言うことは真理でもある。

しかし、ただの綺麗事だ。

シャニのシンジを見る目は失望の色を滲ませていく。

そして声音を低くしてこう言い放った。

「交渉決裂ね、いいわ。」

なら貴方をインフィニティへと覚醒させて、私の力で無理矢理にでも新たな世界を創造してもらおうわよ。

全くZの新たな力とやらも厄介なものね、リリスの深奥に位置するここまで影響を与えられるなんてね。

おかげでシンジ君の完全調整も中途半端になっちゃったわ。」

そこで何もない空間に外の様子が映し出された。

そこには新たな姿をした剣を持ったゼットが剣を杖代わりにして膝を付いている状況だった。

「それでもインフィニティ・クイーンになった私と融合したりリスには歯がたたなかつたわ。

さあシンジ君諦めなさい。

貴方の最後の希望も見ての通りよ。

命乞いなさい、そうすれば私もあんなか弱い巨人殺したくないから助けてあげるわ。」

そう言いながら背中から赤い羽を生やし頭上に真紅のエネルギーの輪を浮かべるシャニ。

通常のインフィニティを超え覚醒体となったその姿はもはや天使とも悪魔とも呼べる姿だった。

それに呼応したのかシンジの心臓が大きな鼓動を刻み始める。

ドクンツ!!?ドクンツ!!?

次の瞬間シンジの髪は淡く輝く青みが買った銀色に、体もエネルギー体となったのか白く揺らめく光を放っていた。

極め付けはこれまでより濃く真紅に輝いたその瞳。

真のインフィニティが目覚めた瞬間だった。

それを見てシャニが嬌声を上げる。

「これよ!!?これを待っていたの!!?」

貴方はもう人間ではない、真のリリン・インフィニティとして目覚めたのよ。

「さあ、新たな世界を築きましょう。」

しかしシャニの声はシンジには届いていなかった。

シンジは覚醒したことで補完計画で混ざり合った人たちの魂の声、知識や記憶などが流れ込んできていた。

常人ならとつくに死んでいる情報量だが覚醒したシンジには造作もないものだった。

そして全てが流れ込んできた後自身の力の使い方が流れ込んできていた。

これって…

「シャニ…ごめん。」

やっぱり僕は君の言うことは聞けないよ。

その代わり、僕が全てを救う!!?」

シャニは面食らっていた。

まさか覚醒してまでも世迷いごとを吐くとは

「やれるものならやってみろ!!?」

ただし、この空間からは私が許可しない限り出ることはできない。

私と融合したりリリスが相手では、覚醒した貴方といえどどうしようもできないでしょう。」

そう、今シンジ達がいる空間は単にリリスの体内とはいえない特殊な空間。

現にシンジもATフィールドで空間に穴を開けようとするも全くできない状況だ。その時足元から轟音が鳴り響いた。

「くっ×

エヴァ初号機だと、碇ユイめ!!?」

貴様らの都合で私たちを生み出して置いて、いまだに立ち塞がるか!!?。」
シンジを庇うように現れた初号機にシヤニが毒付く。

その隙に初号機に乗り込むシンジ、しかし

「くっ、初号機がきても外からリリスを倒さなきゃ意味がない。

一体どうすれば…」

その時初号機のコアからユイの声が聞こえた。

『シンジ、初号機をウルトラマンの力で進化させるのよ。

今の貴方だからできる、本当の意味でのシン化を。』

そしてシンジはその手でオリジンのキーを覚醒させる。

ウルトラマンZ!!?アドバンスゼステイウム!!?

プラグのスパークレンスに差し込む。

エボリユーシヨンアップ!!? フュージョンゼステイウム!!?

今ここでやらなければ世界が終わる。

ゼットさんはここにはいないし助けにも来れない。

でもここには、

ゼットさんと紡いだ絆が、

皆が僕に託してくれたエヴァンゲリオンが、

そして

「僕がいる!!?」

ご唱和ください、我の名を!!?」

その時間こえたのは幻聴でもなんでもなかった。

この世界で形を保ってリリースに抗うウルトラマン2人の声が。

補完計画で個の形を失い溶け合って行ったネルフのみんなが。

『頑張れ、シンジ!!?』

これを聞いて立ち上がらなけりや死んでも死に切れない。

そして僕は自然に頭に浮かんだ名前をいくつもの祈りを込めて天に叫んだ。

「エヴァンゲリオン、ゼエエエエエツト!!?」

乙と立ち上がったトリガーが見ていた光景は地獄絵図だった。

全ての生物が光の柱となりその魂は巨大リリスの両手の間に生み出された黒い星に飲み込まれていたからだ。

万事急須と思つたその時頭の中に響いたお決まりのセリフ。

「ご唱和ください我の名を。」

叫んでいたのはゼットのもう一人の相棒だった。

「乙さん、シンジ君が!!?」

「ああ、ハルキ、ケンゴ、力一杯答えてやろう!!?」

『頑張れ、シンジ!!?』

そしてリリスのコアの中心から紫電の光が飛び出して黒い球体を両断して地上に舞い降りてくる。

コアにダメージを受けたリリスがその体積を減らしながら血を撒き散らし倒れていく最中、エヴァスパークレンスが高らかに舞い降りた福音の名をこの何も無い地上で歌い上げた。

エヴァンゲリオンZ!!?フュージョンゼスティウム!!?

初号機の頭部パーツはシャープにウルトラマンの形に、型のバインダーはウルトラマンノアのように。

その体は赤と銀、青とパーソナルカラーの紫を混ぜたものになっていて、胸の中央のコアはすみ渡るような青色を放っていた。

そして新たなエヴァはウルトラマン達に向き直る。

そしてZが口を開いた。

『シンジ、私のZという名はな。

エース兄さんがこの宇宙の戦いを終わらせる最後の戦士になってほしいと言う願いを込めてつけてくれた名だ。

エヴァンゲリオンZ、この世界の戦いを終わらせる最後のエヴァの名前としてこれ以上のもはないな。』

そして顔が見えないが笑い合う三人。

リリスが倒されたことで地上の人たちも形を取り戻し始めていた。

犠牲の多い戦いだった。

壊れた街や建物、人々の生活は厳しいままだろう。

これからは暴力ではない、見えない敵との戦いが始まる。

地上の人々やネルフの人たち、ウルトラマン達がそう考えていたその時だった。

『茶番は終わりだ劣等種ども。』

倒れたリリスの残骸が一つの球体へと変形し、そこから超大型のウルトラマンの10倍はある女性型の羽を生やした黒い巨人が現れた。

『貴様らの補完など必要無い。』

『全てを滅ぼし、一から楽園を作り上げよう』

19話 最後の決断

「目標を光学映像で確認！」

体長は約五百メートル、パターン反応青！

第二使徒と判別できませんがマギは解答不能を示しています。」

全員が己の形を取り戻したNERVのメンバー。

その中でマヤが状況を観測する。

「目標をリリスインフィニティと呼称する。

諸君、これがNERV最後の大一番だ。

必ず全員生きて奴を倒すぞ！」

司令部に戻ったゲンドウが指令を発する。

リリスインフィニティ、それはリリスとインフィニティ・クイーンと化したシャニが完全融合を果たした存在。

その瞳は黒と真紅に彩られ、黒い体表と本来のリリスにはないコアが胸の谷間に現れていた。

その背中には4枚のエネルギーの羽、頭上にはシャナと同じ真紅の光輪。

災厄をもたらす邪神、その姿はもはやリリスの面影はなく、既存の人類と文明を滅ぼす存在。

都市兵装の全てを運用して攻撃を始めるが、怯んだ様子は一切ない。

こんなもの倒せるのか？

人類に待つのは滅びだけなのか？

形を取り戻した誰もがそう思いかけた時、空を駆ける三つの流星が人々の目を奪う。

二つの黄金の流星、そして白銀の流星。

ウルトラマンZ・デルタライズクロー

グリッタートリガー・エタニティ

エヴァンゲリオンZ・フュージョンゼスティウム

この世界の全ての希望を担う光の戦士たちが黒き邪神へ立ち向かう。

『ケンゴ、シンジ！』

相手は体積がでかい分、的もでかい！

全力の必殺技で決めるぞ！』

ベリアロクの最大技・デスシウムスラッシュ

グリッターブレイドのエタニティ・ゼラデス

エヴァZのゼスティウムブラスター

3人の最大の必殺技がコアへと直撃する。
しかし…

『こんなちつぽけな光でワタシを殺せると思ったの？』

今の私はリリスを超えた存在、アダムのいない今この星の生命そのものなのよ。
もう飽きたわ、シンジくん。

全てをおわらせたら、蘇らせてあげるわね。

ワタシの理想の王子様として。』

そしてリリスインフイニティはコアの中心で赤黒い稲妻を集めて解き放つ。

裁きノイカヅチ。

触れた全てを灰にするその雷が街を焼き、山を焼き、海を焼く。

本来焼けるはずのないものですら、原子に戻りこの世から消失する。

そしてその雷は光の戦士たちにも降り注ぐ。

『ぐあ、力が保てない…』

倒れていくZとトリガー。

変身は解けてハルキとケンゴが地面に倒れる。

残るはシンジのみ。

進化したATフィールドが雷を防ぐが、反撃の糸口は見つからない。

「くそ！」

このままじゃ、エヴァが持たない！」

その時司令部のミサトから通信が入る。

「シンジくん！」

全兵装を解放するわ！

その中に貴方専用の武器がある！

ベリアロクと全てのデータを掻き合わせて作った最強の刀よ。

ゼステイウムエネルギーを込めても暴走しないわ！」

シンジの側にあったコンテナが開く。

黒と青を基調とした日本刀だった。

太刀というほど長くはなく、脇差のような短さもない。

逆手で持つとしっくりくる長さだった。

これなら、いつも通り戦える！

それに僕は……

「1人じゃない！」

そうだろ？アスカ！」

横に舞い降りるのは修復を終えたエヴァ2号機。

「はっ！」

少し見ない間に随分男前になったじゃない、シンジ！

当たり前でしょ、あんたの隣はあたしの場所なの！

ここで来れなきゃ女が廃るわ。

それに…あの黒いでつかいのに言いたいこともあるしね」

リリスインフィニティに向き直ったアスカが2号機越しに啖呵をきる。

「シャニっていったかしら？」

ふざけたこと抜かしてんじゃないわよ！

シンジは今でも十分理想の王子様だっちゅーの！

それにこいつはアンタのじゃない、あたしとレイのよ！

見せてやるわ、女としての格の違いつてのをね！」

あまりに見事な啖呵に司令部で拍手が起こる。

しかしシャニも黙ってはいない。

『小娘が…』

言わせておけばしゃあしゃあと！

安心なさい、全てが終わったらあなたも蘇らせてあげる。

手足を切り落として、一生オブジェとして飾ってあげるわ。

そして私とアダムが愛し合う様を拝ませてあげる。』

あれ、これって世界の存亡をかけた戦いだよね？

なんか女同士の戦いになつてるようないな…

「上等よ！」

希望と情熱、絆を紡げ！

混ざり合え鋼鉄の福音！」

立ち並ぶエヴァトリニティ。

2体の福音の名を持つ巨人がそれぞれの刀を手に邪神へとかまえる。

しばらく見合い、気を伺う。

そして風が吹いた直後、

走り出してコアまで跳躍する。

トリニティライズ！

トリニティブレイドから三色のエネルギーが迸る。

その全てを刀身に纏いぶつける。

シンジもゼスティムエネルギーを刀に纏わせ特大の刃を作り出しダメ押しのように

コアに叩き込む。

『うあああああ！』

や、め、ろおおおお！』

シヤニの悲鳴が辺りに響き渡る。

これなら勝てる！

シンジとアスカが勝利を確信し畳みかけるように刀身を押し込む。

コアにヒビが入り、あと一步踏み込もうとした時シヤニに捕まれ2人とも地面に叩きつけられた。

『流石に焦ったわ。』

でもその程度なのよ、どれだけ頑張ってもね。

さて、手も足も出ないふりはお気に召したかしら？

2人ともエヴァを墓標にして差し上げるわ。』

そこからは蹂躪だった。

まずその拳で2体のエヴァを叩きのめし、それをフィールドでかろうじて防ぐと黒いエネルギーの塊をぶつけられた。

すんでのところでも司令部からシンクロをカットされたアスカはダメージを負わずに済んだがもはや2号機は使い物にならない状態だった。

アスカを守るため、身を対して守るシンジ。

すでにフィールドは破られかけている。

もはや初号機は戦闘どころか立つことすらままならない。

そして、糸の切れた人形のようにその場に倒れ伏した。

プラグから這い出てきたシンジはインフィニティの姿ではなく、人の姿へと戻っていた。

ふらつきながらもアスカの元へと無意識に歩いている。

せめて最後はアスカだけでも守らないと：

その想いだけがシンジを突き動かしていた。

それを見たシャニは

『はあ

随分と妬かせてくれるじゃない。

さてシンジくん、お別れの時間ね。

世界を作り直したらまた会いましょう？』

シャニは黒い雷を光線にしてシンジめがけて打った。

さてあとは世界を作り直すだけね：

しかしシャニの思考は途中で止まる。

一瞬で触れた対象を原始へと戻せる光線は、しかし何かに塞がれるように止まった。

あり得ない、今この世界にワタシの力を防げるものなんてありはしないはず。しかしシヤニが見ている現実はまだ一つ。

黒い雷はシンジの前に展開されたフィールドによって防がれていた。

ジくん

シンジくん

この声は…

そしてシンジの意識は現実へと引き戻された。

今自分に迫っているのは全てを原始に還す雷。

しかしそれを防いでいるものがある。

それはカヲルから預けられたアダムのキーだった。

キーが空中に浮かび、そこから発せられるATフィールドが黒雷を防いでいた。

そして横に淡い、吹けば飛んでしまいそうなほど微かなエネルギーを纏ったカヲルの姿が現れる。

シンジくん、また会えたね。

でも再会を喜んでいる暇はなさそうだ。

今やつに立ち向かえるのは君を置いて他にはいない。

「カヲルくん！

そんなの無理だよ！

進化したエヴァですら歯が立たなかったんだ、今更どうしろって言うんだよ！

君はいいよ、もう死んじやってるんだから！

でももう一度戦って僕が負けたら！

みんな死んじやうんだよ…できないよ、そんな世界の命運を背負うなんて僕には…」

過去の弱かった頃のシンジが蘇る。

多くの戦いを経験した戦士とはいえまだ14歳の子ども。

精神的に脆いのも当然だ。

しかしそれを許さない存在がいた。

ダメよ碓くん。

あなたには守らないといけないものがあるのでしょうか？

ならば立ち上がらなくてはダメ。

もし無理だったとしても、誰もあなたを責めたりしない。

「あや…なみ？」

なんで、リリスに取り込まれたんじや…？」

そうね、リリスの肉体は彼女のものになってしまったわ。

でも、私が宿していたリリスの魂の一部は切り離されたの。

というよりこれはリリスの願い。

自分の肉体を止めてほしいと、あなたに未来を託したいと言っていたわ。

そして体の中で混ざり合っていたこれも持ってきたわ、リリスから上手に使いなさいって。

そして何もないはずの空間からシンジの手元に現れたロンギヌスの槍。

初号機と融合し、リリスに取り込まれたことで槍の所有権はリリスとシンジが持っていたのだ。

そしてカヲルが言葉が続ける。

生命の實の正統継承者・白き月のアダム。

知恵の實の正統継承者・黒き月のリリス

そして神殺しの槍。

たしかウルトラマンZに変身する時には3すくみの力が必要なんだよね？

ならこれでコンプリートだ。

2人の始祖の力、君に託すよ。

頑張ってね。

そういうと、カヲルとレイは人の大きさまで小さくなった槍をふるって光線を弾き飛ばす。

そして2人は手を繋いだ状態でキーに触れると吸い込まれて消えていった。

後に残ったのは黒地に金色の装飾がされた元アダムのキーだけであり、ゆつくりとシンジの手に舞い降りた。

しばらく俯いたシンジは不意に笑い出した。

「ほんと、カヲルくんはいつもそうだよね…

すぐ僕に託して消えていつちやうんだから

でも、確かに受け取ったよ。

行くよカヲルくん、綾波。」

そして不意に後ろを振り返る。

そこには意識を失って倒れるハルキとケンゴがいた。

慌てて駆け寄るとハルキが目覚めた。

「ごめんなさいシンジくん。

俺たちはしばらく戦えそうに…」

「大丈夫です、休んでてください。

あとは僕に任せてください。」

そう言つてシャニの方を見据えるシンジの姿に、ハルキは新たなウルトラマンの姿を見た気がした。

そしてハルキは拳を突き出した。

「わかりました。」

あとは託しましたよ、ウルトラマンZの相棒！」

「任されました、ウルトラマンZの相棒！」

2人は拳を重ねると気合が流れ込んだ気がした。

そしてシンジは問いかける。

「まだ行けますか、ゼットさん！」

『おうよ、シンジ！』

ウルトラ気合い入ってるぜ！』

その言葉に頷き、シンジは最後の力を振り絞って再びインフィニティの姿へと至る。

そして眼前に掲げるのはカラルとレイから託された最後のキー。

そして自身の力を込めながらキーを起動した。

ウルトラマンZ！ZETTAロンギヌス！

ブートアップ！ZETTA！

「光と闇！」

狭間を穿て、終幕の槍！」

そしてZが現実世界のシンジの後ろで立ち上がる。

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマン、Z！』

この戦いを見ているネルフの人々が、形を取り戻しネルフからの中継映像を見ていた避難所の人たちが、祈りを込めて声を上げる。

ウルトラマンZ！

そしてシンジ自身も全てを救うという自信の願いを込めて叫ぶ。

「ウルトラマン、ゼエエエエエエツト！」

クリスタルに吸い込まれるシンジを追うように宙をまうアダム、リリス、ロンギヌスがひとつになり、Zと重なっていく。

ウルトラマンZ！ZETAロンギヌス！

スパークレンスが高らかにその名を響かせる。

その姿は黒いレジェンド、白いノアとも呼べる伝説のウルトラマンたちの姿によく似ていた。

そしてその手にはロンギヌスの槍。

それを見たシャニは嫉妬に狂う。

『あ、あああああ！』

その姿！

なぜなの！

なぜ私を拒絶するの！

私はただ……うああああお！』

シヤニはデタラメに雷を打ち出すが、全てロンギヌスで撃ち落とされる。

『シンジ……シヤニはもう心が壊れてる。

どうしても救ってやれないぞ！』

「そんなことないですよゼットさん！

人はいつだって立ち上がれるんです！

僕があなたと一緒に立ち上がったように、何度だって変われるんです！

僕は、彼女を救いたい。」

シンジの想いに応えるようにロンギヌスが輝き出す。

『とにかく、ガワのあのリリースを剥がさないとそれどころじゃない。

やるぞシンジ！』

やることは決まった。

シヤニの頭上へ飛び上がると、下に向けてロンギヌスを構える。

エネルギーが迸る槍を一回転させるとその軌跡がZの文字を浮かび上がらせる。

その文字に向けて渾身の突きを繰り出す。

そこから莫大なエネルギーの本流が押し出された。

『ロンギヌス・Zスマツシャー!』

その光はシャニの全身を飲み込んだわけではない。

しかしその圧倒的なエネルギー量で羽を、輪を切り裂きリリースとしての権能を消失させていった。

だがシャニはまだ五体満足の体であることに変わりはない。

その両手を熱で失いかけながらも、とうとうZからロンギヌスを奪い取り、

握り潰してしまった。

元々崩れかけていた手でそんな無茶をしでかしたのだから当然シャニの左手は崩壊していった。

しかし、未だダメージを負ったとはいえ右手は健在。

瞳からは血の涙が垂直に垂れ落ち、両こめかみからは黒いツノすら伸びている。

まさに悪魔の形相、第二形態・ディアボロス。

そしてその口から滅びの赤い光線が放たれZを撃ち落とした。

『まだこんな力を残してたのか!』

くそっ！ウルトラピンチだぜ！』
焦るZ。

ハルキと倒したデストロドス以上の脅威。
しかし対象的にシンジは落ち着いていた。

「Zさん、武器がなくなっただけですよ。」

まだ終わりじゃない、僕もインフィニティとして目覚めてるんですから、まだ僕自身の力を使ってません！

こういう時こそ、ウルトラ気合い入れるんでしょ？」

相棒の言葉にハツとするZ。

『そう、だったな。』

相棒が諦めてないのにウルトラマンが諦めるわけにはいかないよな！

ウルトラ気合い入れて参りますよ！』

そして両手にゼステイウムエネルギーを纏い、さらにシンジのインフィニティとしての力も纏う。

いつもの青と白だけではない、赤と黒の光も混ぜて叫ぶ。

『インフィニティ・ゼステイウムブラスタ―！』

再びシャニから放たれる光線とぶつかり合う。

その余波は大地を揺るがしていた。

拮抗、しかし徐々に推される乙だが、

『シンジ、こういう時はあの掛け声でシンクロするぞ!』

「アレですね!

ハルキさん直伝の!」

チエストオ!!!

少しずつ光線を打ち返し、とうとうシャニのコアを貫いた。

『勝ったぞ、シンジ!』

乙が思わず勝利のカチドキをあげる。

目の前には羽も、天使の輪もなくなったシャニが元の姿で横たわっている。

しかしシンジの顔は依然厳しいままだった。

「いいえ、乙さん。

ここからが本番です。」

そしてゼットの姿のままシンジが右手を構えるとロンギヌスの槍が再構成される。

『シンジ、一体なにを…?』

っておい!

この頭の中のイメージは…!』

シンジと同化しているZがシンジの思い描く理想を感じとり、真の目的を察する。「ばれちゃいましたか。」

正直あんまり良い賭けじゃないですけど、付き合ってくださいですか？」
苦しそうに苦笑いをするシンジ、それを見てZは覚悟を決めた。

『言っただろ！』

使徒退治、最後まで付き合うぜ相棒！』

そしてZは両手をロンギヌスに翳す。

すると槍の両端が二股に割れる。

そしてその槍をシャニに緩やかに当てると、シャニからなんらかのエネルギーを吸い取ってしまった。

そして白銀の輝きを纏い、天使の輪と光の羽を広げるZ。

『シンジくん！』

なにが起きてるの、説明しなさい！

なんでZからインパクト発生時に観測されたのと同等のエネルギーが観測されているの？

あなたたちはなにをする気なの！』

ミサトの悲痛な叫びがこだまする。

NERVのメンバー一同わかっているのだ。

シンジが、自分を犠牲にして何かをしようとしていることを。

『…ミサトさん、今から僕がすることを許してくれなくていい。

僕はシャニからインフィニティとしての力を奪ったから、今僕にはアダム、リリス、インフィニティの全ての力が宿っている。

そしてZさんと槍の力で部分的にインパクトを起こす。

その影響でこの世の全てのインフィニティの力は僕に集まって、みんな元の姿に戻る。

そして集めた力で、この戦いで死んだみんなを可能な限り復活させる。

多分余波で地軸も戻ると思うよ。』

一見、いいことづくめの内容に聞こえる。

しかし

『シンジくん、あなたは…どうなるの?』

ミサトがついに核心に迫った。

シンジの答えは…

『…ごめんミサトさん。』

さよならみんな、父さん。

それから…大好きだったよ、アスカ。』
そしてインパクトが始まる。

まずシャニに手をかざし、一旦LCLに還元し、遺伝子自体を組み替え新たな命としてこの世界に送り出す。

外見に変わりはない、これで普通の人になれる。

同様にリリースに吸い込まれたレイも送り出す。

次に全世界のインフィニティの力を吸収する。

力を抜かれた側から、白い肌が鱗のように消えて、元の姿に戻っていくインフィニティたち。

天には円形の黒い穴、ガフの扉が開き出す。

その影響で地軸が戻っていく。

『いいのか、シンジ？』

このままでと…』

「いいんです。

これが僕にしかできない、僕のやるべきことですから。」

このインパクトの欠点、それは儀式の中心となる神の子がガフの扉を閉じなければ誰かが犠牲になるということ。

それはつまり最後の使徒と同等の存在になったシンジが消滅してこの世をエヴァの必要のない世界に変えるという最後の使徒退治だった。

インパクトで全ての目的を達したシンジが徐々に扉に近づくように天へと昇る。その時だった。

『バカシンジ！』

言い逃げなんて許さないわよ！

本当にあたしのことが好きなら、ちゃんとあたしの返事を聞けー！』

『シンジくん、そんな死に方は絶対許さない。

生きて、生きて幸せになりなさい！』

『シンジ、わしはお前を殴らなアカン。

ダチとして、そんな死に方許さへんで！』

急に脳裏にアスカ、ミサト、トウジの声が聞こえてきた。

続けてネルフの職員たち、戦いを見ていた一般市民の声が聞こえてきた。

全て、シンジの望んだ結末は許さない、生きて帰ってこいというものだった。

『…シンジ、一度は私もその覚悟に殉じるつもりだった。

だけどいいのか？

こんなにも多くの人が、君の帰りを待っている。

そして私も、君に生きていてほしいと願っている。』

Zの言葉で、堪えていたものが溢れ出すようにシンジは泣いた。

「Z、さん…」

僕は、いぎたい！

本当はまだ諦めたくない！」

その答えを聞いてZが笑った気がした。

『なら戦うしかないだろ！』

シンジ1人ならあれを壊すのは無理だ。

私1人でも無理だ。

だけど我々2人なら、できる！

いつだってそうやって乗り越えてきただろ！」

そして2人がガフの扉を見据え、打ち勝つ覚悟を決めて、世界中の人たちの願いとシンクロした時、Zがその姿を変えた。

ウルトラマンZ！Z E T A インフィニティ！

青白い光の化身、グリッター化したZが世界中の願いを込めて全力のゼステイウム光線を放つ。

圧倒的質量を誇るそれは扉を圧迫し、崩壊させた。

全てを見届けたZは力を使い果たしたのかゆっくりと落下し始め、気づけばシンジは元の姿に戻っていた。

迫る地面にぼんやりと

ああ、ボクの最期ってこんなにあつけないんだな
と考えていると声が聞こえた。

まだ君を死なせはしない。

天空を駆ける、高速の光！ウルトラマン、トリガーア！

青い姿のトリガーがシンジを優しく受け止める。

「ケンゴ、さん？」

どうして？」

君に頼りっぱなしだったんだ、これくらいはさせてよ！

さあ戻ろう、君の居場所へ！

そしてゆっくりと地上へ向かうトリガーの手の中で

やっべえ、アスカにあんなこと言って飛び出していったのにどうしよう

あつたら最初になんて言おうかな？

誰も傷つかない、新たな戦いに思いを馳せながらシンジはゆっくり目をとじた。

20話 エピローグ 果てなき未来へ

リリースインフィニティとの最終決戦から半年が過ぎた。

今日は6月24日、僕らは三年生になっていた。

僕、碇シンジはというと

病院のベットの上だった。

あの戦いの後の話をしよう。

インフィニティ化して戦った反動なのか、あれから僕は4ヶ月ほど眠ったまま目覚めなかつたらしい。

その間父さんが毎日来てたみたい。

父さんといえば、ゼーレの企みを世界に公表して自分も同罪だからって言ってたんだけど、最後の戦いが知らない間に世界中継されてたから、ほとんど責める声がなかったみたいで減給3ヶ月で終わったみたい。

そして、初号機から母さんがサルベージされた。

父さんはずっと泣いてたらしくて3日は仕事にならなかつたって冬月副司令がお見

舞いの時に教えてくれた。

アスカのお母さんは肉体が失われてたからサルベージできなかつたみたい。

3号機からはトウジの妹の桜ちゃんが無事にコアから助け出されたらしい。

全て人から聞いたことだから僕自身は見えていないけど。

それからシャニについてだけど、インフィニティとしての力は全て無くなつて、今は普通の人としてレイと暮らしている。

父さんから「家族になろう」と養子の話が出てたらしいけどなぜか断つたみたい。

人として生きるための名前なんだけど、なぜか「シンジくんに決めてほしいな」ってベツトで寝たきりの僕に迫ってきたりしたけど、今彼女は

シャニという名前からもじって

綾波 明（あやなみ あきら）

という名前をつけたら大喜びしてた。

そうそう、ミサトさんと加持さんが婚約したらしい。

戦いも終わってようやくって感じかな。

今はあの戦いの後始末でまだ結婚式のなつて今決まらないんだって。

アスカには殺されかけた。

そりやそうだろう。

死ぬ間際に愛の告白して、生きて帰ってきたら今度は四ヶ月も起きないってことがあれば普通に怒るだろう。

ほぼ任務のない時はつきつきりだったらしい。

ほんとに頭が上がらないや。

街の復旧も緩やかだけど進んでいる。

今動かせるエヴァは2号機だけだったんだけど…

噂をすれば

「シンジくん、ゆっくり寝れてますか？」

「楽しいこと考えないと参っちゃうよ？」

スマイルスマイル！」

実はまだハルキさんとケンゴさんがこちらの世界に残って復旧を手伝ってくれてい
る。

時に人の姿で、時にウルトラマンとなって。

今の世界、特に戦地となった日本のダメージはデカかった。

でも、捕まったゼーレの資産や各国からの援助でなんとかなっている。

どうもいろんな人の声が聞こえると思ってたけど、あの戦いは世界中に中継されてい
たらしい。

だからハルキさんたちが異世界人であることも当然バレている。

でも、敵対ムードはなく、みんな受け入れてくれていた。

さて、そろそろ僕の話をしようかな。

母さんがサルベージされたことでエヴァのコアとはシンクロできなくなった。

はずだったんだけど：

『あら、シンジはまだエヴァを動かせるわよ？』

最後にエヴァを進化させた時、私を経由せず直接動かしてたから、シンジとコアに何らかのつながりができたんじゃないかしら？』

なんて母さんが言うもんだからリツコさんたちが総動員でエヴァをチェックしたら、所々進化してたみたいでまだまだ研究対象らしい。

そして体が癒えた僕がいまだに入院している理由、それは

僕がインフィニティとなってしまったからという点だ。

強大な敵を倒した後、次に敵意や恐怖を向けられるのは大体倒した者だと父さんは言ってたけど、国連会議で僕が敵対するんじゃないかとビビられたらしい。

NERV側や日本は全否定したらしいけど、敵対の意思がないことを示すために、しばらくエヴァやウルトラマンにならないようにしないといけないみたい。

同時に身体の検査を行ったけど、やはり影響があったみたい。

と言っても遺伝子は変わりなく、かなり頑丈な体になったみたい。

ただ、他所の国から刺客が送られないように保護されてる感じ。

そしてもう一つの理由は

「シンジくん、今日も訓練の時間よ。

よろしくて？」

リツコさんに呼ばれてついていくと、なにもない頑丈な部屋に入る。

マイク越しでリツコさんからの指示が降りてくる

「さあ、今日もインフィニティとしての力を使う訓練をするわよ。」

そう、僕は体は人間のままであったけど魂にインフィニティとしての力が残っている。

死ぬまでこの力と付き合っていかななくてはならないから、今はなにができて、なにができないのかを探っているところだ。

そしてさらに半年の月日が流れた。

西暦2016年12月24日、あの戦いから一年が経ち世界的に今日は福音の日と呼ばれている。

あれからちゃんと地軸が戻ったみたいで日本はまた四季のある国に戻ったのか雪が積もっていた。

そして今日は僕たちNERVの人間とハルキさんとケンゴさんが新東京ドームによ
ばれていた。

しかも全員正装で。

呼ばれた理由は福音の日の立役者を一年という節目で労おうということらしい。

感謝状やら色々渡されてその後はホテルでパーティに参加させられた。

こうやってネルフがみんなに受け入れられたのならよかったと思う。

そして、別れの日がやってきた。

12月31日、ジオフロントに全てのネルフ職員が並ぶ。

人サイズで実体化したZさんと僕は最後に2人だけで話していた。

『シンジ、体にならな。』

何かあればいつでも呼ぶんだぞ！

私と君は世界を超えても、相棒だからな。』

固い握手を、交わして僕らは別れの挨拶をした。

でもなんとなく感じるんだ、またいつか、僕らは出会うことになる。

戦いの中とかじゃやないといいなーと思ってた時だ、父さんがやってきた。

「Z、少し話せるか？」

僕から離れたところで小声で話をしだす2人。

Zさんが驚いたように声を上げる。

『なんだって！』

それじゃあ、まだ…』

「今はこれでいい。」

時が来れば…」

そして2人はしばらく話した後納得したようでも離れていった。

見送りの時間になり2人はウルトラマンの姿に変わる。

空にはワープゲートが開いている。

これでほんとお別れなんだな…

だけど、ただでは帰さない。

世界中で一斉に声上がる。

『ご唱和ください、我らが英雄の名を！』

ウルトラマンZ！

ウルトラマントリガー！』

世界中から聞こえた声に2人ともびつくりしていたけど、嬉しそうに飛び立っていった。

もうこの世界にウルトラマンはいない。

どんな明日が待ってるかわからないし、そこにはまたとんでもない敵がいるかもしれない。

でも僕たちは乗り越えていける。

今はみんなが繋がっているのだから。

それでももし、どうしても乗り越えられない、世界をかけた何かが現れた時はもう一度叫ぼう彼の名を。

そう、ウルトラマンZ！

S I N 編

21話 幕間 シン

シン

心、しん。

あなたのこころ、わたしのこころ

神、しん

天の神、信仰の対象、この世の絶対的存在

真、しん。

まこと、全ての本質、ほんとうのこと

深、しん

物事の奥底、覗かれたくない所、除いてはいけない場所

新、しん。

新しいこと、これからの希望

信、しん。

しんじること、信じれるもの。

芯、しん。

揺るがないもの、揺るがない心、
進、しん。

すすむこと、決して振り返らないこと。

SIN、しん。

罪、誰の罪、私の罪

「そうだ、私の罪だ。」

どこからか聞こえるそのざらりとした悪意を纏った声。

だがどうにも聞き覚えるある声だが思い出せない。

「忘れたというのか、貴様の罪を。」

子を虐げ、愛してくれたものを虐げ、そして世界すら滅ぼしてまでも自らの望みに
絶った愚かな貴様の罪を。」

そうだ、それは全て私の罪だ。

だからこそ、償うべきなのだ。

「償う？」

その世界で妻も子もある貴様がか？

どう償う？」

それは…

失ったものはもう戻せない。

せめて、今ある幸せを、この世界を守り家族を守るのが私の償いだ。

「それは所詮、貴様のエゴではないのか？」

かつて、第一の使徒すら貶め、自らの子を贄としようとしたエゴイスト。

そしてそのために人の身を捨てた。

違うか？」

違う！

今の私は…！

「なにが違う？」

なぜ違う？」

どう違う？」

なぜ貴様だけが幸福を享受している。

…貴様と私は同じだというのに。」

そしてようやく声のする方向を振り向くと声の主を見つける。
髪は短い黒髪、体つきはがっしりしているし背も高いほうだろう。

よく見知った姿であるが相違点をあげるとするのなら普段眼鏡をかけていたが今は赤い機械的なバイザーをつけている。

それは聞き覚えがあつて当然だろう。

見知つていて当然だろう。

なぜならそこにいたのは、僅かな違いはあると言えど私

碓ゲンドウの姿なのだから。

「なぜ貴様が私の夢の中にいる？」

貴様は過去の亡霊のはずだ！」

冷や汗を流しながらもう一人の自分に問いかけるゲンドウ。

しかし目の前の自分は表情を変えない。

「なぜ？」

わかっているのだろうか？

私は貴様で、貴様は私。

あの時分たれた私は、貴様と違いまたあの世界にいる。

そう、貴様が願いを叶えたあの世界だ。

時が満ちれば会いに行こう、我が半身よ。

楽しみだな、貴様の幸せとやらがどれほど続くのか…」

そこで目が覚める。

呼吸が荒い、当然だあんなものを見せられては…

時間は午前3時、まさかこの歳で悪夢に起こされるとはな。

隣で寝ていた妻が起きる。

「あなた、大丈夫なの？」

随分うなされていたようだけど…」

「ユイ、あまり時間は残されていないのかもしれない。

奴が、私に会いに来るそうさ。

計画を急がねばならないかもしれない。」

「そう、なのね。

彼は来てくれるかしら？」

「ああ、奴を呼ぶためのサインは聞いている。

準備が仕上がった段階で連絡するさ。」

そしてユイはゲンドウの肩に頭を乗せる。

「また、あの子に頼ることになるのね。」

まだ話していないんでしょ？」

「ああ、しかし現状で立ち向かえるのはあの子だけだ。

また全てをお前に託そうとしている、愚かな父を許さなくてもいい。

すまないな、シンジ。」

22話 NEXT STAGE 2029

西暦2015年、謎の巨大生命体・使徒と人類との戦いは人類の勝利に終わり人々は歴史の1ページに使徒大戦という名で当時の戦いを記すこととなった。

本来はNERVが情報統制をしていたのだが、最終決戦で一度LCLに還元され元に戻った人類たちが詳細は知らぬままだが使徒の存在を認知し、ウルトラマンZⅡ碓シンジの戦いを目撃していたのだ。

戦いののち、日本政府・国連・NERVは世界中へ向けて使徒という巨大生物との戦いについて発表した。

そしてそれに伴い、エヴァを軍事利用させないためにNERVの地下深くに封印することとしたのだ。

とある条件で封印を解くという取り決めを交わして。

あわや解散を迫られるかと思われたNERVであったが、世界を救った立役者であると同時に今後の世界の抑止力として存続を許された。

全てが解決した2016年から13年の平和な月日が流れた。

時に西暦2029年、新たな神話が動き出そうとしていた。

「おはようございます。」

朝の挨拶は当然おはようございますだ。

声の主は職場に先についていた同僚たちに声をかける。

「おはようございます、碓先生。」

今日も早いですね。」

同僚からの声に笑顔で答える。

その男の名は碓シンジ。

かつてエヴァンゲリオン初号機のパイロットとして、また光の戦士・ウルトラマンZとして世界を救った男だった。

13年という月日は彼を少年から1人の大人の男として成長させていた。

28歳となった彼の職業はNERV直属の病院の外科医であった。

そして

「兄さん。」

明日手術の患者さんのカルテよ。」

「ありがとうレイ。」

いつもわるいね。」

シンジを兄さんと呼んだ女性、青銀色の髪を後ろでひとつ結びにした女性で名を碓レイ。
イ。

シンジの助手で看護師だった。

実は失った肉体を復元する過程でリリスとしての遺伝子を一割だけ残し、残りを人の遺伝子として再構成した。

その遺伝子というのがシンジの中にある碓ゲンドウの遺伝子だ。

元々ユイのクローンとしてリリスの遺伝子を含めて存在していたが再構成したことにより通常の人間に、さらには遺伝子的にはシンジの妹になってしまっていた。

レイはそれを受け入れ碓家へと迎え入れられていた。

そして2人は使徒大戦の時に病院でぶっちぎりでお世話になったワーストコンビでもある。

その2人が将来を目指す上でエヴァに乗れない以上、この選択肢を選ぶのは当然の帰結とも言えた。

そして勤務時間を終え帰路に着いたシンジ。

今の家はミサトと住んでいたあのコンフォートの一室ではない。

決して小さくはない一戸建てがシンジの城だった。

「ただいまー」

家に帰れば必ずする挨拶。

ここに父や母、妹はいない。

だが

「おかえりー」

早かったわね、ご飯できてるわよ」

迎え入れるのは鮮やかな赤毛を例と同じように背中で縛ったエプロン姿の女性だった。

「ただいまアスカ。

あれ？みーちゃんはまだ寝てる？」

「そう見たい、お昼にはしやぎ過ぎてたからねえ。

そろそろ起こそうかしら？」

旧姓・惣流。

今の名は碓アスカ、3年ほど前にシンジと結婚し一児の子宝に恵まれていた。

その強気な性格は変わらないが、かつての苛烈な強さから穏やかな芯のある強さへと

変わっていた。

「パパー、おかえりー」

寝ぼけた目を擦りながら父親譲りの黒髪に、母親譲りのサファイア色の瞳をした女の子が歩いてきた。

碓未来（いかりみらい）、それが彼女の名前だった。

子どもの名前を決める時、シンジとアスカは全く揉めなかった。

というより2人とも同じ名前を考えていたことに笑ってしまったほどだ。

それだけ勝ち取った宝、未来を守っていききたいという思いが強かったのだろう。

シンジは娘を抱き上げると食卓に着く。

かつて、世界を守っていた手は今家族を守る手へと変わっていた。

ところ変わってNERV本部の一室。

ここではある機械の調整が行われていた。

「あらリツコ、こんな遅くまで作業？」

そろそろ体に触るんじゃない？」

「それはあなたもでしょうミサト？」

そろそろリョウちゃんに帰って来いって連絡される頃でしょ？」

赤城リツコ開発課長。

ネルフのテクノロジーの全てを担当する女傑は目立つ金髪をやめ、黒髪に戻していた。

男どもからの人気は黒髪にした途端爆発したが特定の誰かと付き合っている節はない。

そしてその対面にいるのが加持ミサト副司令。

冬月コウゾウが引退した後昇格しNERVのナンバーツーとなってしまうていた。

「そうねえ、そろそろ息子たちも帰ってくるころね。」

今日の当直は……はあ、明かあ。」

あいつこの間も居眠りしてたから鍵差しとかないとね。

そう思いながらミサトは司令部へ歩いていく。

「あら、ミサト……じゃなかった加持副司令、どうしたの？」

そんなに怖い顔して。」

司令部の席で椅子に乗ってくるくると回りながらミサトを待ち受ける女性。

戸籍上の年齢は31になったはずだがいつまでも若々しいまま姿は変わらない。

「どうしたの？ じゃないわよ明！」

今日はちゃんと当直の日誌も書いて、責任持つてやんなさいよ！

あんた一応作戦部長補佐なんだからね！」

ミサトにどやされている人物、この人物がかつて世界を作り替えようとした進化した人類リリン・インフィニティの最上位種。

シヤニこと碓明（いかりあきら）だった。

レイと同じように再構成された明は碓家の長女となり、なんとNERVに就職していた。

危険視する声ももちろんあったがもともと頭も良く、立案する作戦も的確なため気が付けば作戦部長補佐となっていた。

しかしこの部署、作戦課長がそもそも存在しないため実質のトップである。

「そんなにカリカリしないでよー。

また小皺増えるぞ?!

この水と油コンビだが、天災などの救助ミッションを含む有事の際は非常に優秀であり抜群のコンビネーションを発揮する。

もうこの世界には敵はいない。

この13年間流れた穏やかな空気はそれを世界に感じさせるほど平和という言葉を感じさせていた。

「なにをしている。」

背中から聞こえる低い声に肩をびくつかせる2人。

「碓司令、私は部下の指導をしていただけです！」

ミサトはあさつての方向を見ながら答える。

階級は上がっても怖いものは怖いのだ。

ゲンドウは白髪が増えた程度で一切その見た目が変わらなかった。

「そうか、明。」

給料分はしっかりと働けよ。」

「はぁーい、パパ！」

それより、あの件。

そろそろシンジくんに話すんでしょ？

お店、用意してあげようか？」

あの件？

ミサトが一切わからない内容をこの親子は話している。

「…ああ。」

大丈夫だ、明後日シンジとうちで飲む。

その時に切り出すつもりだ。」

そう言つて帰路に着いたゲンドウ。

「おじいちゃんになつても、臆病なのは変わらないなあ。」

でもとうとう決めたんだね……」

そうして明は遠い目で宙を見ていた。

それから2日が過ぎた。

シンジは今日は自宅ではなくゲンドウたちの住む新しく建てられた実家へと向かっていった。

「ただいま、父さん、母さん。

それと姉さん久しぶり、元気だった？」

そう声をかけると明が抱きつく。

「シンジくーんーん！」

おかえり！

ねえ、アスカちゃんと未来ちゃんは？

お家なの？ざんねーん！

いいなあ、私も子供欲しいなあ……シンジくん、お姉ちゃんと……ぶほお！」

後ろから強烈な一撃を後頭部に喰らう明。

背後にはスリッパを振り抜いたユイがたっていた。

「明ちゃん？」

話が進まないから静かにしてなさい。」

母は強し。

その言葉を痛感し、ゲンドウ、明、シンジの3人は冷や汗を流す。

『い、イエス・ママ…』

その後は穏やかに家族同士の久々の夕食と酒を楽しんだ碇家。和やかだった雰囲気はゲンドウの言葉で突然終わる。

「シンジ、お前に話があるんだ。」

いつになく真剣な、優しいがどこか不安を秘めた声。

シンジは頷くとゲンドウに続いて外に出た。

「どうしたんだよ父さん、改めて話なんて?」

「ああ…どこから話したものかな?」

ゲンドウが何か言いづらそうにしている。

その時だった、けたたましいアラームが鳴り響く。

「なんだ…?」

そして次の瞬間ゲンドウから三メートルくらい離れた空間が突如開くと巨大な手が出てきた。

シンジは直感的に動きゲンドウを抱えて横っ飛びに飛ぶ。

その巨大な手は空を切った。

それを見てゲンドウはつぶやく。

「馬鹿な……！」

なにがなんでも早すぎるぞ！」

父はこの手の正体を知っている……だけどそんなこと後だ。

まずはこの手をなんとかしないと！

焦るシンジ、その時だった。

空から青い稲妻が光ったかと思うとその手に直撃した。

ダメージがよほどデカかったのかその手は空間に引込み、空間の穴もそのまま閉じた。

一体なにが……？

ふと稲妻の正体になり空を見上げるシンジ、そこには

『13年ぶりか……』

シンジ、デカくなったな！

碓司令、約束に応じて参上した。』

「そんなまさか……Z、さん？」

かつてシンジと共に世界を救った光の巨人ウルトラマンZがそこに浮いていた。

『その様子だとまだ話していないようだが……大丈夫なのか？』

しんばいするZを手で制するゲンドウ。

「問題ない。」

これは私のやるべきことだ。

シンジ、今日お前やZを呼んだのは他でもない。

お前に話さなければならぬことが、頼みたいことがある。」

ゲンドウが自身の黒いスパークレンスとキーを取り出し話し続ける。

「疑問に思わなかったか？」

急に私のお前に対する態度が変わったことや、私が死海文書や生命の書について知っていたこと、そして最後の戦いのあの日、エヴァに変身して戦ったことを。」

確かに疑問に思っていた。

しかしこれはパンドラの箱だ。

開けば、何か恐ろしいものが飛び出してくるようなそんな予感がしていた。

覚悟を決めたゲンドウから聞かされた内容は衝撃的なものだった。

「私は、お前の父であり、父ではない。」

私はこの礎ゲンドウとしての人生は2回目なのだ。」

23話 禁忌の箱

「父さん？」

なに言ってるんだよ…意味わかんないよ！

だって、え？

父さんは父さんだけど父さんじゃないって…」

父から発せられた意味不明な内容。

そして2回目の人生とは一体

「そこだけ聞けば意味がわからないのも当然だな。

私はな、この碇ゲンドウとしての人生を別の世界で送ったことがある。

その世界にも使徒がやってきて、お前たちにエヴァで戦わせた後、人類補完計画を行う世界だった。

違う点はいくつかあるが、先ず使徒の数がこの世界より少なかった。

そして最も大きな違いは、シンジ。

ウルトラマンZが存在しない世界だったということだ。」

Zさんがいない？

じゃあこの出会いは必然ではなくて本当に偶然ってこと？

「続けるぞ。」

その世界では3号機に載ったのはアスカくんだった。

結末は同じだが、その後ゼルエルとの戦いでレイが喰われた。

レイを救い出すために、シンジが初号機と覚醒しゼルエルを倒した。

しかしその力でインパクトのトリガーとなる。

その世界はそのインパクトで半壊状態だった。

そしてそこから14年が過ぎ、世界を元に戻そうと葛城くんたちが我々に反旗を翻し、NERVと戦うことになる。

その時私と冬月はNERVに残りゼーレに代わって人類補完計画を行っていた。

そして私は神が残した

ネブカドネザルの鍵

を使い、人という器を捨て神に近い存在になった。

この時ネルフ側が使ったのが13号機、あのエヴァだ。

最後の決戦でお前と初号機が葛城くんが命がけで作った新たな槍を使い、新時代を築いた。

そして私はユイと共に死後の世界へ旅立った、はずだった。

その後目覚めたらこの世界の礎、ゲンドウとして生きていた。もともとこの世界で生きていた私に私が溶け込んだ形になるのだろうか。

今のように記憶がはつきり思い出せたり、こうやって家族を愛しく思えるようになったのもラミエルを倒した後くらいか……

その影響で私の魂に刻まれた13号機の力を使えたのだ。

こうして聞くと、まったくお前の父ではないような感じがするかもしれないが、お前が生まれた日のことは今でもはつきり覚えている。

こんなに幸せでいいのかとユイに問いかけたこともな。

さて、話がズレたが本題に入ろう。

シンジが新時代を築くために起こしたインパクトでどうやら人である私と神であるうとする私の魂が二つに分かれたらしい。

私の魂は今ここにあるが、奴の魂はさつき説明した私が生きていた世界で時の狭間に封じられていたらしい。

しかしその封印が解け始めている。

奴は私の魂を求めてこの世界へこようとしている。

奴がこの世界で私を取り込み完全になれば、この世界でインパクトを起こそうとするだろう。

私はゆいと共に逝きたかった。

しかし奴の目的は歪んだ末にインパクトを起こすことにある。

なんとしても止めねばならんがこちらの世界からは奴に手出しができない。

そこでシンジ、お前に頼みたいことはその世界へ行き、もう一人の私を止めてほしいのだ。

本来なら私がいくべきなのだろう、しかし、次元の壁で私は弾かれてしまう。

後をたくせるのはお前だけだ。

頼む、奴を倒すことで救ってやってはくれまいか。」

父から伝えられる真実。

あまりの情報量に酔った頭では耐えられない。

「……ごめん父さん。」

今日は帰るよ。」

なんとかその言葉だが伝えると逃げるように家に帰った。

「パパ、頑張ったね。」

お久しぶりZ、ごめんけどうちの弟を頼むね。」

『シャニ、いや、今は明だったな。』

しかし、シンジが応じてくれるかどうか……』

「大丈夫よ。」

シンジくんにはどんな時でも背中を押してくれる人がいるもの。

そうよね、アスカちゃん。」

帰宅するシンジ、帰って早々水を煽る。

「…ふう。」

だめだ、まだ頭がまとまらない。」

そんな時だった、寝ていたアスカが起きてきた。

「おかえりシンジ…未来はもう寝たわよ。」

「寝かしつけありがとう。」

アスカはシンジの顔を見ると眉を顰め、隣に座った。

「その様子だと義父さんから全部聞いたみたいね。」

もう1人の碇ゲンドウとその世界について。」

アスカの言葉に思わず振り向くシンジ。

「あんたのいない時にね、こっそり未来の顔を見にきたことがあったの。」

その時に全部私に話してくれたわ。」

もし何かあった時に一番にそいつに狙われる可能性があるからってね。」

なんで言わなかったか？って顔してるわね。

あんたも知ってるでしょ、お義父さんが臆病な人なのわ。

その人が私に頭を下げていうのよ、シンジには私から話す、それが父として、男としての最低限の礼儀だってね。

そこまで言われちゃ、隠すしかないでしょ。」

知らなかった…父さんがそんなことを。

「しばらく向こうの世界に行くんでしょ？」

なら、準備ができるまで後2日はかかるらしいから明後日は家族で過ごさない！

それで今夜は、アタシを一杯甘やかさない！」

ほんと、かなわないよなあ。

そう思い笑みを一つこぼすと、アスカを抱き上げベットへ向かった。

そして翌日、職場はNERV直属のためその司令から呼び出しということで業務変更をしてNERVに向かった。

司令室は通されるとゲンドウがいつものポーズで座っていた。

「よく来たな、シンジ。」

昨日は突然すまなかったな。」

「父さん、答えを伝えにきた。」

正直話が大き過ぎて、僕も家族を持つ身だから、気軽には戦えない。」
「そうか……」

「でも、父さんの心を救うために戦えっていうのなら、その先に世界を救えっていうのならもう一度戦うよ。」

父さんの息子として、家族を守る父親として！」

目を見開くゲンドウ。

「そうか、大人になったなシンジ。」

「わかった。」

本作戦については任務扱いにする。

NERV本部所属作戦部碓シンジ1佐、出立は2日後ヒトフタマルマル。

本部で封印していたスパークレンスを受領し、出立準備を行え。

なお、本作戦について注意事項はただ一つ。

…無事に帰ってこい！」

作戦部部長碓シンジ1佐。

それが本来のシンジのネルフでの役職だ。

普段は補佐の明に全てを任せ、有事の際のみ出動する。

そして自身のロッカーへ向かいミサトと対の青色フライトジャケットを纏う。

病院の方も医者が多くNERVとしての仕事があるのも実は了解していたりする。

そして各方面と打ち合わせを終え、いよいよ当日を迎えた。

シンジが呼ばれたのは元初号機の格納庫だった。

仕事着の蒼いフライトジャケットを纏い、その腰にはスパークレンスとキーを携える。

現地にはゲンドウ、リツコがいた。

その2人の間にはエントリープラグとそれに繋がれた多数の機械が見えた。

「移動方法については、このプラグ内であなたの肉体を量子化してかのプラグと指令のキーを縁にして向こうの世界のあなたとシンクロしてあなたを顕現させます。

よろしくて?」

ひとつ頷くシンジ。

「それではシンジ、そしてゼット。

後は任せるぞ。

それと私の伝えた状況だが、もうすでにこの状況がイレギュラーといえる。

必ずしも同じことが起きるといわけではないから、半分しかあてにするなよ?」

「分かりました。」

乙さん、またよろしく。」

『おうよ！』

今度こそ世界を救うわけだな。

いくぞ相棒！』

そして全システムが起動し眩い光を放った後、その光は天へと登った。

その光を見送ったゲンドウは

「必ず無事に帰ってこいよ。」

さらに祈りを捧げていた。

24話 はじめまして

「んっ…」

目覚めたシンジがいたのは金属製の筒の中だった。

しかしこのシートの感触、随分と懐かしいような…

ん？シート？

そこでシンジは自分がなにをしたいのか寝起きの訛りのような頭で考える。

そうだ、確か父さんに頼まれごとをして

乙さんと久しぶりに会って

そうだ、新型プラグに座らされてエントリースタートしたら眠くなつたんだ。

その用途は

「別の世界への移動…ってことは！」

『無事成功したみたいだぞ？』

おはようシンジ！』

1人だけの閉鎖空間に声が響く。

それもそうだろう、彼は今シンジと一心同体に再びなつたのだから。

彼こそがかつて世界を救った光の戦士であり、シンジの相棒ウルトラマンZである。しかしシンジは違和感を感じていた。

父の話だと、今はこっちの世界のエヴァの中のはずだ。

エヴァの中なのに何かが：

そう考えていると激しい揺れを感じた。

『なんだこの揺れは☒』

外で戦闘でも起きてるのか☒』

場面は切り替わり外の空間、いわゆる宇宙区間での出来事。

とある作戦が進行中だった。

『コントロールセンターからツードッシュ。』

目標を視認できる距離のはずだ。

今後7分はこちらの誘導を受け付けない、それまでにケリをつけて！

good luck。』

そして作戦遂行のために大型ブースターを取り付けられた、機体がゆっくりと宇宙に

浮かぶ十字架を目掛けて進む。

搭乗員は内心、このままなにもないといいけど、なんて思っていた。

しかしその淡い期待は裏切られる。

『目標宙域に反応あり！』

妨害が入った！

パターン青、コード4bです！』

その連絡が入ると同時に宇宙空間を円形に四つの爪を持つ敵が進んでくる。

くつ、やつぱりきたか！

そして熱源を感じ、やばい被弾する。

機体を挟むように設置された大型の盾で受け止めるが、所々に穴が開く。

ああ、もう！

「邪魔ー！」

ヘルメットを脱ぎ捨て、長い髪を解放する。

そして左目を眼帯で覆った少女は被弾した盾を放棄してその機体の姿を

エヴァンゲリオン2号機の姿をあらわにした。

そのパイロットこそ

『アスカ！』

目標物は☒』

無線で呼ばれた自身の名前に反応する。

「若干動き出してゐる！」

アタシはそのまま強行する！

コネメガネ、援護！」

『仰せのままにく、お姫さまっ！』

空間を泳いでできた数体の4bと呼ばれた物体が銃弾を受け爆散していく。

アタシは自分の任務を優先する。

2号機を移動する巨大な十字架に取りつかせると、大気圏突入直前だった。

勢いを殺さないとい！

残りのブースターを燃焼させ勢いを殺すと用無しのデカブツを外しリリースする。

あーあ、不法投棄いけないんだあ。

宇宙空間に巨大な鉄の塊を投げ捨てることに多少の罪悪感を覚えなないこともないが、大気圏で燃え尽きることを信じるしかない。

「対象確保、状況終了。

帰投するわ。」

『了解、合流場所はサターンファイブ。』

昔はこんな時にお疲れ様とか一声あったのに。

事務的な口調の通信相手の過去を振り返りながら地上への降下まで一息つくことにしたアスカ。

だが、少女をすんなり返すほど敵はお人好しではないようだ。

コンソールに表示すると同時にアラートが鳴り響く。

「パターン青」

一体どこに

飛び回っていたのは全部同僚が打ち落としたはずだ。

あいつのことだ、そんなヘマはしない。

しかし正体は灯台下暗しだった。

アスカが飛び乗っていた十字架、その一角が開き何十本もの鏡の触手が伸びていく。

その触手上を先ほどの4bと同種のもので滑っていく。

手持ちのハンドガンで狙うが動きが速過ぎて当たらない。

「洒落臭い！」

こちらら再突入直前だつちゅーの。

コネメガネ、援護！」

「めんす。」

高度不足で無理！

おっさきー」

しかし同僚の方はいつの間にもやら降下地点の方まで降り始めていた。

タイムिंगの悪い。

そう思っていたアスカの目に4bが輝き出すのが見えた。

そして咄嗟にATフィールドを展開するがそれを透過して光が2号機を焼く。

「ちよっ、この光！

フィールドを突き抜けてくるじゃない！」

光に焼かれる感覚に耐えていると、鏡上の触手が2号機を囲むよう展開される。

うっそ、やっば！

案の定にも見えなくなるほどの光がアスカの視界を覆い、そして体を焼いていった。

どうすんのよこんなの☒

次の瞬間アスカは無意識に叫んでいた。

「なんとかしなさいよ！

バカシンジイイイ！」

なんかすごく揺れるな…

状況が全く認識できないシンジ。

プラグの電源や外のモニターを表示しようにもつかないのだ。

参ったなあ。

その時Zが眩く。

「シンジ、何か近くにいますぞ。

一つは懐かしい気配だ。

もう一つは、なんとというか…気持ち悪い！

よくわからんが今エヴァは何かの箱みたいなのに入っていてうまく感じ取れない。

アルミホイルで携帯包む感じだな。」

よく知ってるなこの宇宙人。

そんなことを思っているとどこからか声が聞こえた気がした。

なんとかしなさいよ！

バカシンジ!

パラレルワールドだろうと聞き間違えることのない子の声は

「Zさん、アスカが呼んでる!」

『おおう、さすが夫婦!』

でもこの感じで呼んでるってことは、ピンチだな。』

ようやく現状が認識できた2人。

やることは決まってる。

「13年ぶりですね。」

『ああ、ウルトラ気合い入れていくぜ!』

そしてシンジはキーを起動する。

ウルトラマンZ! イプシロンエヴァ!

ブートアップ! イプシロン!

「絶望を打ち払え!

紫電の福音!」

『ご唱和ください我の名を!』

ウルトラマンZ!』

「ウルトラマンZ!」

突如アスカを取り囲んでいた触手が半分以上切断された。

そしてアスカは自分を助けた存在を目の当たりにする。

そこには黒い剣を構えたエヴァと同じ大きさの巨人が2号機を庇うように立っていた。

「なにこいつ…」

パターンオレンジ、でもなんで初号機、0号機、2号機のシグナルがこいつから出てるの？

混乱するアスカをよそに、巨人は次々と触手を両断し、遂に本体だけが宇宙空間に取り残されていた。

そして巨人は人差し指にもすごいエネルギーをチャージすると、一瞬でその本体を撃ち抜いて破壊してしまった。

すごい…

その手慣れた戦闘スタイルは人を認めないアスカから見てもその一言しか出ないほど手際が良かった。

すると巨人がこちらを見てくる。

なによ…

『私の名はウルトラマンZ。』

申し訳ないが、君たちの責任者のところまで一緒に行ってもいい？』
まじか、こいつ喋るぞ。

母艦にことの経緯を話すとすんなり話し合いは了解されてしまった。

そして私たちの母艦、ヴンダーに帰投すると先に戻っていた同僚、エヴァ8号機が銃を構えて待っていた。

艦橋にはミサト、いえ葛城ミサト大佐が待っていた。

『あなたがウルトラマンZ？でよかったかしら？』

私がここの責任者葛城大佐です。

なにが目的なのかしら？

一応正体がわかるまでは銃を向けるけど、警戒のためと理解していただきたい！』

ミサトの声がスピーカーで響く。

そしたら巨人は一瞬頭を掻くような仕草をした後、光の柱になる。

そして艦橋に現れた人物に誰もが目を疑った。

「こつちでは始めましてかな、ミサトさん？」

自己紹介、一応しとく？」

ミサトが明らかにフリーズする、だってそこにいたのは

「シンジ、君なの？」

なんで…あなたはまだエヴァの中で眠っているはずじゃあ…」

背丈も伸びて顔つきも変わっているけどそこにいたのは碇シンジ、この世界を滅ぼした大罪人のその姿があつた。

25話 因果と呪縛

ヴィレクルーは動揺していた。

今回の任務目的は母艦ヴンダーの主機となり得るエヴァンゲリオン初号機の回収、および同パイロットであり14年前ニアサードインパクトのトリガーとなった大罪人・碇シンジの身柄を拘束しエヴァから離れさせることで新たなるインパクトを阻止することだった。

その碇シンジは初号機の覚醒の代償としてその身の形を保てずLCLに溶かしてしまい時を止めている、さながら眠り姫の状態であると聞かされていた。

それがどうしてこうなった。

葛城ミサト大佐と、副官たる赤木リツコは動揺を見せまいとことの始まりから整理することに決めた。

まず本任務でエヴァ2号機改と8号機を宇宙空間にあげ2号機改が初号機を確保した。

ここまではいい。

そしてその初号機が収められていた棺に人造使徒ネーメジスシリーズが潜んでいて、

2号機改に反応して展開した。

これも良くはないが、まだ理解はできる。

アスカが敵にやられそうになった瞬間、光の柱が立ち昇ってウルトラマンZと名乗る巨人が殲滅する。

はい、ここ。

まず問題はここ。

何者この巨人？つていうかアスカの報告だと日本語で喋ってきたらしいんだけど。

冷や汗が止まらないがいつまでもフリーズしているわけには行かず、意地でも思考を先に進める2人。

それで？

意思疎通したいつていうから了承して警戒体制で迎えたら？

なに？

なんでそこに大つきくなったシンちゃんがいるの？

きやー、もうイケメンになって。

つていうか着ているジャケツトつて昔あたしが着てたやつの色違いじゃない。

現実逃避に走る艦長。

しかし副長が冷静にある問題点を指摘する。

「…ミサト、全クルーで囲んでいる状況でシンジくんが出てきちゃうのって不味くないかしら？」

ミサトがフリーズから溶けるまで3秒。

シンジくん↓インパクトのトリガー↓家族の仇

クルーでめっちゃ恨んでるって言ってたやつがそういえば…

「つ、この疫病神メエ！」

甲板上にいたクルーの1人、ピンク色の髪を持つキタヤマミドリが警戒用に携帯していた拳銃を構える。

ヤバイ、北山止めろ！

クルーの誰かが叫ぶ。

ミサトの意識はスローに流れていた。

いけない、シンジくんが！

そしてやつとのことで安全装置を外した北山の銃口はためらいという言葉を持ち得なかった。

パパァン！

マズルフラッシュが光り、撃針が叩いた勢いで火薬が爆発し弾丸が飛び出る。

ミサトは目を瞑る。

次に起こる光景を脳裏に描く。

しかし、同時に違和感を感じていた。

銃撃の音、聞こえたのって2つ？

恐る恐る目を開くと全員が固まっていた。

なぜなら2メートルは離れていたシンジが無傷で北山が持っていた銃をその手で遊ばせていたからだ。

「…君、拳銃の訓練あんまりしてないでしょ？」

狙い定めるのに時間かけすぎだし、殺気こめすぎだし、安全装置外すの手間取ってるのがバレバレだよ？

それに、本当に殺したいなら打つ前に叫んだらだめじゃん。」

そう言いながらマガジンを抜き取り、安全装置を掛け直した拳銃を北山に放り投げるシンジ。

「ごめんけど、殺されるわけにはいかないんだ。

あと、君が撃った弾だけで跳弾でお仲間に当たりそうだったから撃ち落とすよ。」

周りがどよめき甲板上に落ちている弾丸に視線を注ぐ。

意を決して1人が近づいて拾い上げると

「…弾が二つくつついてる。」

周りにも事実がようやく飲み込めた瞬間だった。

「ミサトさん、僕にみなさんと争う意志はありません。」

今は話を聞いて欲しいだけです。

だけど、敵意を向けられる分には構いませんが実害が加えられるならこちらも反撃は
します。

それは、エヴァが相手でも同様です。」

数の面で言えばシンジは多勢に無勢、いくら優れた腕でも一斉に襲い掛かられば抵
抗は無意味だろう。

しかし、言い放ったシンジはひどく落ち着いており、やれるものならやつてみると言
わんばかりだ。

エヴァで物理的な制圧を考えようものなら先ほどのウルトラマンと名乗る巨人が戦
うと暗に匂わせている。

旧ネルフメンバーの誰1人として、目の前のシンジが自分たちの知る人物なのか断言
できなかつた。

それほど、目の前の碓シンジはあの精神的にも肉体的にも弱いエヴァパイロットとは

かけ離れていたのだ。

現状のヴェイレに彼とことを構える余裕はないわね。

ミサトとリツコの考えは同じだった。

「わかりました。」

碓シンジ君：…でいいのよね？」

「そうですね、皆さんが知ってるより老けましたけどね。」

冗談を言っただけに、かんで見せたことからようやく当時の碓シンジの面影を見出した旧ネルフメンバー。

「艦長より通達！」

現時刻をもって警戒体制を2種へ移行。

艦長、副長、エヴァパイロット両名でミーティングルームで彼との話し合いを行います。

以降、目の前の対象に危害を加えることを許可しない！

医務官は北山を医務室で休ませて。

…ごめんなさい、言いたいこと、思うことはたくさんあると思うわ。

でもこれが艦を守る判断であるということ、みんなどうか抑えてちょうだい。」

艦長がそこまで言うのなら

クルー全員が納得したわけではないが全員引き下がった。

「シンジくん、話し合いの前にエヴァの回収などでどの待ち時間がかかるからその間にメデイカルチェックを受けてちょうだい。」

ほら、あなた大人の姿で出てきたからDNAとかの確証が欲しいの。」

リツコが言うことはもつともだ。

言葉だけで信じられるほど穏やかな時代ではない。

その言葉に領きリツコについていく。

3時間ほどの検査が終わり、全員が一旦体制を整えてミーティングルームに集まる。

まずリツコが口を開く。

「まず検査結果から報告します。」

歯の治療痕は若干違うものの、DNA情報がほぼ一致しています。

網膜スキャンについては完全一致していますので彼は碓シンジくんの間違いないわ。」

リツコの報告にうなずき、シンジを見据えるミサト。

「本来なら募る話もあるとは思っただけれども、今はそんな悠長なことをしている場合ではないのはわかるわね？」

さあ、話してもらいましょうか？

あなたが何者なのか、なぜ大人の姿なのか。

そしてあのウルトラマンと名乗る巨人の正体と、あなた達の目的について。」

ミサトさん、本気だな。

集まっている人物達の前で隠し事はできないと判断してシンジは全て話すことにした。

「わかりました。

先ず、質問は全て話し終えてからにしてもらいたいです。

かなり長い話になりますからね。

第一に僕は、皆さんの知る碓シンジではありません。

並行世界の、保管計画を砕いた2029年から来ました。

ネルフ総司令碓ゲンドウからの命令でね。」

それを聞いた途端、動揺が全員から見えた。

いきなり別世界から来ました、なんで誰も信じるわけがない。

そして全員が銃を構え、ミサトが切り出す。

「あなた、自分が何を言っているのかわかっているの☒

そして我々が誰と戦っているのか、わかってその名前を出したのかしら？」

全員が殺気立つ中でシンジだけが冷静だった。

「はい、概ね聞いています。

そして今回の僕の任務はこの世界の碇ゲンドウの撃破、および現状の打開です。

それに、あなたたちを倒すのが目的なら甲板でウルトラマンの力で全て消しています。

話を、続けてもいいですか？」

拳銃を下ろさないが殺気は収まったので話を続ける。

「申し遅れました。

NERV本部作戦部部长兼NERV病院外科病棟の医者をしています、碇シンジ一佐です。

普段は医者で、有事の際だけNERVとして動いています。

まず僕達の世界の話から始めましょう。

僕たちの世界では全部で17体の使徒と戦いました。

その途中で現れたのがウルトラマンZ、僕の相棒です。」

そしてシンジのスパークレンスが光り、人サイズのZが現れる。

『ナイストゥーミーチュー。』

私はウルトラマンZ、このシンジたちがいる世界ともまた別の次元のM78星雲の光の星出身の、いわゆる宇宙人だ。

シンジと共に融合して戦い、13年前に使徒と覚醒したりリスを倒した。」

「おいおい、まさかの宇宙人かよ。」

脳内でツツコミが止まらないヴェイレ。

しかしそうでなければ辻褄が合わないところもあるから一旦黙って聞く。

「Zさんはとある怪獣を追って僕の世界に来ました。」

その戦いで僕は命を落として、Zさんと一つになることで蘇りました。」

頭痛い。

科学者であるリツコは本能的に話に拒否反応を示していたが、聞かねば進むまい。

「その後、全ての使徒を倒した後にゼーレとの戦闘になりました。」

みなさんは僕たち人間がリリスから生まれたリリンと呼ばれる使徒なのをご存知で

すよね?」

全員が頷く。

このメンバーは既に大半の秘密を知っていた。

「その感じだと死海文書の存在も知っていますね?」

僕たちの世界にはZさんの介入ともう一つのイレギュラーの影響で、一部のリリンが

使徒として覚醒しました。

その名をリリン・インフィニティ。

彼らは綾波レイがリリスの魂を内包していたため、その姿を形取っていました。

その中でも上位種である十星と名乗る存在が量産型エヴァに乗って僕らを襲いました。

最終的に補完計画は発動されてしまいサードインパクトが起きます。

その中で僕は儀式の中心になり、唯一自我を保ってインフィニティとして覚醒しました。

そしてみんなが一つになる世界を拒み、覚醒したりリスを倒して全てのインフィニティの力を消し去りました。

僕の魂に刻まれたものを除いてね。

この時に世界中の人が、戦いを知ってしまったので使徒大戦という名で歴史に刻まれる出来事になりました。」

そこまで聞いてピンク色のプラグスーツを着た眼鏡の女が手を挙げる。

「はいはい、しつもん！」

君の言うもう一つのイレギュラーってなんのことだにや?」

「その前に、君は?」

「ありや?」

君の世界では私と会ってないのかにや?

まあいいや、私はマリ。

真希波・マリ・イラストリアス。

エヴァ8号機のパイロットだよん。

よろしくね、大人のわんこくん？

いや、大人だからわんこさん？」

シンジはなんとなくこの世界の差異を感じ始めていた。

「わかりました、もう一つのイレギュラーはそれがこの世界に僕がきた理由でもありません。」

それは碓ゲンドウ、僕の父です。

彼の魂はこのヴェイレがNERVと戦い、人類補完計画を止めた時代を生きて、その後に僕の世界で僕の父の魂と同化したと言っていました。」

途端にざわつく。

ミサトが食いつく。

「…ということとは、この先何が起きるのか大体わかっているの？」

「概ねはですね。」

そしてその時父は確かネブカドネザルの鍵？とかって言うのを使って人知を超えた存在になっていたそうで、当時の僕がこのウンダーから作り出した槍でエヴァのない世

界に書き換えて全てを終わらせた時に初号機の中の母とあの世へ旅だったんだそうです。

その時、人としての父と、神であろうとする父が別れて、神であろうとする父は今あるこの世界の碇ゲンドウの肉体を乗っ取ったらしいです。

彼の目的は半身と分たれた影響なのかかなり逸脱していて、全ての世界を繋ぎインパクトを起こすことで全てを無に返すことだそうです。

だから、この戦いは僕の世界を、家族も守る戦いでもあるんです。

どうか一緒に戦わせてください。」

ミサトが口を開く。

「にわかには信じ難いわね。」

それこそ、オカルトやホラーの世界の出来事とも言えるけど、それを言い出すとエヴァや使徒の存在もそうよね。

では、私からの質問。

この先NERVは何をするの?」

「えつとですね、

まず前の歴史だとエヴァが数日以内に僕を拉致しにくる。

次にしばらくして13号機と言う最後のエヴァを僕とネルフのパイロットで起動し

て槍を抜きインパクトを起こさせる。

この時はヴィラに止められたと言っていましたかね。」

次にリツコが口を開く。

「あなたのメデイカルチェックの結果が微妙に変だった理由はわかったわ。

どうやってこの世界に来たのかしら？」

それからウルトラマンにはどうやって変身を？」

「この世界へ来たのは父の魂に刻まれた13号機の因子を縁にして初号機のプラグから転移、LCIでこちらの世界の自分との縁を繋いで肉体等を再構成したと聞いてます。

なのでこちらの世界の僕の体がまだLCI内に保存されていると思います。

それとリツコさんにはこれを渡すように向こうの世界のあなたから預かっています。

中身は僕の変身メカニズムのデータとそれを応用したエヴァの強化プランが入っています。

安心してください、向こうの世界の使徒大戦でも使われた技術です。」

そういつてエントリープラグないから回収したアタッシュケースを渡す。

「なるほどね、ありがたくいただくわ。」

そしてシンジが切り出す。

「僕からも質問いいですか？」

真希波については僕としては初対面なのでわかりませんが、この世界のアスカはなん
で当時のままの姿なんですか？」

それを聞いた瞬間、アスカがミーティングルームを飛び出していく。
目を伏せながらミサトが話す。

「シンジくん、この世界ではエヴァパイロットはシンクロの影響で肉体もエヴァに近い
存在になってしまっているの。」

これをエヴァの呪縛、と呼んでいるわ。

だからね、アスカはあなたに言いたいことや話したいことがいっぱいあったはずなの
に、1人大人のあなたの姿を見て何も言えなくなってしまうみたい。」

そんな、僕はなんてことを。

ミーティングルームから駆け出そうとするシンジ。

しかしその時、

『パターン青を確認！』

ネーメジスシリーズが接近中！

各自持ち場につけ！』

こんな時に！

焦るシンジにミサトが肩を叩く。

「シンジくん、今回は司令室で私たちやアスカの戦いを見てほしい。」

それを見てアスカと話をしてあげてちょうだい。」

「…わかりました。」

何かあれば僕もウルトラマンの力で戦いますから。」

そしてミサトについて司令室へ歩き出した。

26話 ただ一人の使徒

ブリッジに向かったシンジが見たのはヴァンダーを包囲するように展開されてたエネルギーの網がドーム状に展開している光景だった。

交差する部分に目のような模様が見える。

パターン青の反応を示しているということはやはり使徒なのか？

「ミサトさん、あれは使徒なんですか？」

「シンジくん、あれはネーメジスシリーズ。」

この世界の碇ゲンドウが作り上げた人造の使徒よ。

宇宙で戦ったネーメジスに何か見覚えはなかった？

やつらにはエヴァのパーツが使われているの。

福音が聞いて呆れるわ。」

確かにどこか機械的なあの姿、ネルフのエヴァのパーツを思わせるものだった。

そうこうしているうちに、アスカが主機を点火、発進したヴァンダーが人造使徒を引き摺り出し破壊することでことなきを得た。

そして、機体を回収して4時間が過ぎた。

今、シンジ用の部屋でこの世界のアスカと2人で向かい合っていた。

「…アスカ。」

「なによ、大人になった碇シンジ。」

どこかアスカはツンケンしていた。

「君にも言いたいことがたくさんあるんだと思う。」

僕はこの世界のシンジじゃないから、君とどんなふうに関わり合ってきたかはわからない。

それでもたった一つだけ、僕の命をかけてでも君に言えることがある。」

「な、何よ…」

シンジの気迫に思わずたじろぐアスカ。

それほど大人になったシンジは真剣な顔をしていた。

そしてその真剣な顔を笑顔に変えて

「この世界でも君に出会えてよかった。」

そして、宇宙で守れたことも。

世界が変わっても、僕にとってアスカは世界で一番大事な人だから。」

いいなあ、大事にされてるんだあつちのあたしは。

思わず涙ぐみながら視線を逸らすアスカ。

「ふ、ふん！」

随分とまあ惚気てくれちゃって。

いいわ、教えなさいよ。

アンタと、あつちの世界のあたしが今どうしているのか。」

その言葉にシンジは顔を曇らせ、その変化にアスカは怪訝な顔をする。

「その話は、多分を君を傷つけると思う。」

その代わりに向こうでの闘い方を教えるよ。

システムのデータはリツコさんに渡してあるから、いずれ君のエヴァにも搭載されるはずだから。」

その言葉に真剣な顔を向けるアスカ。

そしてシンジはオリジナルのキーを取り出す。

「このキーを使って僕はウルトラマンに変身してる。」

そして、そのデータの応用でエヴァの装甲をATフィールドを変形させて戦闘特化の姿に変えることができる。

向こうの世界の君は、二刀流で刀を使えるように鎧武者のような装備を好んでいたよ。」

「興味深いわね、例えばそれはその二刀流以外の力は使えないの?」

「そんなことはないと思う。」

今のアスカと2号機にベストな戦い方ができるように調整してもらえれば、例えば弓を使う力になるかもしれない。」

そうまで言ったところでアラートがなる。

「なによ、また奴らなの☒」

シンジ、アンタはブリッジに向かいなさい！」

そう言って駆け出そうとしたアスカだが、直後に廊下の壁が崩壊する。

そこには山吹色のエヴァがいた。

「これって、零号、機？」

「逃げなさい！」

それはマークナイン！

NERVの新型エヴァよ！

もうあのエコヒイキはいないのよ、だから！」

アスカの忠告が全て耳に入る前にマークナインと呼ばれたエヴァの両手に抱えらるシンジ。

頭の中に声が流れてくる。

碓くん、見つけた。

あなたを連れて行く、それが命令

聞こえた声は確かにレイの声だった。

しかしシンジには見えてしまう。

分かっってしまう。

世界で唯一のインフィニティである彼には全ての魂の在り方が見えてしまう。

何だこのエヴァ☒

魂が空虚…でもその体はコピーでも何でもなくアダム？

中のパイロットは…そんな

魂が、ボロボロだ。

リリスの魂が受け継がれていない。

急拵えの魂で…この体を

碇くん、私はアヤナミレイ

さあ、私と一緒に司令のところへ

その時アスカは不意に感じた殺気に、圧に身震いする。

「…ふざけるなよ、碇ゲンドウ。

僕の妹を、命をバカにするな！」

シンジを包んでいたエヴァの手が無理やりこじ開けられる。

そこには、インフィニティ化したシンジが立っていた。

当然司令室でもこの姿はモニターされていた。

「これが、シンジくんの力…」

リツコの眩きが、無言の司令室に反響した。

あまりの驚きに誰もが声を上げることがを忘れ、静かさに包まれていたが故に。

甲板に飛び移るシンジ。

再び手を伸ばそうとするマークナインの前にオリジナルのキーを構えるシンジ。

キーが輝き深紅に染まる。

ウルトラマンZ！アドバンスゼステイウム！

ブートアップ！アドバンスAttoZ！

「希望を導け、真紅の絆！」

『ご唱和ください我の名を！』

ウルトラマンZ！』

「ウルトラマンZ！」

真紅に染まるウルトラマンZがマークナインを蹴り飛ばす。

甲板上を滑るように後退したマークナイン、そしてアヤナミレイは生まれて初めての恐怖を感じた。

咄嗟に背面のブースターを起動させ飛び立ったのは奇跡に近いだろう。

大腿部から下をアドバンスゼステイウム光線が焼き尽くす。

光線が消えたあとマークナインは上半身のみで逃げ出していた。

光が散るようにシンジが元の姿に戻っていく。

恐る恐る近づくとアスカに笑顔で振り向く。

「見られちゃったなあ。

アスカ、僕もね、もう半分人間じゃないんだ。

向こうの世界で、そしてこちらの世界でもただ一人だけの使徒。

リリンインフィニティ。

こうやって体は成長しているけど、いつまで生きていくのか、どうやったら死ぬのか

わかんないんだ。

だから、君は僕に比べたらまだ人間だよ。」

寂しげにいうと、踵を返しミサトへ報告するために歩き出した。

「シンジ……」

アンタ、アタシの秘密にも気づいてそう言ってくれたの？

27話 覚醒する禁忌

マークナインの襲撃から3週間が経過した。

司令室に出頭したシンジは、インフィニティ化を危険視されDSSチョーカーの装着を余儀なくされていた。

はやい話が許可なくインフィニティ化したら首輪に仕込んだ爆薬でリアル黒ひげ危機一髪やるから勝手なことすんな、という保険である。

しかしこれはミスアト達の恩情とも言えた。

新規のヴィレクルーからすれば、シンジの正体が露見した以上人型の未知の使徒以外の何者でもないのだ。

その存在の力を無視して生殺与奪の権理をヴィレが握る。

それは、世界で最後の使徒が人間たちと共に過ごすための最低限の枷と言えるものだった。

ところがシンジはというと、

「僕、こういうアクセサリー系似合わないんです。

もうちよい、いいもんじゃないんですか？」

どこ吹く風である。

元より、使徒大戦が終わって世間が自分の存在について議論してる時から自分の存在の立ち位置は分かっていた。

それでも、ミサトやアスカ達が支えてくれたことから、なんとか生きてこれたのだ。

必然的に他の人に弱みを見せてはいけないと思うようになった。

心の拠り所がある限り折れない、だからこの程度の脅威はシンジにとっては些末なことであった。

そしてアスカとマリはそれぞれ3週間の長期任務に旅立った。

3週間後、艦に降り立ったアスカはシンジのいるという部屋へ向かい目を疑った。

「なん、じゃこりやあ☒」

チョーカーをつけられたシンジが十字架に縛り付けられ自由を奪われ、その体には痛々しい暴行の痕が残り、内出血や吐血の跡が…

なんてことはなく、目の前に広がった光景はその真逆だった。

「先生！」

「ちよつとケガ見てもらえませんか？」

「こつちが先よ！」

先生、後輩がひどい風で……」

「大丈夫、みんな順番に見るからね。」

アサガミさん、その怪我はしばらく痛むけど、見た目ほどひどくはないからねー。

お、ユガミくん咳がひどいね？

薬出しとくからしつかり寝てね？肺炎になったら当然仕事なんかさせないよ。

タカオ機関長には僕から言っておくからね。」

そこにいたシンジはチョーカーこそつけているものの、上には白衣を纏い何人かのクルーに囲まれていた。

そして、クルーたちもシンジを怖がらず、むしろ慕って笑顔で話している。

開いた口が塞がらないアスカの横にミサトが気付けば立っていた。

「びつくりしたでしょ？」

「びつくりなんでもんじゃないわよ、ミサト！」

この間の変身とインフィニティ化で処刑の声も高まつたのに、一体どういふこと

？」

ミサトの話によると、アスカが出てから三日後くらいに急病人が多発したらしい。

医務官総出で対処にあたるが、責任者も研修医だった人物で全く当てにならないかった。

その時大人しくしていたシンジがサクラ経由で話を聞き的確な指示を下し、一旦の混乱が回復。

責任者が泣きつきとうとうシンジが医療現場の前線に立ち事を収めたということだった。

この男、本業は医者。

シンジは原因の調査に着手し、食事の栄養や労働環境など悪影響を与えるすべての原因を突き止め、ミサトを含める各セクションの責任者を招集、現状を説明した上で責任者に説教をかまし、打開策を含めての説明、栄養バランスの取れた食事の考案、責任者たちのフォロワーも全てやってのけた。

これが1週間の出来事。

残りの時間でクルー全体の信頼を得て今に至るといっわけだ。

「あいつは超人かなんかなの？」

「あいにくと、向こうの世界で起きたインパクトの時にあらゆる知識が頭の中に入って

てね。

インフィニティ化したせいか、頭の情報処理速度や睡眠時間がほとんど不要になったりしたから、まあなんともなるんだよね。」

白衣姿のシンジが歩いてきながらとんでもないことを言い出した。

「アスカ、お疲れ様。

怪我はない？

いつでも言ってるね。」

笑顔でそんなことを言ってくるシンジを引つ掴み奥の診療室へ連れ込む。

「…教えなさい、アンタの使徒化した影響について。

アタシたちのエヴァの呪縛も不眠や不老の影響が出てんのよ。

あなたの症状が今後あたしたちにどれだけ出るかで使徒は近づいているかの物差しになるから。」

なるほど、合理的だ。

そしてシンジが語る影響。

肉体の若干の変質

不眠

身体能力の向上

情報処理能力、記憶力の向上

などなど山ほど出てきた。

「おそろくだけど、僕は人という使徒の進化した姿で雌雄同体のアダムの使徒とはまた別の系譜だからね。

君たちの症状を聞く限り、アダムをベースにしたエヴァとのシンクロで使徒よりエヴァに近い存在になりつつあるって感じなのかな？

だから、エヴァに乗らなければ自然と元に戻るはずだけど、現状そういうわけにもいかないよね？」

「そうね、ところであたしたちにもインフィニティ化だっけ？

その進化の形に至る可能性はあるの？」

「いや、それはないかな？」

僕の世界ではウルトラマンに唯一変身してたのとエヴァとのシンクロで肉体と魂が変質してると思うんだ。

それに、その後アヤナミシリーズにリリスの細胞を融合させて自ら進化したニア・インフィニティたちとの戦闘やら、そいつらにリリスの中で完全覚醒させられたっていう経緯もあるから、多分全ての次元で僕だけだよ。」

何言ってるんだこいつ？

アスカが抱いた疑問は至極当然なものであったが、全てが真実ならどれだけの偶然が一致して至ったのかわからないほどだ。

あの力があつたらなんて思ったけど、本当に奇跡みたいなもんなのね、アスカがそう結論付けた時だった。

艦内にアラートが鳴り響く。

『新型エヴァの起動を確認！』

繰り返す、新型エヴァの起動を確認！』

そのアラートにシンジが狼狽する。

「なんだって☒」

そんな、早すぎる！

というか、最後のピースであるこっちのぼくなしに起動だなんて。」

正史ではまだ1ヶ月は先だ。

イレギュラー、としか言えない。

ネルフ本部跡地へ急行し、2号機改と8号機をセントラルドグマへ投下する。

ことの真偽を確かめるため、司令室で状況を確認するシンジ。

そこでシンジは、ありえないものを目にする。

「そんな！」

あれは…13、号機…」

モニター越しで見えないが、おそらく複座式

予想もしないタイミングで、禁忌の存在が目覚めていた。

28話 シン・インフィニティ

イレギュラーな13号機の起動。

対13号機用に整えていたエヴァへのキーシステムの実装は間に合わず、現状最大火力の装備で2号機と8号機を送り出したヴィレ。

そして13号機の後ろに控える mark 9。

セントラルドグマの最下層、リリス封印の間にて睨みあう四機。

その床はニアサーで強制進化に巻き込まれた人間、エヴァインフィニティのなりそこないの頭蓋骨が敷き詰められていた。

そして奥にはリリスの亡骸と、激しい戦いを繰り広げたであろうエヴァが放置されていた。

「誰が乗っているかしらないけど、NERVのエヴァに警告するわ。」

それ以上、その機体を稼働させるのなら武力を持って止めさせてもらおうわ！」

アスカがわざと警告を発した理由、それはエヴァのパイロットの正体を掴むための意図があった。

そして、その意図は汲まれた。

『…そこをどいてよ、アスカ。』

僕たちは、父さんの理想を叶えなきやならないんだ。

槍を抜いて、楽しかったあの頃に戻るために！』

モニターに映った姿、その声。

全て13号機のパイロットが、14歳の碇シンジであることを裏付けてしまった。

混乱するヴァンダー内。

リツコがシンジに問う。

「どういふことなのシンジくん？」

あなたがここにいるのに、なぜエヴァにこちらの世界のあなたが乗っているの？

同じ人間は、同じ次元に存在できないはずよ！」

シンジすら状況を飲み込めていなかった。

「…わかりません。」

インフィニティとして覚醒しているから、世界が僕と彼を同一とみなしていないというのが一番納得のいく答えではありませんが…

しかし、いつ彼はエヴァの中からサルベージされたんですか？」

「実は、あのあと何度もサルベージを試みても誰も救出できていないのよ。

だから、何が起きているのか。」

しかし状況は刻一刻と進んでいる。

アスカが止めるために手にしていた斧で切り掛かるが、ビットがフィールドを貼り攻撃を防ぐ。

マリがアンチATフィールド弾を打ち込むが13号機本体がフィールドを持っていないためにすり抜ける。

13号機はビットで攻撃をいなしながら悠然とリリースに向かう。

『無駄だよ、アスカ。』

でも、邪魔するんなら見過ごせないかな。

大丈夫、全部終わらせたら会いに行くよ。

だから、消えろ。」

そして13号機に乗るシンジがその瞳を真紅に染める。

13号機が緑のラインを朱色に染め、その一对の瞳を真紅に染め、頭上に天使の輪を掲げ始めた。

「擬似シン化形態」

そんな、アンタ一体」

答えはビットから放たれた過重なフィールドの圧力で返される。

2号機も避けるが次々にふりかかる。

正直、キリがない。

『あれは……14年前にシンジが操られて私たちと戦った時の初号機と同じ』

Zが使徒大戦中、トリガーと共に操られたシンジの初号機と戦ったときに手も足も出なかつた形態。

あの時はシンジもほかのリリン・インフィニティに操られていたためシンジの意思ではなかつたが。

その言葉にミサトが反応する。

「では、あの擬似シン化形態はインフィニティ化が原因だど？」

しかしシンジは首を横に振る。

「いえ、あつちの僕の力はインフィニティの力とは別のものです。

シンクロ率が高まって、意図的に封じられたエヴァの使徒としての力を解き放つてい
るんでしよう。

それよりミサトさん、僕も出ます。

こうなった以上、このチョーカーを外して力を使うしかない。」

「…世界の存亡の危機には変えられないわね」

建前上口にしなくてはならない言葉を吐きつつ、またシンジに全てを託さねばならな

い己の無力さをミサトは感じた。

気にする時間はないと、気持ちを入れ替えミサトはチャーカーの解除コードを発動し、その場にチャーカーが金属質な音を立てて落ちる。

ミサトは15年前と違い、今度こそシンジを見送ることにした。

「シンジくん、いつてらっしやい。」

あの子達を頼むわ。」

「行つてきます。」

みんなを、救つてきます。」

そして甲板上に出たシンジはキーを起動しながら、宙へその身を踊らせる。

「絶望を打ち払え！紫電の福音！」

ウルトラマンZ イプシロンエヴァがフィールドを足場に地下へと加速する。

そしてセントラルドグマの空中で追い詰められている2号機を見つける。

でかい一撃で弾き飛ばすしかない！

「真つ赤に燃える、勇氣の力！」

ウルトラマンZ！ベータスマッシュ！

ブートアップ！ベータ！

『ゼステイウムラリアット！』

重量、加速力が加算されたラリアットが直前で気付きクロスガードで構える13号機とぶつかり合う。

『くっ、来たな偽物！』

お前がいなければ、父さんの理想も！』

「何を言ってるんだ！

あの槍を抜いても、何も元には戻らないんだぞ！」

2人のシンジがぶつかり合う。

不意打ちと加速なので隕石レベルのパワーを弾き出しているというのに13号機のパワーは揺らぎもしない。

パワーではこちらが弱いかな、ならば！

インフィニティ化し、アドバンスゼスティウムになり即座に格闘戦に切り替えるシンジ。

13号機はビットからフィールドの腕を作り出し全方位から攻撃を繰り返す。

アスカたちはマーク9を相手取っていた。

しばらくの殴り合いから距離を取り、Zのシンジが問いかける。

「一緒に乗っているのはカヲル君なのか？」

「なんで、僕を止めてやらなかったんだ、カヲルくん！」

その問いに薄ら笑いで答えるシンジ。

『カヲル君？』

ああ、この始祖もどきを知ってるんだね。

父さんが魂を入れたまま廃人にして座るだけのせているよ。

しかし、偽物の僕はこんなものまで人扱いしてるとは、飛んだゲテモノ趣味だな。』

その言葉にかつてない怒りを覚え、全力のゼスティウム光線を即座に打ち込む。

煙が晴れる時にはそこに13号機の姿はなく、リリスの上で槍を掴んでいた。

『君の相手は此世界の終わりです。』

13号機が槍を引き抜き、一閃すると横たわっているエヴァの首が落ち、コード状の

ナニカが出てきた。

感覚でわかる、こちらの世界の使徒。

そしてその使徒が球体に圧縮され13号機が噛み砕く。

『見せてあげるよ、君が至ったことのない姿を。』

擬似シン化、第三形態』

一瞬で全身が白く染まり、背後に輪が浮かぶ、

そして瞬く間に上空まで飛び去ってしまった。

『シンジくん！』

13号機が空中に移動、ガフの扉が開き始めてるわ！」
ミサトからの連絡が最悪の事項を告げる。

即座に飛び上がり空中へ向かうが1分ほどかかってしまった。
そこで見たものは儀式を始めた13号機。

『やばいぞシンジ！』

あのエヴァを止めようにも、先に扉を閉じないと！

片手間で相手ができる相手じゃないぞ！』

「わかってます！

槍がトリガーになっている以上、こっちも槍を出すしかない！」

そしてシンジは自らの心臓の位置に両拳を重ねる。

そこから、ロンギヌスの槍を抜き出した。

一回転させ正面に構える。

「アダム、リリス、力を貸してくれ！」

槍が光に包まれると黄金と黒のキーへと変わり軌道する。

ウルトラマンZ！ZETAロンギヌス！

ブートアップ！ゼータ！

「光と闇！」

狭間を穿て、終幕の槍！」

『ご唱和ください、我の名を！』

ウルトラマンZ』

「ウルトラマンZ！」

最強のZが顕現する。

14年の力のコントロールの修行が、かつての力を比べ物にならないほど強力な存在へと変えた。

前回はグリッター化してようやく壊れた扉だが、今のシンジならば

「こんな未来は認めない！」

ゼスティウム・ロンギヌスマツシャー！」

ロンギヌスの矛先からありえない量のエネルギーが放たれる。

その力はガフの扉に吸い込まれていき、扉を自壊させた。

そして高速で移動し、槍で13号機を叩き落とした。

「悪いけど、君とは戦ってきた年季が違う。」

追撃のため地上に降りたZとシンジが目にしたのは、シン化が解け立ちあがろうとする13号機の姿だった。

装甲はところどころ壊れ、ダメージを物語っている。

『…此世界のことなんて君には関係ないはずだ、手を出すなよ。まさか、父さんにもらったこれを使う羽目になるなんてね。』

次の瞬間、エヴァの量こめかみあたりから鋭角なツノが装甲を砕いて迫り出してくる。

同様に体の中心部に、黄色く発光する器官が迫り出してくる。

装甲は黒く染まり、その両手は鋭角な鎌に変わる。

『君たちウルトラマンを殺すにはこれだと聞いてね。』

ハイパーゼットンのキーを使ったゼットアーマー、フォービドウンゼットンだ。』
なんだと☒

ゼットアーマーは使徒大戦中に向こうの世界のリッコが考案した強化システムだ。しかも怪獣のキーで行うなど聞いたことがない。

なぜこいつらがそんな力を☒

思考は迷いを生む。

気づけば槍は折れ、全身からダメージを感じながら倒れ伏していた。

早い！

攻撃は捉えられず、頼みのロンギヌスすら、一瞬で砕かれた。

『シンジ、大丈夫か？』

よりにもよってハイパーゼットンとは：

ダイナ先輩やゼロ師匠、コスモスさんが合体してようやく勝てた相手だったのに……頼みのロンギヌスも通用しないなんて！」

ガフの扉を閉じた以上、離脱してもいい。

しかし、13号機をこのまま放置すればアスカたちが殺され、再び儀式が起こる可能性も考えられる。

戦うしかない。

「…切り札を出します。

ゼットさんは、奴を倒すことだけ考えてください。

僕らがシンクロしないと、勝てない！」

そしてシンジはZも知らない奥の手を解き放つ覚悟を決めた。

スパークレンスからキーを引き抜き、再び起動する。

オーバーゼスティウム！

再び挿入する。

ブートアップ！オーバー・ゼータ！

『シ、シンジ？！』

動揺するZをよそに、新たな祈りの言葉を紡ぐ。

「宵闇を切り裂く、蒼き明星！」

『えーい、ままよ！』

「ご唱和ください我の名を！ウルトラマンZ！」

「ウルトラマンZ」

ウルトラマンZ！Z E T A インファイニティ！

14年前、全世界とZ、シンジの願いが一つになり進化した2人の到達地点。

インファイニティの力を完全にコントロールできるようになったシンジがZとシンクロすることで進化した。

2人のシンジ、その戦いに決着をつける時が来た。

29話 偽りの墮天

「明けの明星？」

「何それ？」

まだ医学生生の20歳の頃、アスカとカフェテリアにいたシンジはアスカが呟いた言葉を、おうむのように返す。

「墮ちた天使長、ルシフェルの別名ね。」

最近使徒大戦を振り返っててね、あいつら使徒の名前って天使の名前だったじゃない？

「だから聖書を読みはじめたのよ。」

この頃はまだ結婚前の彼女は、大戦時の刺々しさがだいぶなくなってきた頃だった。

その彼女がカバンから取り出した聖書をめくりあるページをシンジに示す。

「これね。」

かつて天使たちの長だったルシフェルは、ある時神に反旗を翻すの。

その罪で墮ちた天使、墮天使の長や悪魔の王として定義されたらしいわ。

まるで誰かさんのことじゃない？」

なんのことかわからずきよとんとするシンジの鼻の頭をアスカがつつく。

「アಂತアよ、アಂತア！」

リリンという使徒の進化体であり、母体の使徒が違うといえど他の使徒からは結果的に見れば、同じ使徒に全て倒されてしまったんだからね。

特にカヲルとの戦い、今振り返ればあの時にはインフィニティとして半覚醒してアダムを倒したんだからなおのことよ。

アイツらからしたら、アಂತアはルシフェルよ。

人の味方となった墮天使に、天使の名を冠する奴らが倒されたってのも皮肉な話じゃない。」

そう言って冷めたコーヒーをすすするアスカを横目に、シンジは考える。

今の自分の現状、そして今後の未来でのあり方を。

不意にアスカが口を開く。

「ま、さながら蒼き明星つてとこじゃない？」

あんたの場合。」

「え、なんで蒼？」

「あんたバカア？」

最後の戦いでアಂತア、蒼い光の化身になったじゃない。

ゼータ・インフィニティだっけ？

Zだけじゃなくてあなたの使徒としての力も混ぜてんだから、あれを蒼き明星って風情のある名前と呼んであげたんじゃないの！」

風情があるかどうかは別として、アスカなりに自分の現状を悩むシンジの気を紛らわそうとしてくれたらしい。

「…そうだね、いいんじゃないかな？」

もしもう一度Zさんとあの力を使う時が来たら、そう名乗らせてもらおうかな。」

シンジの言葉にどこか満足げなアスカ。

まさか、ほんとにもう一度あの力を使うことなどないだろう。

いや、きてほしくはない。

幸せを噛み締めるようにその可能性を頭の中から消し、アスカの手を取ったのだった。

そして時は今に針を戻す。

別の未来の世界でゼットンと融合した13号機を倒すために、シンジは究極の蒼き明星へと至る。

『シンジ』

なんでこの力を使えるようになってるんだ

だってこれは、世界中の光が集まったあの時だけの…」
「ケンゴさんのエタニテイの力を参考にしたんです。」

僕のインフィニテイの力はあの時と比べ物になりませんから。

それで、ゼータのキーに過負荷をかけて一時的にグリッター化してるんですよ。

なので、あまり長くは持ちません。

早めに決めましょう。」

そしてシンジはもう一人の自分に向き直る。

すでに13号機は四つの腕をフィールドで変形させ鎌にして切り掛かる用意を始めていた。

目にも止まらぬ攻防が始まる。

すべての鎌をベリアロクでいなし、捌き、その都度浅いダメージを機体に与えていく。
焦る13号機はどんどん動きに精彩がなくなり、ついに隠し腕の2本が切り裂かれる。

『があああああ！』

よくも、よくもやったな！

『この偽物！』

偽物って、いったい何を…

疑問を考える隙すら与えない13号機、しかし本気のシンジとZを前にその両角をへし折られる。

満身創痍な13号機を蹴り飛ばし、とどめの構えに入る。

インフィニティ・ゼステイウム光線！

放たれた絶対の光はしかし13号機に迫り着くことはなかった。

13号機よりわずかに手前、ATフィールドに防がれている。

ありえない、全てのビットは壊したはず！

そしてカラータイマーが鳴り出したことから、光線をやめるとフィールドの発生源があらわになる。

「…君たちにとっては初めましてになるのか。

改めて、はじめまして異世界の光の巨人、そして私の片割れの愚息の初号機パイロットよ。

碇、ゲンドウだ。」

突如現れた目の部分をバイザーで覆ったこの世界の碇ゲンドウ。

そして全ての元凶にして、終わった世界の古びた執着心。

『父さん、ごめんよ。』

でも、もう少しでガフの扉は開けそうだったんだ！

一緒にあの偽物を倒してよ！」

13号機のシンジがゲンドウに縋るように声をかける、しかし

「ああ、よくやってくれた。

しかし、結果を出せないのならお前も用済みだよ…

初号機パイロット。」

ゲンドウはフィールドのハンマーで倒れ伏した13号機を叩き潰し、ダメージでZ
アーマーが消失する。

エントリープラグを謎の力でどこかへと飛ばし、その際にゼットンのキーを回収し
た。

「…自分の息子じゃないのか☒」

思わず激昂するシンジ。

しかし返ってきたのはあまりにも冷たい言葉だった。

「ああ、そうだ。

だがそれがどうした？

使えなければ用済みだ。

君もだよ、ウルトラマン。」

活動限界時間が迫ったゼットに追い打ちをかけるようにフィールドエネルギーの塊

が降り注ぐ。

耐えるZ、しかし予想だにしない光線がZの胸を焼いた。

放ったのはゲンドウではない、その奥にある何か…

『あまりに遅いので迎えにきたぞ、碇ゲンドウ。』

『ば、バカな！』

なぜ、ここに…

ここに別のウルトラマンが介入してくるんだ！』

そこには銀色の、カラータイマーのないウルトラマンが浮いていた。

「ああ、思ったよりコマが手こずったようだ。

問題ない器たる13号機は回収した。

君から預かったキーも回収したよ、ゾーフィ」

ゾーフィと呼ばれたウルトラマンが虚空に開いた空間に13号機を収納し、ゲンドウと共に潜ろうとする。

『待て！』

お前は、ゾフィー隊長ではなく、ゾーファイだと☒
誰なんだ！』

Zの疑問に立ち止まり、ゆっくりと体を向けるゾーファイ。
『君は、異世界の光の国の者だな。』

そうか君も人間が好きになってしまった：

ウルトラマンなのか。』

そう呟いたゾーファイはひどく悲しげに見えた。

30話 パラドキシカル・ジャスティス

『何を…言っているんだ？』

あなたも、ウルトラマンだろう？』

突如現れたゾーフィと呼ばれたウルトラマン。

彼は立ち去ろうとした際に乙に気づき、悲しそうに呟いたのだ。

『君も人間が好きになってしまった…ウルトラマンなのか。』と

ゾーフィとは違う、そこは間違いないと思う。

しかし、自身がウルトラマンではないかのような口ぶりが乙は気になっていたのだ。

『…私は、ウルトラマンではないよ。』

私はゾーフィ、光の国より遣わされた裁定者…だった。』

そしてゾーフィは乙に向き直る。

『かつて私の同胞が、異星人との接触がないにも関わらず生物兵器である怪獣が暴れる地球へ裁定者として降り立った。』

彼はあろうことか、か弱い子供の命を守り死んだ人間と融合し、人々を守るために光の国の掟とも戦った。

彼の名はリピア、そして人々から畏敬の念を込めてこう呼ばれていた。

ウルトラマン、と。

私は、掟を破った彼を連れ戻すために地球へ来た。

こことは違う地球だ。

そしてウルトラマンは、自らの命を犠牲にして、地球の生物は守る価値のある存在だと証明した。

故に、私はウルトラマンなどではない。

さて、遅くなったが名を聞こうか、異世界の同胞よ。』

カラータイマーが赤く点滅するZだが、ゾーフィに向き直り自らの誇りを示す。

『私はZ、ウルトラマンZ！』

宇宙のどんな命でも守る、宇宙警備隊の一員でこの碇シンジの相棒だ！』

それを聞いたゾーフィは亜空間に向き直ると肩越しにZに語りかける。

『…そうか、どうやら世界が違うからか私たちの生き方は全く違うらしい。

君たちは皆、ウルトラマンと名乗っているのだな。

私は碇ゲンドウと目的を同じにする者。

この星の全ての命を贄に、私はリピアの命を取り戻す。
会えてよかったよ、そしてこれは警告だウルトラマン。

私の道に立ち塞がるな、生きていたのであればな。

もつとも、この先の未来で君たちが生きていければの話だが。」

そしてゾーフィと入れ違いに、亜空間から骸骨の頭を持ったエヴァがせり出してきた。

その数10機。

当然今のシンジたちには造作もない相手だ。

普段であれば、の話だが。

『ダメだシンジ！』

これ以上は力が限界だ。』

Zのその言葉を最後に変身が解け、赤く染まる大地に跪くシンジ。

「そんな、グリッターの負荷がこんなにきついなんで…」

ZETAインフィニティは構想ではあったがあくまで理論上可能な認識であり、実際の運用はこれが初めてだ。

反動までは流石に予測ができない。

しかし、使徒大戦後4ヶ月の眠りにつく負荷を経験したのだ。

むしろこの程度で済むのは奇跡と言えた。

生まれたての子鹿のような足で立とうとするシンジ。

目の前には歯をカチカチと鳴らしながら量産型エヴァが迫る。
アスカと真希波は間に合わない。

「…まだだ、まだ死ぬるか！」

約束したんだ、絶対帰るって！」

しかし現実は無常だ。

もう一機の量産型エヴァが目の前にいてシンジに手を伸ばす。

万事急須、その言葉が頭をよぎり目を瞑った瞬間

ドオン！

目の前を紫電の光の柱が突き抜け、伸ばそうとしている量産型の手を消し飛ばす。

「…見違えたよシンジくん。

積もる話もあるんだけど、とにかく助けに来たよ！」

そこには黒いジャケットに身を包んだ癖つ毛の男がいた。

優しい雰囲気の中に、決して折れない芯の強さを見せる男。

彼の名は

「マナカ、ケンゴさん…」

そう、ウルトラマントリガーことケンゴがそこに立っていた。

そして、

「あなたが碓シンジさんですね！

ケンゴさんから話は聞いてます！

ある人の頼みで助けに来ました！」

横にある見知らぬ若き青年、黒とオレンジの隊服が昔のケンゴを思い出させる。

「君は…?」

「俺はカナタ、アスミカナタです！」

明日を見る、彼方まで！」

漢字説明までしてくれるなんてインパクトツエーな。

ケンゴが場の空気を変える。

「またエヴァが相手なんて、あの時を思い出すね。

話はいいつらを片付けたからだ！」

行くよカナタくん！」

そしてケンゴはキーを、カナタはその手に光を集めアイテムを顕現させ腰のケースからカードを引き抜きアイテムに差し込む。

ウルトラマントリガー！マルチタイプ！

ウルトラダイメンション!

そして二人はゆつくりと被りを振りながら、天へ己の光を掲げる。

「未来を築く、希望の光!

ウルトラマン、トリガー!」

「輝け、フラッシュユ!

デッカー!」

そして立ち上がる二人のウルトラマンは、有象無象のエヴァたちを圧倒的な力で叩き伏せる。

そして最後のエヴァが倒れた時、光となり元の人へと姿を戻す。

そこはふらつきながら近寄るシンジ。

「まさか、カナタ君までウルトラマンだったなんて……

でも、ダイナ先輩じゃなくてデッカー?」

ケンゴが悩む。

「う、うーん。

その説明が、僕とティガより変わってて難しいんだけど……

それより僕たちがここへ来た理由を話してもいいかな?」

その言葉にシンジが向き直る。

カナタの肩を借りながらだが。

「僕らはある人から君の救出を頼まれたんだ。

そして伝言を頼まれてる。

Zさんの師匠、ゼロさんからね。」

31話 welcome to the third village

「ゼロさんって、Zさんの師匠の?」

ゾーフィの放った髑髏型量産エヴァに窮地に追いやられたシンジの前に現れ、その窮地を打開したマナカケンゴとアスミカナタ。

彼らが次元を超えて現れた理由、それは光の国にいるZの師匠・ウルトラマンゼロからの伝言を頼まれてのことだった。

「そうそう。」

用意するからちよつと待ってて。」

ケンゴはそういうとポケットから銀色の棒を取り出し、そのくぼみを押した。

筒の先端が開き、赤い球体が見えたかと思うとそこから上空に映像が投射される。

そこに写っていたのは頭部の両端に鋭利なトサカを持つ銀色と青色を纏ったウルトラマンだった。

『あー、ようやく繋がったか。』

ケンゴ、カナタ、ご苦労だったな。

「それで、お前が碇シンジか？」

シンジは恐る恐る頷く。

『俺はウルトラマンゼロ、お前と一緒に戦っている三分の一人前の…一応師匠をやらせてもらってる。』

「Zのやつが世話かけてるな、これからもよろしく頼む。』

「い、いえいえ！」

「僕の方こそ、Zさんに頼りきりで…」

『Zから聞いてた以上に謙虚なやつだな。』

ゼロの言葉に思わず驚くシンジ。

「いったいどんな話を…」

『ん？』

「ああ、別に変な話じゃないさ。」

シンジっていう14歳の相棒がすごいやつだって、自信はないけどやる時はやるし誰よりも優しいウルトラ強い男、だそうさ。

悪いが思い出話をしに通信をしたわけじゃないんだ、大事なことを伝えるぞ。

まず俺たち光の国の戦士たちはお前たちの今の戦いには手を貸せない。

エネルギー反応からしてお前も接触したと思うが、ゾーフィというウルトラマンが奴

らの世界の天体制圧用最終兵器ゼットンを光の国に放つてきやがってな。

宇宙警備隊の総力を上げて三日三晩の決戦が行われて何とか倒したが、光の国はボロボロでその気に乗じて暴れ回る奴らが多すぎた。

要はその鎮圧と光の国の立て直しで手が回らん。

そこにいる奴らも、自分のいる地球でのゴタゴタの合間に俺の用事を手伝ってもらってるところだ。

だから、この通信が終わり次第元の場所に帰還予定だ。』

自分たちの知らないところでそんな出来事が起きていたとは…

もはや事はウルトラの星すら巻き込んでいる。

『手は貸せねえ、だがなにもしないってわけじゃない。

シンジ、スパークレンスを見てみる。』

言われてみてみれば、ところどころパーツが割れ内部が露出し、あまつさえスパークを上げていた。

『過負荷の代償ってとこだな。

シンジも気づいていると思うが、お前の中の使徒つてのの力が14年前とは比較にならないほど強力になってきてるってこった。

そしてそのスパークレンスは、本来ケンゴがトリガーに変身する前提で設計されてい

るもの。

インフィニティ、だっけか？

その力が想定されていない以上、遅かれ早かれの結果だ。

そいつを、光の国の科学力で俺たちがお前の力に耐えられるように改造する。

だから、3週間後にはZが必ず目を覚ますはずだ。

そのときに光の国に来てくれ。

シンジも反動で今力を使えないと思うからしつかり休め。

行き方は3週間後にまた使いを送る。

最後に、この機械はシンジが持つていつてくれ。

じゃあな。』

そう言つて通信は切られた。

疲れた頭に何とも理解しきれぬ話だ。

ケンゴが迷いながら切り出す。

「シンジくん、ごめんよ。」

僕は今、スフィアという正体不明の敵から地球を救うために戦つてる最中なんだ。

だからもうここから帰らなきゃならなくて…

ごめんね、向こうでの戦いが終わつたら必ず力になるから！」

彼は再び戦いの中に身を置いている。

今のシンジに構う余裕などないはずだろうに、それでも気遣いを見せる優しさ、これこそがマナカケンゴという英雄だったと思ひ出す。

シンジは震える体でありながらも心配をかけまいと気丈に振る舞う。

「大丈夫です、僕もあの時よりも強くなつたんです。

だから二人は、自分の守るべきものを守りに行つてください！

「ここは、僕が守るべき場所です。」

そして3人はお互いの武運を祈りそれぞれの道へ歩き出した。

「何かツコつけてんのよ、やっと思つけたわバカシンジ！」

さっさと行くわよ！」

急な声に驚くと背後にアスカがいた。

「アスカ」

なんでここに？

てか、エヴァはどうしたのさ？」

アスカの話によると、シンジが戦っている間にマークナインがアダムスとして覚醒し、ヴァンダーをハッキングしたらしい。

何でハッキングできたのかとかそもそもアダムスって何だかよくわからなかったが

とりあえず置いておく。

それでアスカが2号機を自爆させマークナインを撃退したんだそうなの。

「というわけであんたに船まで連れて帰ってもらおうと思っただけ、さっきのあんたらの話聞く限りだと無理そうね。

別ルートでいきましょう。」

「？」

どこかで船に合流できるのかい？」

「違うわ、現状船への合流は不可能よ。

特にこの赤い大地の上ではね。

だから、合流できるところまで移動するの。

人類の生き残りが住むコロニーの一つ、第3村までね。

安心なさい、懐かしい顔もいるから。」

そして歩き出すアスカについていく。

正直言つて、僕には知らないことが多すぎる。

全ての知識を得ていると言つても、この世界のことは知らないことが多すぎる。

父さんから教えてもらったのはあくまで断片的な必要最低限なネルフの行動くらいだ。

それに、ゾーフィの存在。

彼の存在は間違いないイレギュラーだ。

横槍だったとは言え、今の僕で勝てるのだろうか？

そう悩んでいた時アスカが急に足を止めた。

何事かと足を止め、前を見るとエントリープラグが落ちていた。

その横に佇む、綾波レイの形をしたクローン体。

待てよ、プラグの中に誰がいるぞ？

シンジは魂を知覚できる。

この魂は、もしかして…

「…アスカ、中にこっちの僕がいる。」

その言葉にアスカは拳銃を抜こうとするので慌てて抑える。

「落ちて着いて、何かあれば僕が制圧する。」

彼も、ゲンドウに裏切られたんだ…

今の彼には、何かをできる気力はないさ。

だけど、まだトリガーになる可能性はあるから一緒に連れて行きたいんだ。」

アスカは呆れた様子だったが、好きにきなさいと僕に任せてくれた。

プラグを開けると虚な目をした僕が座り込んでいた。

「初めまして、こっちの世界の碇シンジ。」

僕は、君が偽物って言ってた碇シンジさ。

ゆっくり話したいんだけど、一緒に来ない？」

しかしこっちの僕は

「僕なんかほつといてよ…」

動こうとしなかった。

仕方ない、と彼を背負って無理やり歩き出すことにした。

彼をみる限り、そこまでエヴァの呪縛にはかかっていない。

つまり、アスカたちと違ってこのままでは死んでしまう。

背負って歩きながら話しかけてみる。

「悪いけど僕の本業は医者だ。」

目の前で見捨てるつもりはないよ。

死にたいなら、自分で自分の死体を始末できるようになってからにしろ。

身勝手に死ぬのは、君のやったことに落とし前をつけてからだ。」

そういうと、こっちの僕は黙っておぶられたままになった。

それでさらにそういう理由で綾波レイもついてきた。

困ったな、二人のことをなんて呼んだらいいんだろう。

そのことだけ考えてアスカについていった。

「ここがピックアップポイントね。」

そうアスカがいうと一台の車が目の前に止まる。

中から防護服を着た人が一人出てきた。

「いやあ、随分待たせたかな？」

何だか聞き覚えのある男の声だった。

「今来たところよ。」

それより全員乗れるかしら？」

「問題ないよ。」

それより、碇、だよな？」

そうか、彼はこの世界の

「ケンスケ？」

防護服の人物が頷く。

そして車に乗り込み、助手席に滑り込んだ。

走り出した車の中でケンスケと話ができた。

「話はミサトさんから聞いてるよ。」

おっかしい方のシンジは違う世界から来たんだって？

それから頼りになるお医者さんだつてな。

今、俺たちの村にはトウジが医者としているから滞在している間は手伝つてやつてくれ。」

そうか、トウジもいるんだ。

そう思っていると昭和時代のような街並みが見えてきた。

「ようこそ、第3村へ。」

歓迎するよ、この惑星最後の希望達。」

32話 「後悔はチャンスの神様の前髪を掴み損ねた愚か者のすることだよ。」

「おつ、きいついたか？」

シンジ、シンジ！」

聞き覚えのある声に聴覚を刺激されうっすらと目を開ける碓シンジ。

僕は、アスカともう一人の僕を背負つて…それからケンスケの車に乗つて町へ行つて

…

曖昧な記憶を辿りながら最後の記憶まで辿り着く。

横から白衣を着た浅黒い男が話しかけてくる。

歳の頃は自分と同じ28歳くらいか？

「ビツクリしたで、お前まで街に入った途端に氣い失つてもうてな。

それになんや、お前が中坊の姿でもう一人おるなんてけつたいな話やけど、ワシには
ようわからん！

ミサトさんの説明もちんぷんかんやつて、とにかくお前は別の世界から来たくらいしかのみこんどらんのや。

ん？おまえ、わしが誰かわかってへんのか？」

目の前の医者が誰なのか寝ぼけ頭と差し込んでから眩しい日差しに目がくらみ、聞き覚えのある声と懐かしい雰囲気なのに答えにたどり着けないでいるシンジ。

見かねたのか、目の前の医者が大袈裟に肩をすくめ話を続ける。

「はあ、泣けるで。」

ワシやワシ、トウジや。

鈴原トウジ、お前の親友やで。

…まさか、向こうの世界ではワシとお前は仲ようないんか？」

その名前を聞きようやく目が覚める。

そうだ、向こうの世界でもいちばんの親友だ。

「ごめんよ、トウジ。」

寝起きで頭が回らなかったんだよ。

大丈夫、元の世界でも親友だよ。

お互いの結婚式の挨拶を任せるとらいにはね。」

「おう！」

そうかそうか、ちなみにわしは向こうでは誰と結婚しとるんか教えてくれんか？
なんか、嫁さんと違う人の名前上がるんとちゃうか思うて気がきでないねん。」

周りの目を伺いながら恐る恐る聞いてくるトウジ。

「何言つてんだよ、トウジの嫁さんなんて委員長以外いないだろ？」

「こつちじや違うの？」

それを聞いて安心したからのように胸を撫で下ろすトウジ。

「ホンマ焦つたでえ。」

やっぱりワシは向こうでもこつちでもヒカリと結婚する運命やったんやな。

違つたから今日帰つて目が合わせれんとこやつたわ。」

溺愛してんなー、と思いつつ他の人たちの様子を聞いてみた。

「あ？」

なにいうてんねん、お前らが町についてから2週間はたつてんで。

式波と中坊のお前はケンスケのところで預かってもらうとる。

一応お前ら兄弟つちゆうて周りに説明しとるからな、その辺を気をつけや。

名前同じでもあかんから、周りのもんにはシンジの兄貴の碇ジンつてことにしとるかな。」

やはりZインフイニテイの代償か、長期間の意識不明状態だったか。

しかし光の国に行くまでの猶予が1週間もある。

これは以前四ヶ月の昏睡状態になったことに比べれば嬉しい誤算だ。

「そっか、気を使わせてごめん。」

「なにいうてんねん、水臭い。」

わしとお前の仲やろ。」

やはり次元を超えても自分達はこうでなくてはならない。

そう思えて仕方がなかった。

自分が寝ている間のことを聞いてみると中学生のシンジは最初は塞ぎ込んでいたよ
うだが何かをきっかけに持ち直して、今はケンスケの手伝いをしているそうだ。

アヤナミレイは農作業に従事し同僚のおばちゃんから気に入られたようだ。

しかしシンジの中では

『レイから聞いたことあつたけど、あの体は調整を受けないといけないと…』

2週間か、そろそろやばいんじゃないか?』

疑念が膨れ上がっていた。

「どうしたんや?」

思案顔になっていたようでトウジに突っ込まれる。

「なんでもないよ。」

ちよつとアヤナミに会いたいんだ、案内してくれない?」

そして農作業が終わり、鈴原家でアヤナミと会うことができた。

「あなた、大人の、碇くん？」

「君の中ではそうカテゴライズしたんだね。」

「ここではジンって名乗らないといけないからそう呼んでよ。」

「思わず苦笑しながら返すシンジ、もといジン。」

「家族には聞かせられない話なので表に二人で出る。」

「田植えを手伝ってるんだってね？」

「偉いじゃないか、自発的にやっているのかい？」

「いいえ、ここでは働かないといけないと言われたから。」

「碇くんは今はお手伝いをしてる。」

「ジンは、働かない人？」

「これはまたストリートに聞いてくるな。」

「綾波シリーズの無垢な様子に苦笑してしまうジン。」

「いいや、僕はもともと医者なんだ。」

「だからトウジの手伝いをするんだ。」

「それで君、最後に調整を受けたのはいつ？」

「ハツとした顔で目を背けるアヤナミ。」

「…やっぱりそうか。」

「いつがタイムリミットなんだい？」

「長ければ、今週の終わりには。」

「でも、どんどん体が透けてきてるの。」

彼女をセルフに返すには時間が短すぎる。

過去にシンジがアキラやレイの肉体を再構成した時と同じことをするにはインパクトに匹敵するエネルギーが必要になる。

最低でも一人の生命情報を書き換えるにはインフイニティの上位種二人分のエネルギーが必要だ。

乙が目覚めていない現状では、いくらシンジの能力が高いと言えど不可能な話だ。

「ごめんね、僕は君を救える手立てを知ってはいる。」

「だけどそれには力が足りないんだ。」

「何故謝るの?」

「…医者として君の命を救うことができないからだ。」

それを聞くとアヤナミは遠くを見つめる。

「いいの。」

私はそう造られたから。

「ただ、もつと碇くんと一緒にいたかった。」

アヤナミの言葉にハツとするシンジ。

彼女は敵だ、しかし：

「なら会える時は会いに行つたほうがいい。

君の魂はひどく不安定だ、この生を終えても生まれ変わる保証はない。

なら、やれることはやるべきだ。」

アヤナミはそれを聞くと一瞬目を見開き、一礼してシンジのある山の方まで駆け出した。

その翌日、シンジはシンジを訪ねた。

当然驚き、警戒心をあらわにする。

アヤナミはいないようなので、ケンスケに断りを入れ二人きりになる。

「…なんのようですか？」

父さんに見捨てられた僕を笑いにきたんですか？」

うーん、まあ敵だったし随分警戒されたなあ。

「そんなことしないよ、僕も君と同じ人間なんだから。

ここではややこしいから君の兄のシンジってことになつてからそう呼んで。

ところで、アヤナミには会つたかい？」

「…ええ、今朝はここから仕事に行きましたから。」

それがあなたに何の関係が？」

なるほど、どこまで知ってるんだらう。

「君はアヤナミ、いや綾波シリーズのことをどこまで知ってる？」

シンジはその言葉に悔しそうに下を向きながら

「母さんの、クローンだとは聞いてます。

でもそれがなんだっていうんですか！

彼女は、アヤナミはアヤナミだ！

アスカは、彼女が僕に好意的なのはそうプログラムされてるからだって！

でも、彼女は今生きてここにいます！

だから彼女の気持ち、僕が思う気持ちを作り物や偽物なんて言わせません！」

「別に、君たちの気持ちをご否定したり間柄を非常識だなんていうつもりはないよ。

でも、残された時間はあまりない。」

シンジの言葉にさつきまでの威勢が嘘だったかのように狼狽するシンジ。

「どういう、ことですか？」

あ、父さんたちとの戦いが近づいてて世界が終わるかもって話ですか？」

シンジはゆっくり首を横にふる。

「残念ながらそうじゃない。」

彼女は、いや、彼女達の肉体は人と使徒の遺伝情報をベースに構築されている。そして培養槽で本来の人間の成長速度を無視して一定の年齢まで成長させられる。だけど、本来の理を無視した存在には相応の代償が存在するんだ。彼女たちの場合、酷く肉体が脆い。

だから定期的にNERVの培養槽の中で調整を受けなければいけないんだ。

だが彼女はあの戦い以後一度もNERVに戻らずここにいる。

その意味が、これからの結末が君にもわかるはずだ。」

ジンの言葉にシンジは膝から崩れ落ちる。

そしてジンのズボンに縫り付く。

「そんな、なんとかしてよ！

あなたは医者なんですよ！

僕に言ったじゃないか、目の前の命は見捨てないって！

だから、アヤナミを助けてよ！

あなたには僕にはないあの力もあるんだ、できるでしょ！」

シンジの気持ちは痛いほどに伝わる、それでも

「無理……なんだ。

そして彼女自身が一つの命として終わりを迎えること決めたからここに残っている

んだ。

確かに僕は医者だし、インフィニティの力もある。

でも僕は神じゃない。

彼女を、人造人間から生物学として一人の生命にするには力が…どうしても足りないんだ…。」

その言葉にシンジはとうとう耐えきれず地に伏して涙をこぼす。

シンジはシンジに語りかける。

「僕には生命の魂が見える。

彼女の魂はひどく脆い、リリスの魂を受け継いでいないんだ。

だから、転生もできないかもしれない。

だけど、君にはできることがあるはずだ。

僕は医者で他の人の病や怪我は治せるし、戦うこともできる。

でも、彼女の魂を救うことはできないんだ。

だけど君にはそれができる。

だから、自分で考え、自分で決めろ。

自分が今、彼女に対して何ができるのかを。」

顔を上げたシンジに優しく語りかける。

「僕が医者の見習い中にね、どうしても救えない命があつた。

当時の僕は、インパクトの影響で世界中のあらゆる知識が頭に入つてはいたんだ。

でも知識と経験つてやつは別物でね、その患者さんが亡くなられた後にすごく思い詰めたんだ。

もつとああすればよかつた、つてね。

でも当時の上司が言つてたんだ。

後悔は、チャンスの神様の前髪を掴み損ねた愚か者のすることだよつてね。

チャンスを掴むには掴めるだけの努力が必要なのさ。

正直僕は知識があるから慢心してなかつたかと言われると否定できなくてね。

だからそれからは、救うための自己研鑽は常にしているよ。」

そう言つてシンジの肩を掴み立たせる。

「落ち始めた砂時計は止まらない。

だから、君には限られた時間で彼女にできることをしてあげてほしい。

大丈夫、ケンスケの手伝いは代わりに僕がやつとくから。

行つてきな、僕かでも彼女を幸せにしてやるんだ。」

そしてシンジはアヤナミの元へ走り出して行つた。

それから1週間後、ヴンダーがアスカを引き取りに着陸した。

「ほんとにあんたは行かないの?」

「ごめんよ、アスカ。」

肝心のスパークレンスも壊れてるし、どのみち光の国に行かなくちゃならないんだ。

大丈夫、来週の作戦までにはちやんと戻るから。

ミサトさんにも話して了解もらってるよ。」

そう話していた時、誰かが走り寄ってきた。

制服姿のシンジだ。

随分あわててきたのか息切れを起こして膝に手をついているので顔は見えない。

「はあ、はあ…」

シン、さん

ありがとうございます…

おかげで彼女は、笑顔で旅立ちました。」

「そっか、よく頑張ったね。」

それで?

それだけを言いに来たのかい?」

シンはシンジにアヤナミをここまで連れてきた自分の責任だと思わせないように、あ

えて憎まれ口を叩いた。

「…そんな言い方ないじゃないですか。

本当にあなた僕なんですか？

別にいいですけど。

アスカ、僕も連れて行って欲しいんだ。

何もできないかもしれないけど、決着がつくときに僕がその場から逃げているのは違

うと思うんだ。

どんな形でも、けじめをつけたい。

アヤナミに、報いるためにも。」

アスカは無表情で

「…そう。」

これ、規則だから。」

どこからか取り出したスタンガンでシンジの意識を飛ばした。

そして、中学生のシンジを肩にかつぐ。

「さて、ならアタシはこのガキシンジを連れて行くわ。

あんたも早く来ないと、全部アタシが終わらせた後かもしれないわよ。」

そう挑戦的な笑みを向ける。

「それならそれでいいよ。」

アスカ、間に合わせるからどうか無事でいてくれよ。」

一瞬大人のシンジの懇願に間の抜けた顔を見せるアスカ、しかし

「あんなバカア？」

いいわ、全部アタシがやっちゃうわよ。

アस्ताは帰ってこなくていいから！」

怒ったようにそっぽをむくが、口の端の笑みはこちらでも確認できた。

そしてアスカを見送ると、

『いよいよですな、シンジ！』

いぎ、光の国へ！』

ちようど昨日目覚めたZが大人のシンジの横に立つ。

ウルトラマンゼロとの約束通り、光の国へ向かう日が来たのだ。

大人のシンジはゼロから預かった銀色の円筒のスイッチを起動する。

音が響くと目の前にワープゲートが現れた。

全てに決着をつけるその日のため、大人のシンジはそのゲートを潜り抜けた。

33話 終極地獄血戦カルヴァリーベース

ジン、改め碇シンジが光の国へ旅立ち10日が経過していた。

ヴァンダーでは最終決戦の義準備が着々と進められていた。

副長であるリツコは多忙な業務の合間を縫ってとある部屋を訪れていた。

そこは純白のカプセルが幾重にも積み重ねられた部屋であり、墓場のような神殿のような趣を感じさせる。

その一角に真紅の外套と帽子を被る親友の姿を見つけ歩み寄る。

「ミサトがいるならここだと思っただわ。

いつもここだもの、でも仕方ないわよね。

だってここはリョウウちゃんの残した部屋だもの。

館長室のプレート、ここに張り替えようかしら？」

「加持は関係ないわ。

いい加減で自己矛盾なあいつは、あの時自分の身勝手にこの世から消えたの。

だから、アイツが残したこの船の本来の運用目的がインパクトで滅びゆく動植物の遺伝子の補完だったとしても、私はそのためには使わない。

ネルフ殲滅、インパクト阻止が最重要目的よ。

故にaaaヴァンダーは最後の瞬間まで、命を繋ぐ船ではなく命を守る戦闘艦として運用します。」

この世界では加持リョウジは故人となっていた。

リリースとマーク6の戦闘の末に引き起こされたサードインパクトにより開かれたガフの扉を封じる人柱として、自らと引き換えに世界を救った。

「それは使命？」

あなたの個人的な復讐ではなくて？

情動で動くと碌なことにならない、貴方の経験よミサト」

リツコの言葉には共に戦火を潜り抜けてきたと言う経験の裏打ちがあるだけに言い返せずに苦虫を噛み潰したような表情のミサト。

「…相変わらずきついわね。」

「ミサトを甘やかすと碌なことにならない。

私の経験よ。」

故にリツコは誓う。

今度こそ、ニアサードインパクトのような過ちは起こさせないと。

2度と親友だけに罪は被らせないことを。

そして2日後、風雲急を告げる艦内放送がミサトから行われた。
『総員に告げる。』

現在移動要塞と化したネルフ本部が黒き月を伴い南極へ移動している状況を確認した。

これより30分後に、ネルフは殲滅を目的とした大和作戦を実行することから、現作業を20分以内に終了させ所定の運用位置へ移動せよ。

これまでの全ての業に、決着をつけます。』

そして30分後に衛星軌道上から大気圏を通過し高度100000キロまで到達したヴンダー。

その直下には白色の結界が貼られていた。

「これが原罪で穢れた生命を拒む、エル結界の上空……」

その上を、祝福も受けずに人類が通過しているのはリヨウちゃんの残したアンチエルシステムとこの船のおかげね。」

リツコは科学者として、状況を分析しつつ感傷に浸っていた。

どこまでも静寂が包み込む空間をいく翼を持つ戦艦。

間も無く南極の直近に到達する最中、突然の衝撃がヴンダーを襲う。

そして、その衝撃は漆黒に染まる同型艦からの砲撃によるものだった。

「あれは！

まさか秘匿されていた同型艦があつたのか☒

そうでなければ説明がつかないか：

そしてこの仕掛け方：冬月副司令ね。」

リツコの分析を裏付けるように、二番艦の中では冬月コウゾウがヴンダーを見据えていた。

「これも儀式に必要な手順だね。

今しばらく怒りのわがままに付き合ってもらおう。」

そして激しい撃ち合いの最中、とうとう潜航ポイントは到達し結界を打ち抜きながら潜り込むヴンダー。

しかし行きはよいよい、とは行かない。

圧倒的な物量のエヴァインフィニティの海に突っ込むこととなった。

それを追いかけてくる二番艦、そして行手を阻むかのように三番艦が現れる。

「ちっ！

挟撃されたか！

前方に突っ込め！

上昇時に下からかちあげて、反転の後に目標三番艦と当艦を入れ替える！

まだ、エヴァを使うわけには行かないのよ。」

そしてミサトの指示通り潜り抜けたヴンダーを、新たな敵が待ち受ける。

シンジを襲った骸骨の頭部をもつエヴァの大群だ。

「っ！

躊躇できないわね、リツコ！

エヴァ各機発進！

アスカが機動準備中の13号機のコアに停止信号プラグを打ち込めば全て終わるわ

！

マリ、サポート頼んだわよ！」

そして射出されるエヴァ2号機と8号機。

2号機は先の戦闘で失われた半身を鎧で補強したような姿、8号機は腕に特殊なガン

トレットを装着し、背部に2号機の武装を牽引していた。

そして2号機が搭載ミサイルや8号機から供給される武装で迫り来る骸骨エヴァこ

と7号機を次々破壊していく。

しかしやってくる大量のエヴァを捌くのは、至難の業だ。

そして、物量に物をいわせ、渦巻きさながらなドリルのような陣形で突貫してくる。

これは…武器でなんとかなるレベルじゃないわ！

武人としてのアスカが冷静に判断する。
ならば

「コネメガネ！」

ぶつつけ本番であれを試すわよ！」

わずかな言葉、しかしその言葉だけでマリは自ずとやるべきことを理解する。

そして激突する二陣営のエヴァ、質と量の戦いの軍配は…

ヴィレに上がる。

そして浮かび上がるネルフ本部の地表部分にたどり着いた二機の姿は新たな輝きを放ち、己の名と共に勝鬨をあげる。

エヴァセカンド・デルタサムライマスター！

エヴァエイト・デルタライズドラゴン！

2号機は全身装甲の武将のような鎧、その手には大質量の大砲が握られる。

8号機には龍のような鋭角な装甲とガントレットの変形した大型の爪、翼、尻尾が装備されていた。

目標まで後わずか！

だが、目の前には円形の機械にエヴァの腕を取りつけた醜悪な敵が多数待ち構えていた。

「姫！

ここはあつしが引き受けるよ！

早く13号機を！」

マリに敵の相手を託して、アスカはネルフ本部の最深部へ乗り込む。

そこには十字架に貼り付けられた13号機が眠りについていた。

その中心部に露出するコアへ、停止信号プラグを打ち込むアスカ。

しかし、

「なに、このフィールド☒

13号機は固有のフィールドを持たないはずじゃ？

まさか、2号機がこいつにビビってるっての？」

しかし現実には思案しても変わらない、ならば！

「はっ！

切り札はあたしだって持ってんのよ！

コード反転！

裏コード7777!」

そして今、アスカの眼帯が剥がされ、青く十字に輝く瞳があらわになる。そして目の中から棒が飛び出す。

それは封印柱、封じるものは禁忌の存在。

この世界における第九の使徒の力を宿すアスカは、禁忌すら己が力として振るおうと
していた。

自らがこの後に存在が許されなくなったとしても。

そして封印が解かれると同時にエヴァがエネルギー体へと変化していく。
停止信号プラグは光を放つ十字の槍へと変わる。

それを振り下ろさんとした時、

「まっていたぞ、この時を。」

起動した13号機がエネルギー体となった2号機の首を瞬時にはねる。

そしてその2号機のエントリープラグが抜き取られ13号機の右手の上に転がされる。

そこからアスカは引き摺り出された。

全ての元凶となる男、碓ゲンドウに胸ぐらを掴まれ持ち上げられる。

「…2号機パイロットご苦労だった。」

君の役目は使徒を私の元まで連れてくることだったからな。しかし、君自身はいらない。

私の理想の依代となるのは、オリジナルの君だ。

君の意思が私の計画の邪魔になつては困るのだよ、ではな。」

そしてアスカの左目から赤きコアが迫り出してくる。

アスカは頭に絶叫しているが、左目に損傷はない。

そしてゲンドウはヴンダーへ向かう。

アスカはマリの足元へ転がされた。

「姫☒」

エヴァは？

13号機はどうなったの☒」

「やら、れた！

あたしの中にいた使徒が、持ってかれたわ！」

何を企む、ゲンドウくん？

マリは思考を止め、残りの敵を片付けてアスカを拾いヴンダーへ飛び立つ。

ヴンダーはピンチを迎えていた。

エヴァ射出後に、秘匿されていた最後の存在である四番艦に船体を貫かれ身動きが取

れずにいた。

そして他の敵艦と共鳴し、新たなロンギヌスの槍を生成してしまっていた。

大きく全体が揺れると、環境前には主機として封印していた初号機を抱える13号機が浮遊していた。

「甲板上に侵入者！」

オペレータの声に全員が甲板を見る。

そこに佇むのは碇ゲンドウ。

あわてて全員が外へ出る。

「ご無沙汰です、碇司令。」

ミサトが口火を切る。

「ご苦労だったな、葛城大佐。」

計画通りこの船と初号機は私が使わせてもらう。

そして第九の使徒もな。

2号機パイロットなら生きてはいる、もう一機のエヴァの足元に置いてきた。

いずれ死ぬのだ、ならば最後まで君たちと共に生かすのは私なりの慈悲だよ。」

そう言った瞬間、ゲンドウの頭部が弾け飛びゆっくりと倒れた。

全員が振り返るとリツコの拳銃から硝煙が上がっていた。

「目的遂行に躊躇するな、あなたの教えですよ。」

しかしゲンドウは立ち上がる、人を捨てたが故に。

「…君か。」

別の世界から来た初号機パイロットから聞いていないのか？

私は自らの体の理を書き換えている、無駄なことはやめたまえ。

君たちと議論する気はない。

葛城大佐には物事の本質が、赤城くんには幸せな形が見えていない。

故に、私のなすべきことの意味など理解できないだろう。

ではな。」

そして浮遊しエヴァの口の中に入ろうとするゲンドウ。

しかしそれを呼び止める声があった。

「父さん！」

隔離されていたはずのシンジが出てきていたのだ。

シンジは思案する。

聞きたいことがある、だが何を？

葛藤する間にゲンドウは13号機をシンジ化させ、セカンドインパクトの爆心地たるカ

ルヴァアリースへと落下していく。

全てを無に帰す、ただそれだけのために。

甲板上にアスカを連れた8号機が戻る。

医務官たちに治療を受けるアスカを横に幹部たちが話し合いを始めた。

「マリ、あの中でエヴァを追える?」

ミサトに聞かれるもやれやれと首を振るマリ。

「ダメだにや、あの先はマイナス宇宙に繋がってる。」

虚構の世界だからなあ、今の8号機じゃいけないにや」

全員が俯く。

しかし敵は手を休める気はないらしい。

エヴァ・オツプファータイプこと元マークナインが8号機を襲う。

「にやろう!」

艦長、こいつは任せな!

Zとシンジくんが来るまでの時間は稼ぐよ!」

そして空中戦が始まる。

ヴァンダーを鎮めようとする多数の7号機へ主砲で応戦するように指示を出すミサト。

『みんな踏ん張って!』

Zとシンジくんは絶対来るわ!

だからそれまでは！」

そして艦のクルー達が動き出す。

皆が信じているのだ、シンジとZが帰ってくることを。

しかし例外もある。

それは、この世界のシンジだった。

自身の現状、父親のこと、別世界の自分。

ストレスの極致であったシンジの心の声は現実の音となってクルー達は伝わる。

「っ、なんでだよー！」

あいつも僕なんだろう、ならあいつもこの世界の邪魔者なんだろう！

それに、アイツは父さんに勝てなかったんだ、きても勝てるわけないよ！

いや、僕と同一人物ならきつと逃げ出して！」

そう叫ぶシンジの胸ぐらを掴んだのはアスカだった。

「ピーピーやかましいのよ、ガキシンジ！」

確かにあいつもあんたと同じよ！

この世界を滅ぼしかけたニアサーを起こしたあんたとね。

あいつはこの世界に来た時、なんの罪もないのにアンタと同じ人間ってだけでこの艦

の人間に殺されかけたわ！

でもアイツはアンタみたいにただ喚くだけじゃなかった。

戦って、大罪人のレットテルの中でもみんなの信頼を勝ち得たのよ！

だからみんなあいつが来ることを信じてるの。

あんたにあつてあいつにあるものがその差なのよ！

だから、誰も最後まであいつが来ることを諦めないの！」

しかし無情にも主砲の一騎が破壊される。

ダメか…

そして二機の7号機が甲板にたどり着く。

だがアスカは睨みつけるのを辞めない。

いや、アスカだけではない。

全てのクルーがそうしていた。

そして心の中で皆が彼の名を呼ぶ。

その声は、願いは新たな光を呼び覚ます。

まさにその手をクルーに伸ばしていた7号機とその横にいた7号機が消滅する。

青白い光によって。

その光の中に立つ一人の男の背中を見て、アスカは溢れる涙を誤魔化すように悪態をつく。

「バカ、遅いのよ。」

ヒーロー気取り?」

そんな悪態も男は背中越しの笑顔で返す。

「ごめんよ、遅くなって。」

でもみんなの心の声が僕を呼んだんだ、だから間に合ったんだ。」

そこには新たな青いスパークレンズを構えたシンジが光の国から帰還していた。

そして変身することなく、スパークレンズの銃撃だけで迫り来る7号機全てを破壊していった。

一旦の危機はシンジが全て薙ぎ払った。

しかし、静寂を破るように背後から拍手の音が響き渡る。

突然の意識外からの音に、振り返った全ての人間が凍りつく。

「いやはや、あれだけのエヴァを全て倒すとは。」

やはり立ちはだかるのか、碇シンジ。

いや、ウルトラマンZ。」

そこにいたのはいるはずのない人物。

ミサトの口が開く。

「そんな、加持、なの?」

そこにいたのは黒いスーツを着た加持リョウジが立っていた。

ありえない、なぜなら加持はサードインパクトを止める人柱となっていたはずなのだから。

34話 ウルトラの誓い

甲板上に現れた人物は、いつものような軽薄な笑みは浮かべていなかった。

どこまでも無機質な、能面の様な表情に知己の間柄の者は自らの認識をどこまでも認めることはできなかつた。

いつもの着崩した青のワイシャツではなく、喪服を思わせるような黒のジャケットに黒のワイシャツ、そしてエル結界を思わせる真紅のネクタイ。

見慣れていたはずの無精髭はなく、唯一後ろで縛つた髪が以前の男との唯一の類似点だつた。

「なんで…」

加持、なの？

そんな、あんたは！」

誰よりも近しく、加持と子まで授かつたミサトには現実を受け入れられなかつた。

それもそうだ、なぜなら彼は

ミサトと子供を守るためにサードインパクトを止める人柱になつたのだから。

しかしその正体に気づけるただ一人の男だけはすぐに表情を驚愕から警戒へと引き戻す。

魂の形を唯一知覚できるインフィニティの力を持つシンジはその魂を正確に見つめ、かつてヴィレクルーが聞いたことのないほどの冷たい声で問いただす。

「加持さんの格好で現れてなんのつもりだ？」

「答えろよ、ゾーフィ。」

一同が驚愕する。

そこにいる人物は加持リョウジの形をした光の巨人だと告げたシンジの言葉を皆理性では受け止めている、しかし本能がその理解を拒んでいるのだ。

中身があのゾーフィなら、加持の魂は…

うちに渦巻く疑問に拍車をかけるように、加持が笑い出す。

「ああ、そういうえば君は魂の形が見えるんだったな。」

君たちの中には当然湧き上がる疑問があるだろうから答えよう。

私のこの姿は擬態ではない、正しく加持リョウジの肉体だ。

最も、君やZのように共生関係というわけではないがね。

だが、私がこうしてこの体にいることでこの男の命を繋いでいるのもわかるだろう

？」

その言葉にハツとしたシンジは目をこらす。

なんてことだ、あの体の中には：加持さんの魂が眠っている。

「私がこの世界にたどり着いた時、君たちの言うサードインパクトの最中でね。

矮小な生命でインパクトを止めようとするこの人間に興味が湧いた。

そして我々の魂の波長は異星人であることを関係ないと言うようにピッタリとあつ

ていたのもあつてこの人間と一体化したのだ。

最も、この星での長期活動を行うにはそのやりかたが効率が悪かったのもあるがね。」

それを聞いて黙っていたシンジがゆっくりと口を開く。

「それは、心の奥底にリピアさんを理解したいって気持ちがあつたからじゃないか。

それならきつと僕たちは分かり合えることができるはずだよ。

なんで父さんに協力しているのか、今の話でもっとわからなくなった。

答えるよ、ゾーフィー」

シンジの言葉に確かにと声が周囲で上がる。

周囲の状況をひとしきりみてゾーフィーは一つため息を落とすとシンジに向き直る。

「なるほど、やはり君には小手先の言葉では足りないらしい。

私が碇ゲンドウに手を貸す理由だったか？

そう難しくはないよ、単にリピア復活の生贄の調達のためさ。

碇ゲンドウは連鎖するこのパラレルワールドの地球全てを命のない星にしたがっている。

その後のこの星は好きにしていいたいと言うことだったからな、魂の残りを集めてリピアの贄とし、私とリピアでこの星を楽園にすることが私の目的だ。

誰も傷つける必要のない自立した強者たちの星、そして外や光の国からの干渉を拒絶できる力ほどの強さとリピアと同じ優しさを持った生命でこの星を満たす。

元来弱く醜い、他者へと依存するこの星の命があつたままでは成し得ない事柄なのでね。

碇ゲンドウの計画は非常に都合がいいのだよ。」

ゾーフィの口から語られるゲンドウの補完計画後のこの星の歩むシナリオ。

傷つけ合わない強く優しい生命がこの星を満たす、理想的だ。

だが、それを聞いて黙っていない男が一人、拳を握り口をひらく。

「確かに僕たち人間はとても弱いし醜く争うよ。

だけど優しくして強い人だって大勢いた、みんな自分の守るべきもののために必死だったんだ。」

そのシンジの強い視線を真っ向から受け止めてゾーフィは続ける。

「だが、そんな命から先に死んでいった。」

リピアのようにね。

それが私の生きてきたこのマルチバースという世界だ。

君もそうだ、碓シンジ。

ウルトラマンという大きな渦に巻き込まれ、一度は命を落としたか弱き命よ。

やはり大きな力の前では君たち人間は無力なのだ。」

そう言い切ったゾーフィを前に今度はシンジが目を閉じ改めて向き直る。

「そんなことない。

僕たちはいつだってそんな大きな力に抗ってきたんだ。

絆っていう強さを持っているから。」

そう言っつてシンジはスパークレンスを掲げる。

「だからゾーフィ、君を倒して証明してみせる。

君のいう大きな力に打ち勝てる、力だけじゃない本当の強さを!!？」

ゾーフィも懐から自身のベータカプセルを取り出す。

「…いいだろう。」

君こそリピアの最初の贄に相応しい。」

赤き光が辺りを包み込みゾーフィが本来の姿へと戻る。

そしてシンジはこの世界のシンジに語りかける。

「君はマリさんに連れて行ってもらうってこの世界の父さんを追うんだ。

君がけりをつけている間、ゾーフィは僕がなんとかするから。」

そしてマイナス宇宙へ八号機が飛び立つのを見送るとシンジもすかさずアドバンスのキーを作動させる。

「希望を導け、真紅の絆」

『ご唱和ください我の名を、ウルトラマンZ!!?』

ウルトラマンZ アドバンスゼステイウム

2体の巨人の右拳がぶつかり合い開戦の狼煙を上げる。

激しい肉弾戦が続く中、両者が距離を取り光線をぶつけ合う。

互角、それを見てゾーフィが感嘆を漏らす。

「ほう、今は私と互角か。」

随分と光の国で鍛え直したらしいな。

だが付け焼き刃で倒せると思ったら間違いだぞ。」

光線をやめガフの扉に匹敵するほどの巨大な光輪を放つゾーフィ、

受け止めようとするZだが、エネルギーの密度が違いバリアを少しずつ削られていく。

このままでは…

その瞬間時が止まる。

目の前に伝説の初代ウルトラマンが立っていた。

いや、カラータイマーがない…

「初めまして、別のウルトラマンよ。

私はリピア、私もウルトラマンと呼ばれる者だ。」

彼こそがゾーフィの同胞、しかし死んでいるはずでは

「君がゼロから預けられたベータカプセルは私のものだ。

そしてゾーフィの放つ強いスペシウム133に触れることで君の意識に介入してい

る。

単刀直入に頼もう、ゾーフィを共に止めてくれ。

彼は自分を制御できなくなっている、私のせいだ。

私は新たな命など望まない。

魂が生命の輪に溶け込むのも悪くないことだ。

だがしかし、彼は罪を重ねるたびにその魂に傷を負っている。

どうかともに…」

リピアの願いにホルスターのキーの一つが光を放ち応じる。

「Zさん、マン兄さんが言ってる…」

「自分も力を貸すからって」

『私も感じたぞシンジ。』

行こう、お二人の力と絆を君の力で束ねるんだ。

そうすればきつと…」

頷いてシンジはリピアの手を握り、もう片方の手で光り輝くキーを掴む。

シンジのインフィニティの力が光り輝き、一層光を増すとリピアの手を握っていたはずの手に新たなキーを持っていた。

リピアの姿は見えない、きつと力を託すところまでが精一杯だったのだろう。

時は動き出し、光輪は変わらずZを飲み込もうとしている。

だが、託された思いが二人を後ろへ引かせることはなかった。

「いくよZさん!!?」

『おう相棒、見せてやろう!!?』

そしてシンジは新たなキーを起動する。

ウルトラマンZ ベータエクリプス・インフィニティ!!?」

ブートアップ、エクリプス!!?」

「宿命を超える、運命の双星!!?」

『ご唱和ください我の名をウルトラマンZ!!?』

「ウルトラマン、Z!!?」

ウルトラマンZ ベータエクリプス・インフィニティ!!?

光輪を切り裂いたのは同じ大きさの光輪だった。

新たな赤と黒のZが立ちはだかる。

「ゾーファイ、お前を止めてみせる。」

「このリピアさんの力にかけてな!!?」

35話 シンジの力

『…なぜだ、なぜ君がリピアの力を纏っている?』

ゾーフィは驚いていた、とは言っても表情に揺らぎはない。

しかし、その仕草が、その声音が驚愕を物語っていた。

何故ならば、つい先ほどまで自分の放ったスペシウム133を圧縮した光輪を防ぎながら窮地に陥っていた目の前にいる異世界の光の巨人が、突然失われた同胞の放つスペシウム133を纏い新たな姿となったのだから。

当然理解は追いつかないだろう。

そんなゾーフィを前にシンジが口を開いた。

「リピアさんに頼まれたんだ。

ゾーフィ、君を共に止めてほしいと。

君は、リピアさんが望まないと知ってなお、この戦いを続けるのか?」

言葉だけではなくリピアの力を纏うことで見えてくる、リピアの本当の想い。

ゾーフィの想いを知っていても、共に戦った人間のために自らの命を手放し、その結果ゾーフィの心を壊してしまったことへの後悔。

そして今、自らの願いと、裏腹に多くの命の犠牲の果て、自らの命を取り戻そうとしてくれていることへの苦悩。

本来理的なゾーフィをそこまで追い込んでしまった、自身の思慮の浅さへの苛立ち。

そして、何よりも自身の力で、自身の言葉で止めたい相手には触れられないことへの葛藤。

そのために、シンジとZを使う形になってしまったことへの申し訳なき。

その想いを受け止めた故に、シンジとZは誓った。

ゾーフィを止めて見せると。

『リピアが…？』

君たちのその力から感じるのには真にリピアのスペシウム133だ。

だが、もう止まれぬよ。

儀式のための地獄の門はすぐそこに開いているのだから。

リピアからの批判や断罪は後で受けよう、その身をこの世に取り戻してからな。』

そういうとゾーフィは身構える。

リピアさんすみません、言葉では彼を止められない。

心の中で語りかけるとリピアの声が聞こえた。

頼む、彼を…倒してくれ。

その声はどこか苦悶に満ちていた。

Zはベリアロクを構え静かにスペシウムエネルギーとゼステイウムエネルギーを刀身に纏わせる。

二つのエネルギーは螺旋を描き刀身を大きく伸ばしその姿すら変え、青白く光る刀剣を生み出していた。

対するゾーフィも両手にスペシウム光輪を圧縮し、両掌に高密度の光輪を装備する。

両者とも感じていたのは、これはどちらかが圧倒する戦いではなく拮抗した力を持つ者同士の戦いになるということだ。

すなわち、どちらかの刃が相手を斬るまで終わらない泥臭い斬り合いになること。

両者とも構えたまま睨み合いが続き、先手を取りあぐねている。

その時、艦橋から闘いを見ていたミサトの頬から一筋の汗が流れ落ちた。

刹那、両者の刃がぶつかり合う衝撃と音が辺りを包み込む。

ゾーフィは光の星の執行者を任せられていただけのことはあり、いわゆる二刀流の状態で流れるように連撃をZに向けて叩き込む。

しかしZもシンジも負けてはおらず、着実に一刀で斬撃をいなしていた。

さらに、刀身に纏わせた二つのエネルギーは高速で交差する螺旋を描いており、その

力の奔流がゾーフィの光輪を弾き飛ばす。

予想通りどちらの優勢でもない闘い、しかし気を抜けば確実にどちらかの刃が相手を喰らい尽くす。

そのぶつかり合いの衝撃で付近の旧ネルフ本部跡は風化し始めている。

切り結びながらゾーフィは問いかける。

『私はずっと疑問に思っていた。』

碓シンジ、そしてZ。

何故君たちは戦っている？

ここは君たちの住む世界ではないし、すでに崩壊しかけた世界だ。

君たちの愛する人たちとそっくりな人たちがいるだけの世界だ。

君たちが命をかけて守るだけの価値が見出せない、答えろ。』

思っても見なかったゾーフィからの質問に思わず油断し、大きく弾き飛ばされるZ。

しかし当のゾーフィも追撃は仕掛けてこない、答えを聞かせろとその目が訴えている。

シンジは語りかける。

「確かに、君のいうとおり僕はこの世界の碓シンジじゃないし、ここには僕の本当の家族もいない。」

『ならば』

「だけど!!?」

一緒に戦った人達だ。

一緒にご飯を食べた人達だ。

一緒に笑った人達だ。

そして、父さんが守ってほしいと願った人達だよ。

僕が命をかけてこの人達を守るのに、理由はそれだけで十分だ。」

その言葉にZも続く。

『私も言ったはずだ。』

私は宇宙警備隊、その使命は宇宙のどんな命をも理不尽に奪わず守ることだと。

それに相棒が守りたいと願っているんだ、命をかけるのにこれ以上の理由はないだろ

う!!?』

シンジとZの思いを受け止め、ゾーフィはしばらく沈黙した後

「…分かった。

君たちが守りたいと思う気持ちと、私がりピアを取り戻したいと願う気持ちは同じものだ。」

愛ゆえ、ということだろうな。

私はどこかで、君たちが戦う理由が私の想いよりも下であればいいと願っていた。

私の思いよりも下であれば、リピアを取り戻すまでの障害はさほど大したものにはならないと思っていたからだ。

だが、想いに優劣などない。

もう、どちらかの命を持って決める他ないだろう。』

そう語るゾーフィはふたつの光輪をぶつけ合わせ、混ぜ合わせると一つの光球がその右手に現れた。

そう大きくはなく手に収まる程度、しかし超密度の光輪を掛け合わせただけのこととはあり、双方向の乱回転を生んでおり、中心は極小のブラックホールと化しているようで、そこだけ周囲が歪んでいる。

当然そんな力はいかに光の国の生命とはいえ命を削ることになり、現にゾーフィの体表からは時折皮膚が弾ける音が聞こえ僅かずつだが複数箇所出血も見られていた。

これで決めるつもりだ。

そう感じたシンジ達も二つのエネルギーをさらに力強く込めて、シンジのインフィニティの力で覆っていく。

この力も高めすぎたのか、Zの体表の装甲もダメージを負っていく。

その二つの力がぶつかりあい、周囲をホワイトアウトさせざるほどの衝撃を生み出した。

瞬間、ゾーフィの意識は別次元へと飛んでいた。

見たことのない、白と黒が反転した宇宙のような空間。

「ようやく会えたな、ゾーフィ。」

振り返ると、同化していた人間である神永シンジの姿をしたりピアが立っていた。

自身も借り受けている加持の姿になっていた。

『なぜ、何が起こっている？』

君は死んだはずだ、ということとは…

そうか、私も彼らに敗れて命を落としたのか。』

「早合点は君の悪い癖だゾーフィ、君はまだ死んでいない。

正確には、君の力と碓シンジの力がぶつかり合った結果この空間が形成されている。

私も先ほど全てを理解したが、リリン・インフィニティと呼ばれる種族にはそれぞれ

固有の力が宿っているようだ。

君が知り得ているかは分からないが、彼の義姉にあたる明という人物の力は破壊・分

解・活性の特性を有している。

しかし、碓シンジはもつとシンプルだ。

彼の力は、束ねることや繋ぐことに長けているようだ。

一言で言えば、絆の力というやつかな。

その力の恩恵で私たちは今意識を繋げられている。」

絆、目に見えないその存在を非科学的だと思っていたゾーフィ。

しかし、現実は目の前で死者の魂と意識を繋げている。

『そうか、私は一人で戦っていたが彼は多くの人と繋がっていたのだな。

リピア、君がゼットンを倒せたのも一人ではなく地球の多くの人の助けを得ることで成し得たのか。

君と繋がることで私も理解できた、こんな簡単なことにも気づけないだなんて。』

「私たち光の国の住人は、進化を遂げて大きな力を持つことで忘れていったんだよ。」

世界は一人ではない、誰かと支え合うから大きな困難をも越えられるということ。」

リピアの言葉に、柔らかい笑みを向けながらゾーフィは続ける。

『そうか、すまないリピア。』

私はあまりにも一つのことを目を向けすぎたらしい。

謝罪しよう、君の命を蘇らせることができないこと、そして君の想いを見ようともしなかつたことを。』

その言葉にリピアも微笑み返す。

「いいんだ友よ。」

共に安らかに眠ろう、生命の輪に戻り、叶うならば君とまた友であることを願うよ。』
その言葉を最後に空間はひび割れ、ゾーフィの意識は元の空間に戻る。

自らの光輪は砕かれ、Zの刃が胸を貫いていた。

ゆつくりと、旧ネルフ本部跡で崩れ落ちるゾーフィ。

そしてその姿を加持の姿に変えて横たわると、変身を解いたシンジが駆けつけ抱き起す。

『…私の完敗だよ。』

安心していい、この体の持ち主は君の見立て通り私の中で魂は眠っている。

肉体も憑依している間に自立して生きれるほどに回復しているから、葛城ミサトのところへ返してやるといい。』

その言葉に安堵するシンジ、しかしゾーフィがシンジの胸ぐらを掴む。

『私の命は後わずかと言うところだ。』

冥土の土産に教えてもらおうか、何が君をそこまで強くした？

インフィニティとなったことやウルトラマンとして戦ったことが君を戦士にしたの
だろう。

だが、それと強さの根底にあるものは別の話だ。

答えてくれ。』

自らの過ちと向き合うためにも。

ゾーフィの言葉からはそんな意図を感じ取った。

ならばと、シンジは口をひらく。

「…誰かを守りたいという祈り、その信念を貫く覚悟。」

それを聞くとゾーフィは加持の顔で笑いかける。

『それが君の強さか…』

ならば急げ、碓ゲンドウがインパクトを起こそうとしているのはこの世界ではない。

マイナス宇宙を経由して全ての因果の集まる次元へと向かった。

それこそ、君がいた世界だ。』

ゾーフィの置き土産とも言うべき情報、それは碓ゲンドウの真の狙いとも呼べるもの

であり、シンジとゼットは驚愕する。

『そこで、君の世界の父の中にある力を取り戻すことによつて奴は全てにケリを付けるためのカードが揃うと言っていた。

私に勝つて貰いた信念だ、この先も貫いて見せる。』

そういうと、ゆつくりと瞼を閉じたゾーフィ。

加持の中にあつたゾーフィの魂は抜け、よく見ると待っていたようなりピアの魂と共

にどこかへ消えて行った。

「分かったよ、ゾーフィ。」

改めて誓うよ、これから先の未来も守ってみせるさ。」

そうシンジは見えなくなったゾーフィの魂に誓った